

K-690

山形県大江町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

# 橋上遺跡

発掘調査報告書

1984

大江町教育委員会

# あいさつ

真理の探求と文化の形成は国家の使命である。又、衣食の充実と民生の安定は政治の要道である。本町橋上遺跡の発掘は真理の探究でもあり、食糧の増産でもある。絶対的に主食の不足している日本においては農地の改善と生産の向上を図らねばならないことは論をまたない。単に文化の破壊という一面にのみとらわれるべきでない。

真理探究は未知の世界にメスを入れなから解明されない。特に埋蔵文化財は数千年、數万年の深いペールに包まれている。大江町の埋蔵文化財は量からいっても内容からいっても決して他町村に劣るものではない。しかし、今まで解明された部分は極くわずかである。いつかは解明されなければならない研究の段階に進んでいた。

今回の橋上遺跡の発掘は埋蔵文化財の研究としては画期的大規模な発掘である。本町にとってこれまでその例を見なかったし、今後も恐らくなかろうと思う。それは橋上遺跡に匹敵するような広大な遺跡は見当らないからである。

果せるかな、発掘の途上において、大量の石器類と多量の土器類が発見された。従って発掘計画の変更や資材の補充に思いがけない緊急対策が必要とした。しかし、予期以上の成果として発掘を終了することが出来たことは慶賀に堪えないところである。

本報告書はこく暑の中に研究に没頭された調査団の報告である。山形大学のご協力のもとに新進精銳の研究者の英知を集めての集大成である。衷心より感謝の意を表し、謹んで関係各位と一般読者に贈りたい。

もとより研究の分野も広く、かつ研究の深さにおいて、今後の解明を必要とする部分もあるので識者の助言とご教示を期待してやまない次第である。

昭和60年3月

大江町教育委員会

教育長 佐竹誠



## 例　　言

1. 本報告書は、大江町教育委員会が昭和59年度に実施した「小規模排水特別対策事業」にかかる緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大江町教育委員会が主体となり、昭和59年5月7日より8月10日まで延べ82日間実施した。
3. 調査体制は次の通りである。

調査主体 大江町教育委員会

調査担当者 調査委員長 高山法彦（大江町文化財保護委員長）

調査副委員長 犬飼安太郎（朝日町立上郷小学校教諭）

調査委員 渡辺正見（大江町文化財保護委員）

〃 高橋郁夫（寒河江市立陵南中学校教諭）

〃 海野丈芳（上山市立東小学校教諭）

調査補助員 石井浩幸（山形大学教育学部生）

調査指導 山形県教育庁文化課

調査協力 大江町農林課

事務局 事務局長 安食順一（大江町教育委員会社会教育課長）

事務局員 林 尚夫（大江町教育委員会社会教育係長）

事務局員 木村 誠（大江町教育委員会社会教育主事）

4. 本調査において、山形大学教育学部助教授阿子島 功氏より御指導・玉稿を賜った。また、山形大学講師加藤稔氏、川崎利夫氏、佐藤禎宏氏、長沢正機氏、山口博之氏より御指導・御助言を賜った。ここに記して謝意を申しあげる。

5. 拝図縮尺は、住居跡・土壌 $\frac{1}{40}$ とし、遺物については各図にスケールを示した。

6. 本報告書の執筆は高山法彦、犬飼安太郎、高橋郁夫、海野丈芳、石井浩幸があたり、それぞれに文末に名を記した。編集は高橋郁夫が担当した。挿図・拓影図・図版の作成は海野丈芳、石井浩幸、山形大学歴史学研究会考古部会学生が担当した。

現地調査と資料整理には次の方々があたられた。記して深く謝意を表わすものである。

### ○遺跡発掘に御協力いただいた方

#### 橋上地区民

柏倉 義美	柏倉 吉代	柏倉 喜広	柏倉ふじ子
柏倉 傳八	柏倉 安雄	柏倉 真一	柏倉 梅代
柏倉 清助	柏倉 寅雄	柏倉 兵七	阿部きく子
柏倉 清六	柏倉 初子	柏倉美津子	阿部 清藏
柏倉 武	柏倉兵太郎	池田 正雄	
柏倉 良子	柏倉なか子	柏倉 広一	

山形大学生

石井 浩幸	齊藤 和浩	船橋理佐子	秋保 妙子
齊藤 雅樹	松本 強	東海林和佳	八鍬チユキ
蒲生 智子	平田 正樹	佐藤 み雪	松野美保子
鈴木 恵美	五十嵐雅之	小川 健重	二瓶 由佳
森岡美和子	鈴木 直彦	岩見 和泰	高橋亜貴子
小林 嘉博	川村 豊	富樫 枝美	

松田 則子

伊藤 昌子

伊藤由美子

石沢美代子

林 克美

菊地登美子

## 目 次

I 遺跡の環境	1
1. 遺跡の地形環境	山形大学教育学部 阿子島功 1
2. 周辺の遺跡	高山法彦 8
II 調査の経緯と方法	10
1. 調査に至るまでの経過	高橋郁夫 10
2. 調査の方法	高橋郁夫 10
III 遺構と遺物	13
1. 遺構	高橋郁夫 13
2. 遺物	23
A. 土器・土製品	犬飼安太郎・高橋郁夫 23
B. 石器・石製品	海野丈芳 48
C. 橋上遺跡における石器製作作業の分析	石井浩幸 72
IV まとめ	99
1. 橋上遺跡にみる縄文集団の定住と移動	石井浩幸 99
2. 遺跡について	高橋郁夫 107

## 図 版・挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図・周辺の遺跡	9
第2図	グリッド全体図	11
第3図	遺構配置図	12
第4図	第1号住居跡	14
第5図	第2号住居跡	15
第6図	第6号住居跡	17
第7図	第7号住居跡	18
第8図	第11号住居跡	19
第9図	第15号住居跡	21
第10図	出土土器(1)	24
第10図	出土土器(2)	25
第10図	出土土器(3)	26
第10図	出土土器(4)	27
第11図	土器実測図(1)	29
第12図	土器実測図(1)	30
第12図	土器実測図(2)	31
第12図	土器実測図(3)	32
第12図	土器実測図(4)	33
第12図	土器実測図(5)	35
第12図	土器実測図(6)	36
第12図	土器実測図(7)	37
第12図	土器実測図(8)	38
第12図	土器実測図(9)	39
第12図	土器実測図(10)	40
第13図	土偶実測図(1)	42
第13図	土偶実測図(2)	43
第14図	土製品実測図(1)	44
第15図	土器実測図(1)	46
第15図	土器実測図(2)	47
第16図	石器実測図	49

第17図	石器の形態及び出土数量	49
第18図	石器実測図(1)	50
第18図	石器実測図(2)	51
第18図	石器実測図(3)	53
第18図	石器実測図(4)	54
第18図	石器実測図(5)	55
第18図	石器実測図(6)	56
第18図	石器実測図(7)	58
第18図	石器・石製品実測図(8)	59
第18図	石器実測図(9)	61
第18図	石器実測図(10)	62
第18図	石器実測図(11)	63
第18図	石器実測図(12)	64
第18図	石器実測図(13)	65
第18図	石器実測図(14)	66
第18図	石器実測図(15)	67
第19図	石器集中分布図	72
第20図	石刃状剥片	74
第21図	石核分類図	76
第22図	石核実測図(1)	77
第22図	石核実測図(2)	78
第23図	母岩1接合実測図	81
第24図	母岩4接合実測図	82
第25図	母岩5接合実測図	84
第26図	母岩9接合実測図	85
第27図	宮城県仙台市茂庭遺跡の石器接合資料	87
第28図	剥片生産技術	88
第29図	体部調整	89
第30図	石刃状剥片長幅相関ヒストグラム	90
第31図	石刃状剥離角分布図	90
第32図	素材と製品の関係図	92
第33図	S T 1 1 剥片分布図	95

第34図	S T 1 1 実堀状況	95
第35図	剝片接合概念図	96
第36図	石器集中分布図	100
第37図	集団の移動概念図	102
第38図	S T 9・S T13・後期住居跡切り合い模式図	102
第39図	縄文時代中期の遺跡の分布と群別	103
第40図	寒河江市向原遺跡出土土器 (1)	105
第40図	寒河江市向原遺跡出土土器 (2)	106
 図版 1	橋上遺跡遠景	109
図版 2	獣入式・発掘風景	110
図版 3	発掘風景	111
図版 4	S T14住居跡・S T11炉跡	112
図版 5	S T 7 住居跡・S T 8 住居跡	113
図版 6	石器 (1)	114
図版 7	土器出土状況・土鉢	115
図版 8	出土土器	116
図版 9	S T15カマド跡	117
図版10	大珠・石核	118
図版11	石器 (1)	120
図版13	石器 (2)	120
図版13	石器 (3)	121
図版14	石器 (4)	122
図版15	石器 (5)	123
図版16	石器 (6)	124
図版17	石器 (7)	125
図版18	石器 (8)	126
図版19	S T15住居跡	127
図版20	遺構全景	128

# I 遺跡の環境

## 1. 橋上遺跡の地形環境

A. 橋上遺跡の地形的位置

山形大学教育学部助教授 阿子島 功



写真1 小新よりみた橋上段丘 (北より南をぞむ)

X印が発掘区。河岸の崖には第三紀中新凝灰岩が露出。段丘面区分の記号0, -1, -2は図2と同じ。F. 泡らん原面。

橋上遺跡は、月布川の南岸の河岸段丘面上にある。この河岸段丘面の高度は、南側の山麓(長伝寺)付近で約180m、北端の最も低いところで約160mであり、南より北へ(山麓より川へ)むかってごくゆるい傾斜地となっている。段丘面の北端における現河床との比高は約25mであり、段丘堆積物は層厚約3mである。

橋上遺跡の立地している河岸段丘面を仮に橋上段丘面と命名する。写真2のように、橋上、十八才、小新付近の月布川の河岸段丘面は、橋上段丘面より上位にある段丘面が2段以上、橋上段丘面より下位にある段丘面が2段以上(河床より20m位の面、5mの面など)にわけられる。

橋上遺跡付近の橋上段丘面は、段丘堆積物(砂礫層)の厚さが次に記すように数mであり、主に月布川の側方侵蝕作用で形成された侵蝕段丘面(岩石段丘面)である。<sup>\*</sup>

すなわち、段丘の西側の崖には第三紀中新世の凝灰質砂岩(山形, 1957, p.221 本郷層の橋上砂岩部層)が露出しており、北側の崖では崖端より約2m下ったところにわき水があり、ここが段丘砂礫層と基盤岩の凝灰岩層との境(不整合面)になっているとみられる(写真1の0付近)

橋上遺跡の立地する段丘面は、前記のように南より北へむかってごくゆるく傾いた傾斜地と

\* 段丘面を形成作用に注目して区分すると(侵蝕段丘面・堆積段丘面)に、構成している物質に注目して区分すると(岩石段丘面・砂礫段丘面)になる。

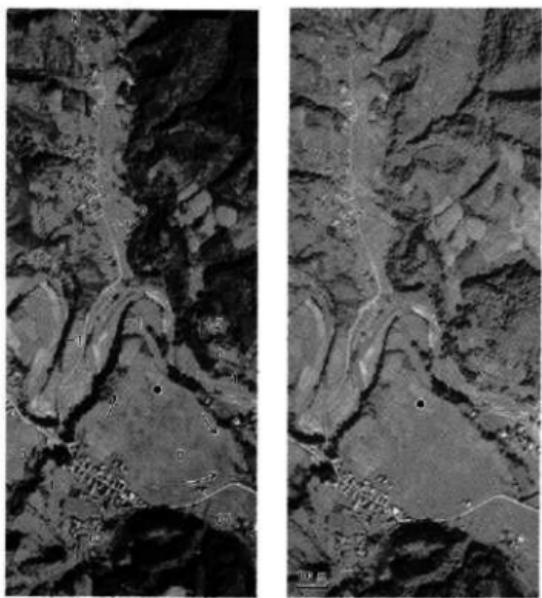


写真2 橋上付近の河岸段丘面区分

橋上段丘面を0として、より高い段丘面に順に+1、+2と記入、同じく、より低い段丘面に-1、-2と記入した。また橋上段丘面をおおう肩状地（崖鎌）地形に0+と記入してある。Kは小折地すべり地<sup>14</sup>C年代測定標本の発見されたところ。

空中写真は建設省国土地理院C T O - 76-21, C 3-15, 16 (1976年撮影)。

●印（発掘事務所をおいたところ）をそれぞれ右目・左目の目標にして立体視をします。

図1 橋上～左沢間の月布川沿い河岸段正面  
橋上段正面(ハッキング)および左沢段面(めりつぶし)のみ抜印。



なっているが、長伝寺～橋上の集落のあたりはかつて橋上面が月布川河床であったときに長伝寺の谷から吐き出された土砂によって形成された扇状地である。長伝寺の谷はこの扇状地面より一段低く切り込んだ面(写真2の一画面)を伝って西へ流れている。しかし橋上の集落の背後のいくつかの小谷からの沢水は、相変わらず橋上面へ注いでいる。橋上遺跡の付近にはごく小さい起伏があり、写真2の矢印はそのごく浅い谷筋の位置を示している。これらの微地形は橋上段丘面が月布川のはんらん原面から離水した(段丘化した)後も、現在に至るまで形成作用がつづいているといえる。

〔橋上段丘面の形成時代〕 橋上付近において段丘面の形成時期を直接指示する資料はない。月布川下流の左沢の市街の立地する段丘面の構成層の絶対年代が炭素14年代測定法により次のように判明している(いずれも図1の地点C付近; 豊島, 1977ほか)。

地 点	地表面高度 (m.a.s.l.)	同河床との 比 高 (m)	試料の地表 下深度 (m)	年 代 (Y. B. P.)	Code	試料	採 集 者	採集年
大江町左沢	125	10	-3.7±	31,330± <sup>2,390</sup> <sub>1,840</sub>	GaK-4560	木片	安孫子政行 米地文夫	1972
	115+	10	-3	25,775±1,155	TH-171	木片	豊島正幸	1976

1/50,000地形分類図「荒砥」説明書(山形県, 1984) より

したがって、左沢市街ののっている段丘面の堆積物の堆積期は約3.1～2.5万年前とその前後の時代である。さて、橋上段丘面と左沢の段丘面との時代関係であるが、図1に示すように、段丘面の高度関係の追跡によって、橋上段丘面より一段低い(新しい)段丘面が左沢の段丘面であると予想される。両者の高度関係は著しくへだたっているのではなく、高度差が数mの崖で境されている程度である。左沢～橋上の中間で段丘面の追跡に誤りがあるかもしれないが、図1では比較的幅広く連続している段丘面(橋上面)とこれよりわずかに低い段丘面(左沢の段丘面)という関係に注目して図を描いてある。したがって、橋上段丘面の形成時代は「約3万年前より少々古い程度」と予想される。

なお、小新の地すべり地(写真2, 地点K)において、地すべり粘土にはさみこまれている木片の年代が32,190年前よりは古い(吉川・他, 1984; GaK-9801)。この地すべり地と段丘面との新旧関係をつけることは写真2にみられるように困難である。

## B. 橋上遺跡の土層

〔標準土層断面〕 発掘範囲のほぼ中央にあたる（M、8）地点の土層断面を図2-1に示す。ここでは上より下へそれぞれ、

I	黒褐色	細礫・粗砂まじり粘土	20cm	いわゆる 黒土層
II	同 上	I層とII層の漸移帶	10cm	
III	黒 色	細礫・粗砂まじり粘土	20cm	
VI	暗褐色粘土	（段丘層最上部）	10cm以上	

となっている。遺物はII～IV層中より検出され、III層とIV層の境界付近が遺構の確認面である。すなわち、遺構が深くて段丘層最上部の暗褐色粘土に切り込んでいる場合は、黒色の遺物包含層とのコントラストによって遺構プランの確認が容易であるが、遺構が浅い場合には黒色の細礫・粗砂まじり粘土を地山層としているため遺構プランの確認はむずかしい。

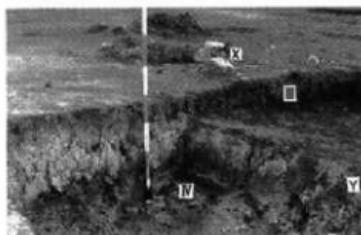


写真3 配石2付近の土層断面

X 遺構検出面 Y 確認面 III Ⅲ層(包含層) IV 地山層(段丘堆積物最上部)

地山層となっている段丘層上部は、1では粘土であるが、発掘区西部の2（L,5 ; ST15の北）では地表下40cmより黄褐色粘土質細砂60cm、砂礫10cm以上であり、同北西部の5（K,3）付近では 地表下50cmより 暗褐色の礫まじり粗砂30cm、褐色の微細砂10cm、黄褐色の礫まじり粗砂30cm、あるいは地表下80cmより砂礫層60cm以上などとなっている。これらは発掘後にトレンチを掘って観察した（図2, 3; 写真4）。

柱状図1～5においてタテ線を付した部分がいわゆる黒土層であり、前記のI～III層にあたる。この黒土層の層厚は発掘区中央で50cm程度であるが、発掘区西縁へむかって厚くなってしまい、4付近で140cmに達する。すなわち、発掘区の西縁に沿って、段丘層上面に浅い谷が刻まれ、これを埋めて黒土層が堆積している。4では、地表下100cmまで遺物破片が多く含まれている。その下位の地表下100～140cmの間の無遺物の黒色粘土の<sup>14</sup>C年代測定を東北大理学部地理学教室へ依頼したところ、5,680 ± 150 年 B.P. (T H-1163) となった。この年代は、段丘層上面に刻まれた浅い谷のほぼ基底の年代を示すことになる。

また地表下100cmまでの遺物破片を含む黒土の堆積した時代は、中央区の遺構と同時期あるいはそれ以後（2次堆積の場合を考え）である。

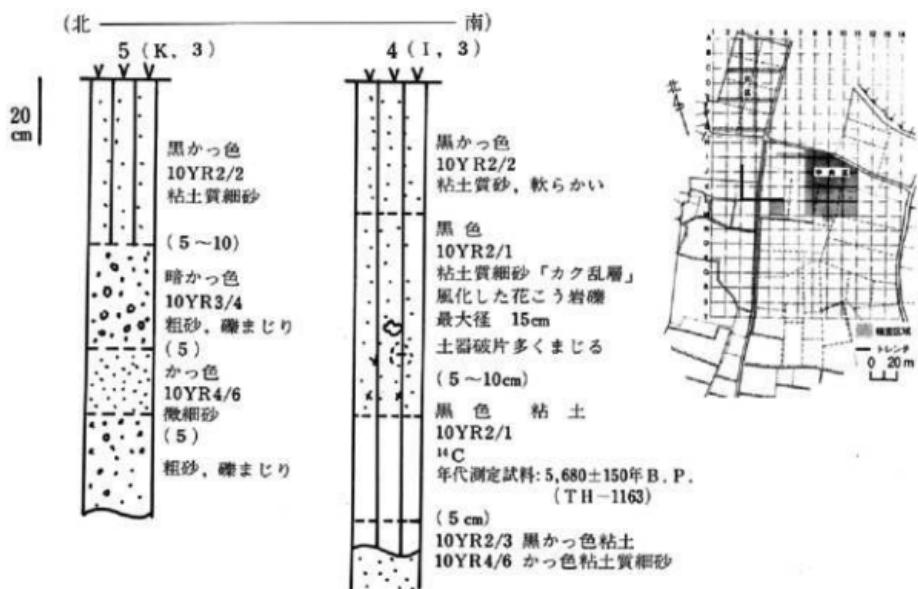
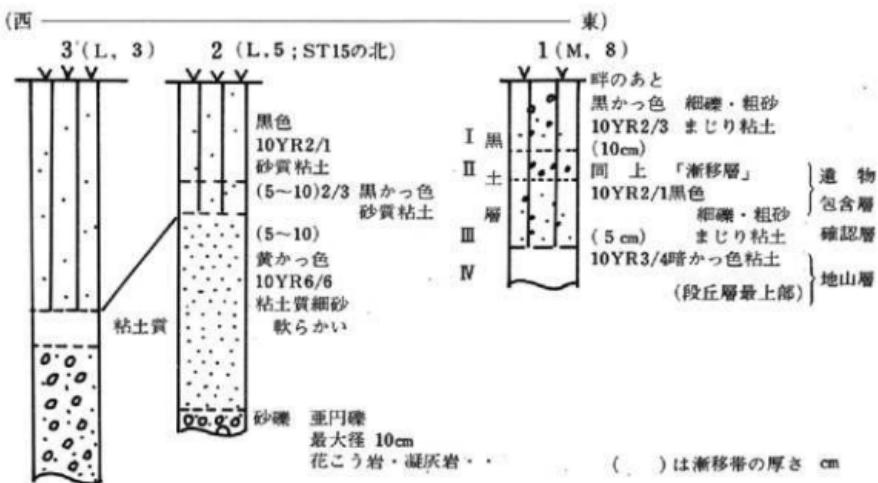


図2 主な土層柱状図およびトレンチの位置図。

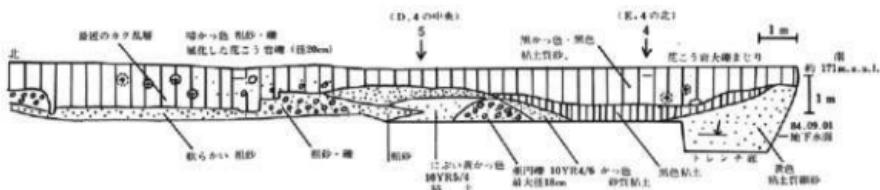


図3 発掘区西側の南北方向トレンチ

図2 柱状図参照



写真4 発掘区西側の南北方向トレンチ

測量ポール(2m)が柱状図4の位置を示す。  
南より北へ写す。

### C 橋上遺跡の立地した地形環境

橋上遺跡のある段丘面は、約3万年前よりは古い段丘面であり、縄文時代中・後期（4千年前後）に集落が営まれたときの地形は現在のそれとほとんど同じである。

それは月布川河床より25m程高い乾いた台地面であり、台地の端にはわき水が、山のつけ根付近からは沢水が得られた。植被におおわれた台地の表面を掘れば厚さ数10cmの黒土が、さらに掘り込めば河原石（段丘砂礫層）があらわれた。黒土は地表付近での土壤形成作用のみならず、背後の山地の沢水の氾濫によってもたらされたものもあると考えられる。台地を刻むごく浅い谷筋に沿っては、縄文中・後期以降あるいはそれ以降に厚さ1mの黒土が堆積している。

### 文 獻

阿子島 功・米地 文夫・西谷 克彦（1984）：1/50,000地形分類図・同説明書。山形県 p.14-28  
豊島 正幸（1977）：最上川中流部・山形・長井両盆地間の河岸段丘。

東北地理、29-4、p.221-227

山形 理（1957）：山形盆地西部・左沢-大井沢地域の地質。

山形大学紀要（自然科学）4-2 P217-228

吉川 謙造・三上登志男・石川 信一（1984）：小耕地すべりの発生年代。山形府用地質。

4 p.47-49

## 2.周辺の遺跡

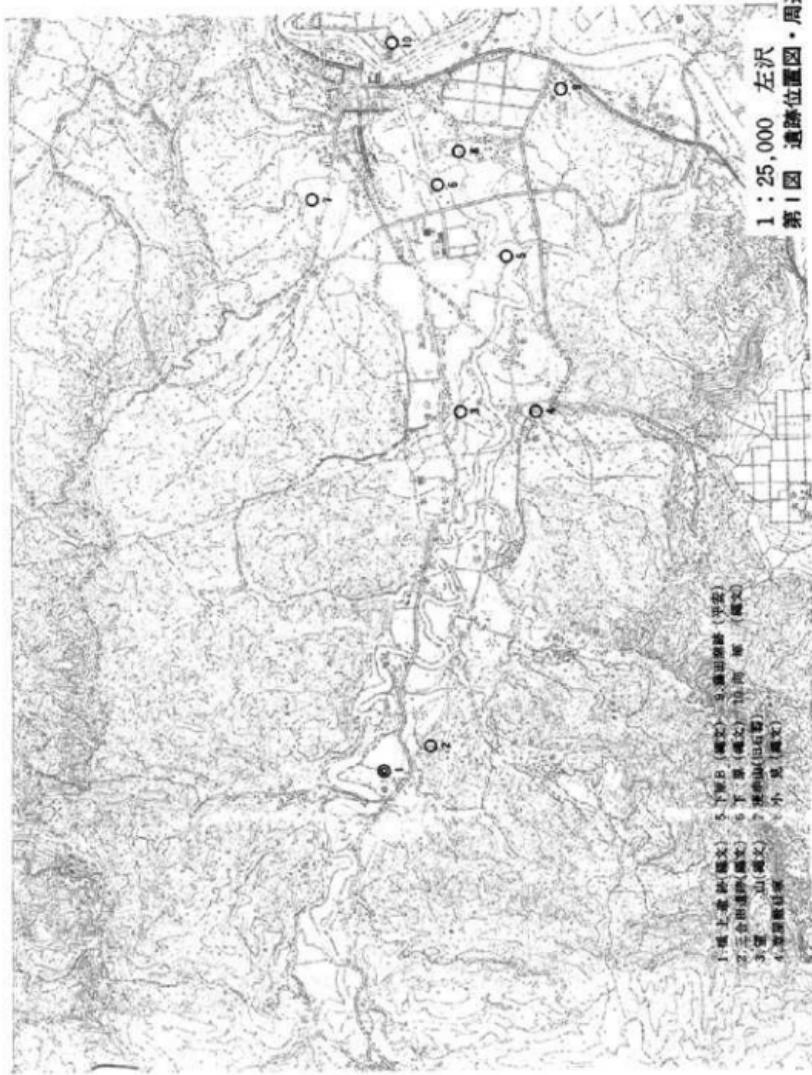
周辺の遺跡として最も近い所は十八才遺跡である。橋上遺跡の西で、沢を隔てて同じ高さにある。又、十八才の北西300mの大久保にも存在するし、更に月布川をさかのばれば、月布高、貫見、沢口向田、柳川もある。少し離れると南又や大体もあるし、更に拡大して石器の散布地として挙げるならば古寺や朝日岳まで数えることが出来る。

橋上遺跡の下流を見ると、望山、堂屋敷、小見、下原、小漆川等の遺跡があり、しかも散布地が少量ではあるがかなり広範囲にわたっているので、今日の集落数よりも多いと捕えている。中でも橋上遺跡は面積から見れば最大規模である。又、月布川の侵蝕作用によってらっぽ状に平野が開けているが、その平野部に臨んだ遺跡で、遠く村山平野まで展望出来る位置に存在している。

(高山法彦)

第1図 通路位置図・周辺の遺跡

1 : 25,000 左沢



## II 調査の経緯と方法

### 1. 調査に至るまでの経過

本遺跡は昭和41年に山形大学名誉教授柏倉亮吉氏と沖津常太郎氏によって調査され、他の遺跡と共に「月布川流域の原始遺跡」(1965大江町教育委員会)に収録された。

その後、遺跡の北区の南側の畠地を開田することになり、大江町教育委員会が主体となって、昭和51年8月5日～9月26日まで延べ5日間の緊急発掘調査を実施した。長期間にわたる調査期間にもかかわらず延日数が少ないので、途中の集中豪雨によって中断したからである。この時の発掘調査面積は48m<sup>2</sup>で、土器(縄文時代中期末～後期前葉)と石器30点が出土したが、住居跡は検出されなかった。ただ子供の頭大の河原石を直径50cmの環状にならべ、中央部に長さ30cmの棒状の河原石を立てた配石遺構が検出されている。層序は耕作土20cm、漸移層20cm、礫まじり黒褐色土層40cm、黒色土層45cm、砂まじり礫層(段丘堆積物)であった。

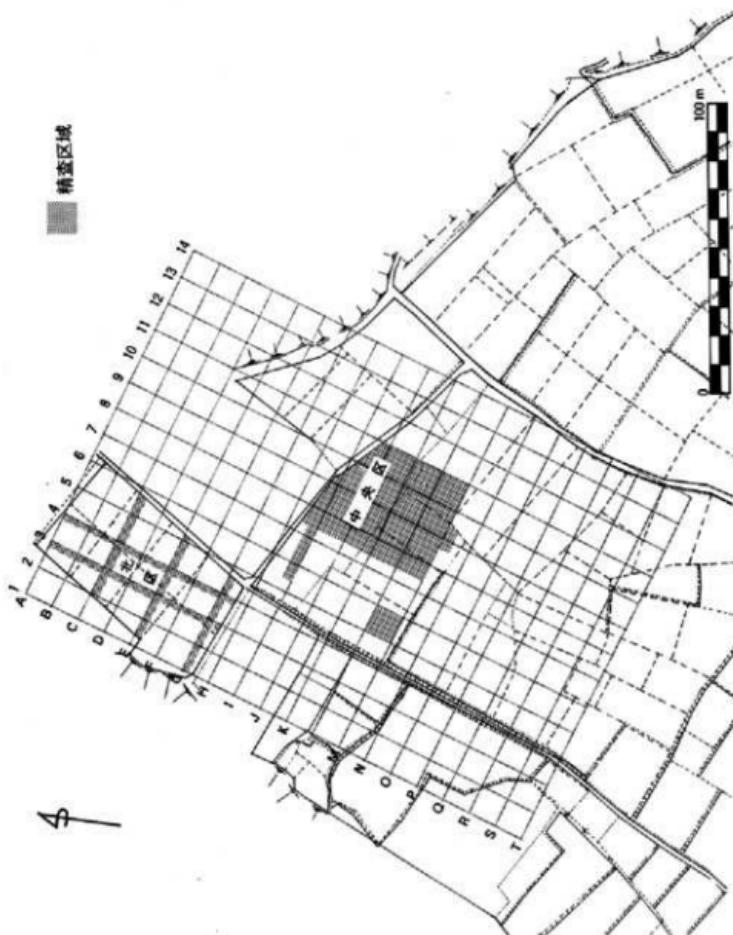
昭和59年度に本遺跡が「小規模排水特別対策事業」として9.7haが圃場整備されることになった。このため大江町教育委員会は大江町産業課での計画を確認し、山形県教育委員会文化課に連絡して指導をうけた。発掘調査に先だって、遺跡の範囲確認のために、昭和58年12月8日に分布調査を実施した。調査は遺跡全体にグリッド網をかぶせ、それぞれの頂点に1m×1mのマスを試掘した。深さは遺物包含層までとし、遺物が出土したグリッドを線で結び、範囲を確認した。その面積は22,820m<sup>2</sup>と広大であった。この結果をもとに、山形県耕地課・文化課・大江町産業課が協議して、事前に緊急発掘調査を実施し、記録保存することで合意をえた。調査は、圃場整備工事が行われる前の昭和59年5月7日から8月10日まで、実質65日間にわたって行われることになった。

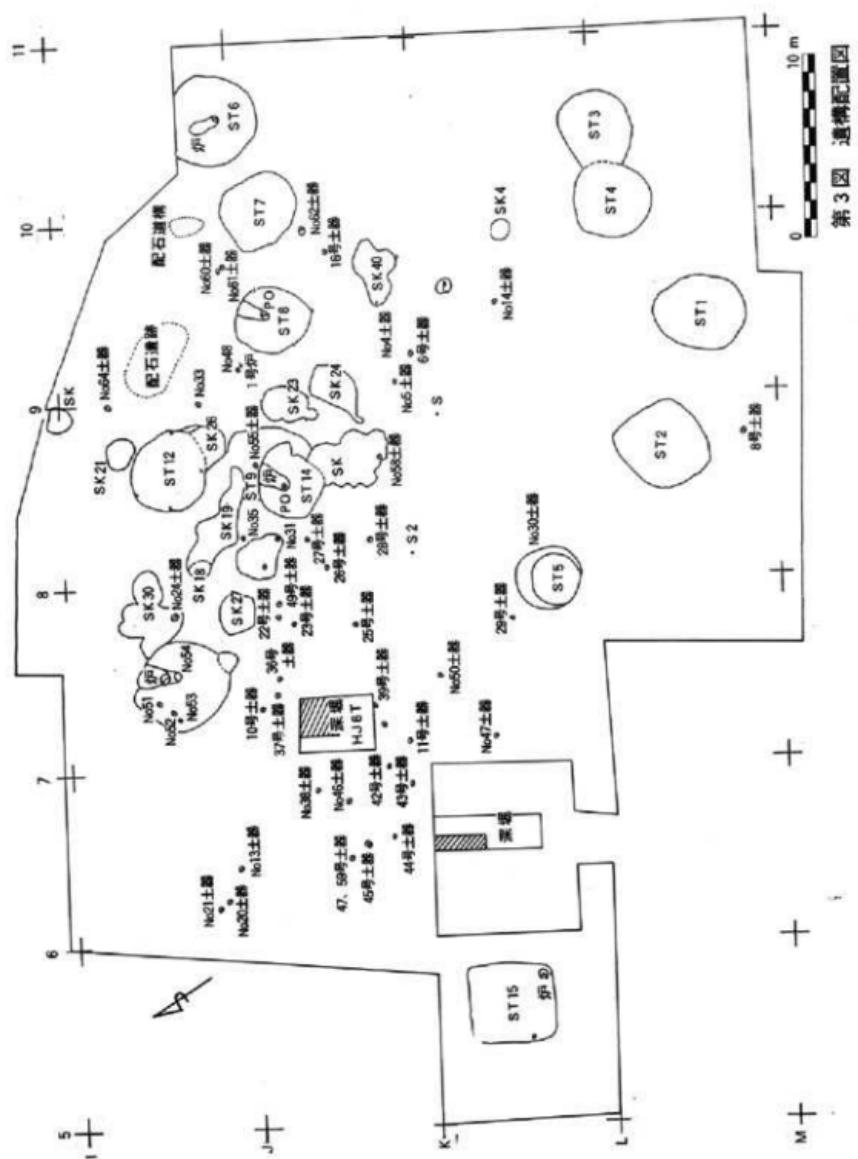
### 2. 調査の方法

橋上遺跡は、昭和58年12月8日に大江町教育委員会によって、緊急発掘調査のための分布調査を実施した。20mごとに1m×1mの試掘坑を発掘して遺跡の範囲を確認した。その結果、遺物の出土状況からみて遺跡の範囲は約2,300m<sup>2</sup>と確認できた。このように遺跡が広範囲に広がっているためにグリッド法による全面発掘は不可能に近かったので、試掘による分布調査で遺跡の中心と考えられる地点を調査の重点を置くことにした。グリッド原点は、圃場整備の測量坑を基準において、Y軸を西から1・2・3……、X軸を北からA・B・C……というように10mごと区切った。さらに北辺と西辺の内側の交点との組合せでA-1、A-2、A-3というようにグリッド名を呼称した。分布調査で遺物が集中的に出土した北区と中央区を重機で20cm粗削ぎをした。はじめに北区(水田)に南北に2本、東西に3本の2m巾のトレンチを設定し、遺構の検出ができた段階で、そこを拡張する方法で精査を開始した。しかし礫まじりの黒色土層のために多量の土器・石器・配石遺構などが検出されたが、住居跡の確認が極め

て困難であったために、これを断念した。

その後、調査の主力を中央区に移した。ここでもグリッド線にあわせて、東西に2m巾のトレンチを2本設定し、2mごとに粗掘りをして遺構を検出した段階で拡張していった。土器の包含状態から2枚の文化層が認められたが、土色・土質の相違として区別できなかったために、すべての層を地山までに下げる、住居跡の検出につとめた。また、剝片や一括土器は10m×10mの1グリッド毎にあげたために遺物整理にきめ細かさに欠ける点があったことは反省すべきであった。しかし、住居跡の床面から検出された遺物類はすべて記録してある。ただ記録の仕





第3図 造標配置図

## VI 遺構と遺物

### 1. 遺構

今回の調査で発見された遺構は、竪穴式住居跡、炉跡、土坑、埋甕群、柱穴、配石、集石遺構などである。遺物包含層は、第II層（漸移層）と第III層（黒色砂質粘土層）であるが、この面での遺構確認が困難だったために第VI層（黒ないし黄褐色粘土層=地山）まで下げて検出につとめた。その結果、住居跡を15棟検出することができた。

#### 第1号住居跡 第1号住居跡

L-9グリッドに位置し、ほぼ円形を呈している。第VI層上面でプランを確認したもので、中央区の南端にある。南北径5mを計り、床面は平坦である。床面の東側に土壤があり、その北隣りに焼土層が検出された。それらの切り合いから住居跡よりも土壤の方が新しいと考えられる。土壤の性格については、底面が不整なことと平面プランが乱雑なことから風倒木と考えている。炉跡は確認されていないが、焼土層が地床炉とも考えられる。柱穴は5本検出されたが、壁際のものがほとんどであり、所謂壁柱穴である。主柱穴・支柱穴は確認できなかった。壁は確認面から15~20cmの高さがあり、立ちあがりは急である。遺物は床面全面から出土している。

#### 第2号住居跡

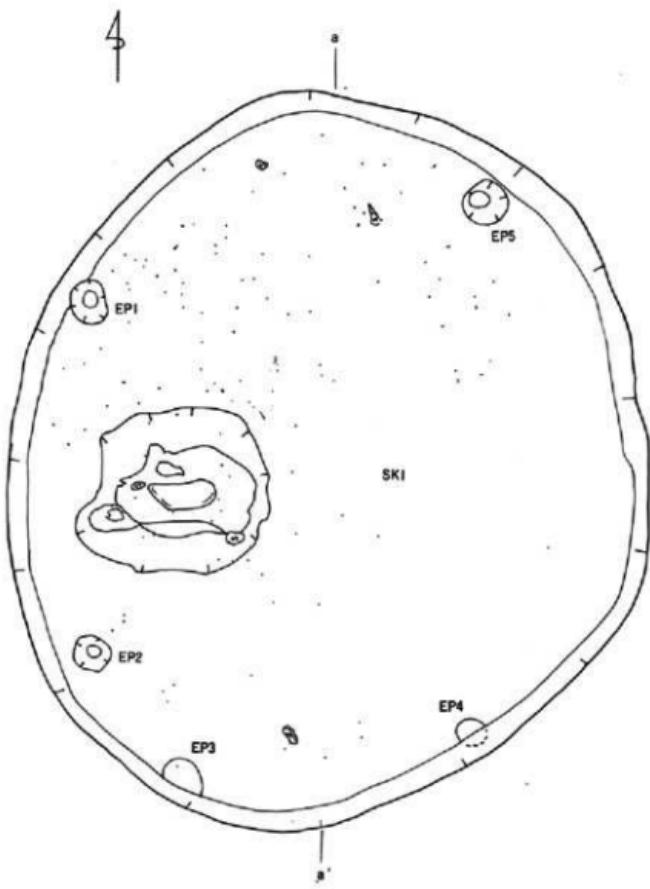
L-8グリッドに位置し、第1号住居跡の西側にある。平面プランは南北にやや長い略円形である。南北径は5.7mを計る。床面は平坦であるが、東側がやや高く、西側が低くなる。炉跡は確認されていない。内部に6本の柱穴が検出されたが、この住居跡を構成するものとは考えにくい。壁は西側で22cmの高さがあり、立ちあがりが急であるが、東側は緩やかである。遺物は床面より130点出土している。

#### 第3・4号住居跡

L-9~10グリッドに切りあった状態で検出された。第3号住居跡を第4号住居跡が切っており、前者は周壁が浅く、遺物も少ない。炉跡は両方とも確認できなかった。

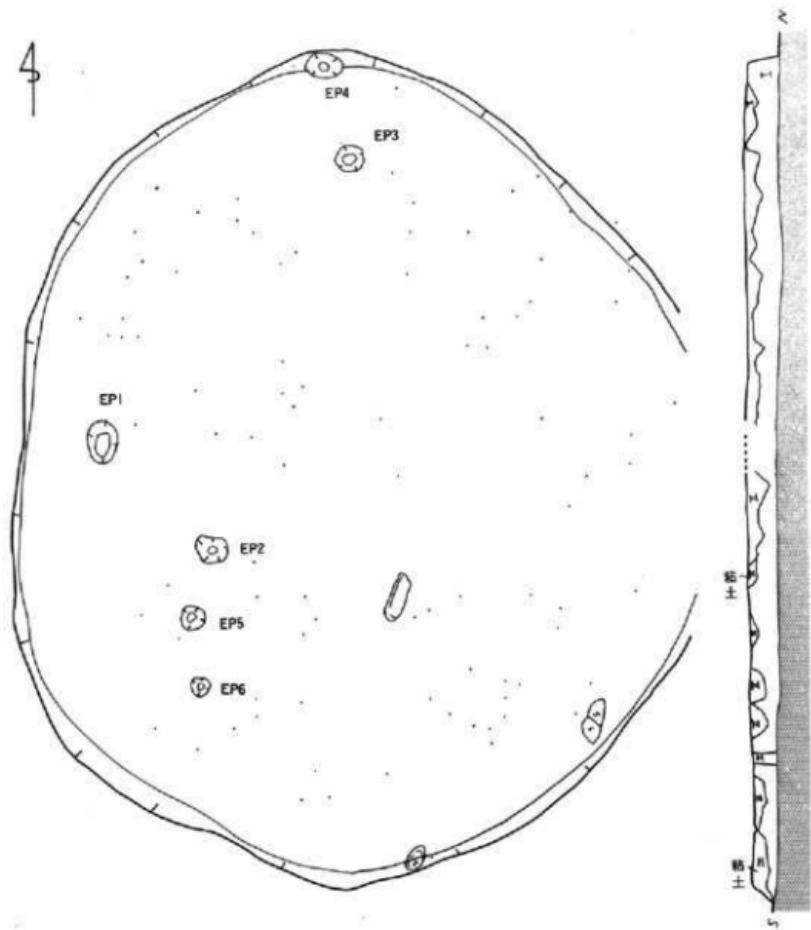
#### 第5号住居跡

K-7~8グリッドに位置し、土壤を伴っている。平面プランは直径4.8mのほぼ円形である。床面は平坦であり、壁の立ちあがりは緩く浅い掘こみである。遺物は割合に少ない。柱穴は8本検出されたが、他は不明である。炉跡はみられなかった。



0 2

第4図 第1号住居跡



第5図 第2号住居跡

### 第6号住居跡

I-J-10グリッドに位置し、第13号住居跡と重複する。最初に炉跡が検出されたためにその面で、平面プランを確認しようとした。大きさは4.8mの円形である。第13号住居跡は、南北径6.6mと大形である。両者の関係は第13号住居跡の上に建てかえによって第6号住居跡が構築されたものと考えられる。遺構検出層が第III層中であり、しかも礫まじりのために、壁面がはっきり確認できなかった。また、同じような事情で柱穴も検出できなかった。壁面の一部に20~30cmの大きさの河原石を一列にならべている部分がみられた。炉跡は住居跡の中心から東壁にかけてある複式炉である。全長1.4m、最大幅85cm、基軸方向N-15°-Eを計る。床面は黄褐色粘土を2~3cm張った。所謂張床である。土器は縄文中期大木10式期に比定できる。

### 第7号住居跡

I-9グリッドに位置し、6号住居跡と隣接している。プランは略円形であり、南北径4.2m、東西径3.8mである。柱穴は19本確認できたが、主柱穴は4本で、壁柱穴は8本である。壁は薄く、床面から10~15cmである。炉跡は住居跡の中心部から南よりで検出された。10~15cmの大きさの河原石を6個組みあわせた石囲炉である。この石囲いの中には直径80cmにわたって焼土が検出されている。土器から推定して、縄文中期大木10式期に比定できる。

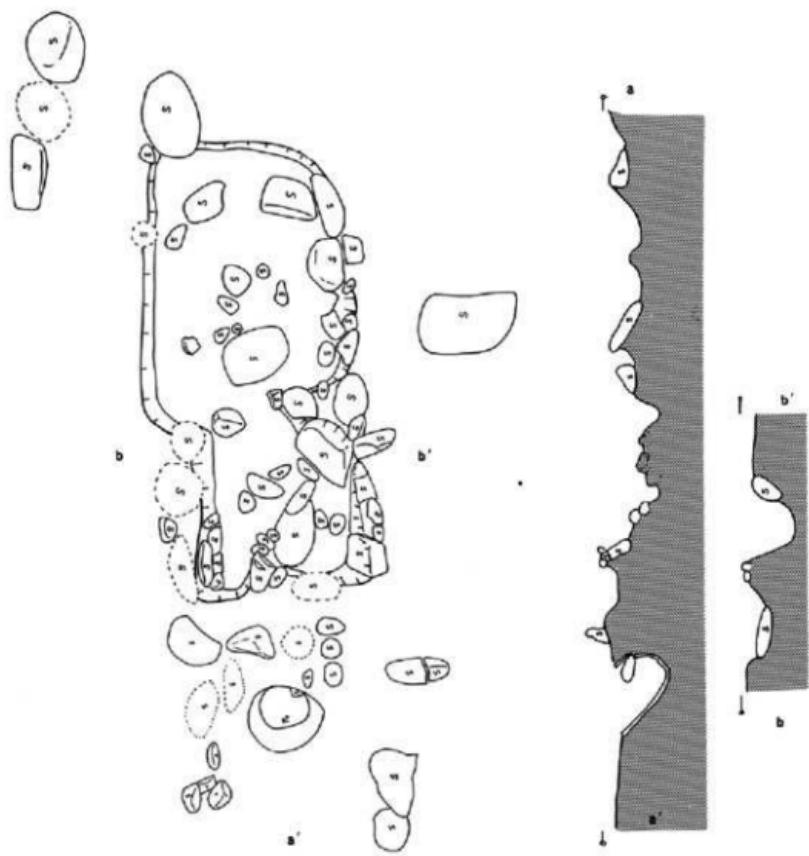
### 第8号住居跡

J-9グリッドに位置し、不整円形を呈している。第III層下部から第VI層上にかけてプランが確認されたものである。東西径3.6m、南北径4mとやや小形である。炉は複式炉であるが、全長1.2m、最大幅1mと寸づまりで作りが粗雑である。柱穴は9本確認されているが住居跡と組みあわさらないものが多い。また壁面が明瞭でなく、残存状態が良くない。土器は縄文中期大木10式期が中心でわずかに縄文後期前葉が出土している。

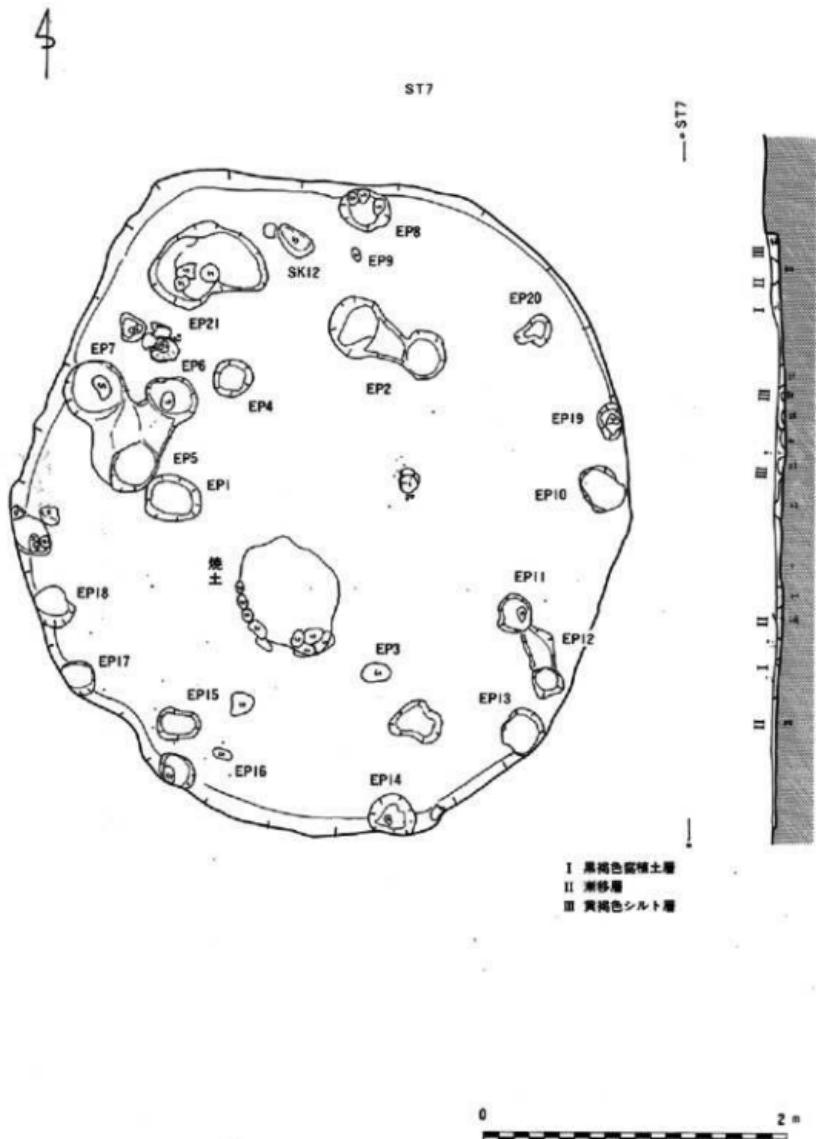
### 第9号住居跡

J-8グリッドに位置し、ST7とST8の中間にある。第VI層上面で確認されたがST14に南北を切られる。プランはST14に切られているので明瞭でないが不整円形を呈し南北径は4.4mである。床面はやや凸凹が多く、炭化物・焼土がいたるところに見られた。埋設土器を付属した複式炉を持つが、柱穴は明瞭でない。床面から出土している土器は縄文中期大木10式期に比定できる。

### 第11号住居跡

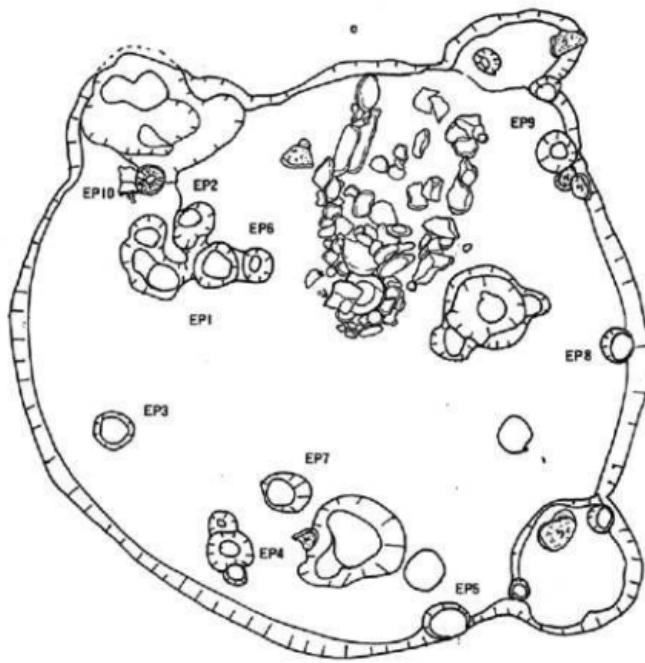


第6図 第6号住居跡 炉跡



第7図 第7号住居跡

4



0 2 m

第8図 第11号住居跡

I-7 グリッドに位置し、住居跡群の西端で検出された。埋設土器を伴う土壌が張り出した不整円形を呈する。遺構検出面が第VI層上面であるために、住居跡を切ったものと考えられるが、床面内土器と埋設土器に年代的な差異がみられないために、確定できない。床は中央部がやや低く、ゆるやかな凸凹がみられる。壁は床面から8~12cmの高さがあり、立上りは割合緩やかである。柱穴は14本検出されたが、主柱穴は3本である。壁柱穴の中には2本の支柱穴の伴うものがある。また張り出しの土壌にはそれぞれ、支柱穴が検出されている。炉跡は全長1.8m、最大幅1.2mの前庭部に埋設土器を伴う複式炉である。燃焼部底部には焼土が5cm前後堆積しており、炉上面からの深さは35cmを測る。住居内に小砾が多く散乱し、遺物も集中して出土している。土器は縄文時代中期大木10式期に比定できる。

#### 第13号住居跡

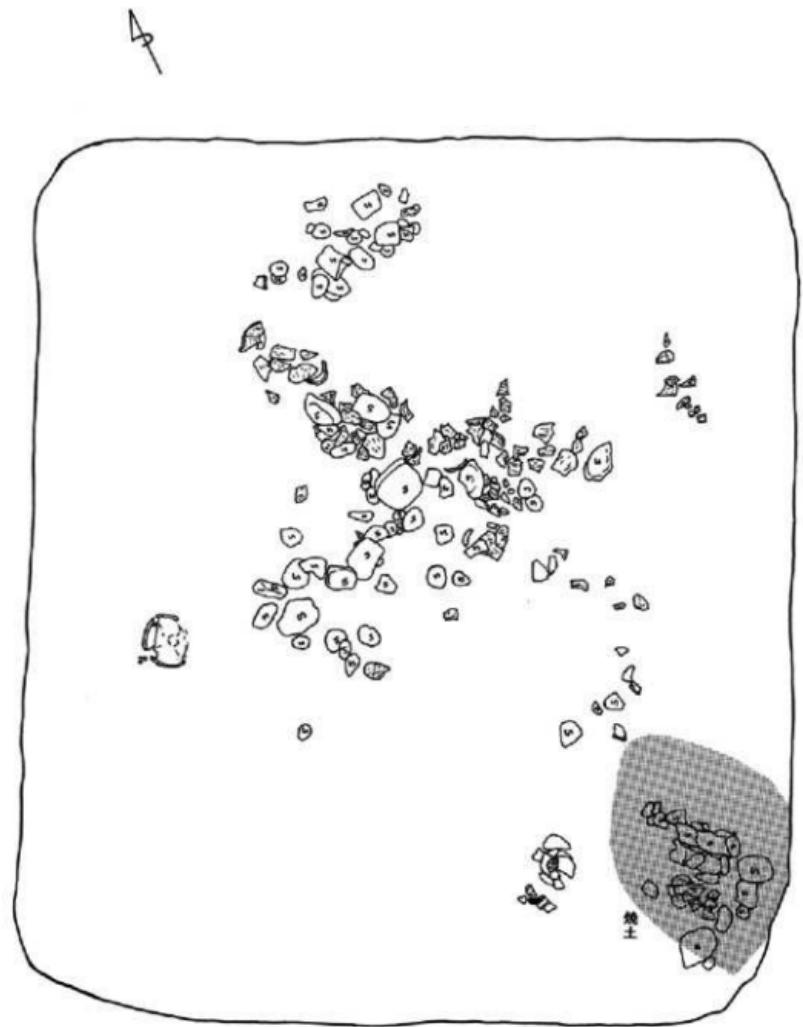
S T 6 の直下にあり、調査期限が迫り完掘していない。平面プランは南北に長い楕円形をしている。南北径7.3m、東西径6mの大型の住居跡である。壁面は良好に残存しており、S T 6 の炉の下部に複式炉を確認できた。壁面から出土した土器とS T 6 の床面から出土した土器の間には時期的な差異はみられず、近い期間の間に建て替えが行なわれたものと考えられる。

#### 第14号住居跡

S T 9 と切り合う形で検出したものである。平面プランは東北隅が張り出す不整円形を呈し、南北径4m、東西径3.8mを計る。床面は若干の凸凹があるが平坦である。柱穴は5本しか確認できなかった。炉は中央部から北辺にかけて設置されている模式炉である。この炉も作りが粗雑できちんとした石組みをしておらず、粘土で構築されたものに補強のために河原石を組んだものと推察できる。全長1.5m、最大幅1.2mを計る。土器は縄文中期大木10式期に比定できるが、住居内の土壌から大木9式期の深鉢が検出されたが、これは土壌への落ち込みと考えられる。

#### 第15号住居跡

K-5 グリッドで親子発掘をした日に偶然発見された遺構である。第III層下部から検出されたためにプランの確認が困難であったが、土器の貼りつきとカマドのレベルで検出した。本来は竪穴式住居と考えられるが、壁面の立ちあがりの確認は上記の理由でできなかった。プランは南北に長い方形で、南北4.7m、東西4mを計る。南東隅にカマドを伴い、床面に、赤焼き土器・須恵器が床面に散乱していた。また礎も多く、破損した土器を捨てた状況である。柱穴は検出されなかった。遺物の検出状態から、廃棄した住居を捨て場に使ったものと考えられる。出土した土器は比較的大形の壺や須恵器の整法・組みあわせから見て10世紀前後（平安時代中期）の住居跡と考えられる。



第9図 第15号住居跡

## 2. 土 壤

土壤は大別すると掘りこみの深いものと浅いものの2種類に区別できる。掘りこみの深い土壤はSK15, 16, 19, 20, 23, 24で一方が急に落ちこみ、緩く立ちあがる断面が共通している。浅い土壤は遺構確認面を第VI層まで下げたために上部を欠落してしまったものと考えられる。SK5, 6, 7, 8, 9は浅く深いところで10cmである。またこれらの底面から縄文時代後期初頭の土器が検出されることから、同時期の土壤と考えられる。

## 3. 埋葬群

埋設されていた埋葬（総計1個体）の大部分は縄文時代中期大木10式期のものであり、口縁をすべて上むきに埋設されていた。この分布に特徴がみられる。一つは住居跡にかこまれた広場の中心にあり、あとは西側に多く集中している。ただ検出面が第VI層の上部にあたり、検出した住居跡群よりは新しく見える。

## 4. 配石遺構

配石遺構は、住居群の北側及び西側に多く検出された。この性格については、石の大きさ、数の多さ、調査期間などの条件で明らかにすることはできなかった。配石遺構の中に1m×2mの方形の石組みがみられた。さらに土偶顔面、人面土製品、立石の存在から、祭祀遺構または墓葬遺構と考えられる。

（高橋 郁夫）

## 2. 遺物

### A 土器・土製品

#### (1) 土器

出土した遺物は、整理箱230箱うち土器遺物は130箱である。そのうち住居跡や、土壙付近から出土した土器を中心にして示し、その類別は、隆起文、隆帶文、沈線文、磨消繩文の変化などから、第1群から第5群まで大別した。繩文については、施文された方向で書き表わすことにした。

#### ① 土器片の分類

##### ○ 第1群土器

粘土紐を貼付したものと、工具等で調整した隆起文、隆帶文で描かれたU字状文、C字状文、円文、楕円文等が施され、区画されたその内外を磨研したり、繩文を施したりしている土器群（第12図-1）

##### ○ 第2群土器

うすい粘土紐を貼付したものと工具等で調整した。幅2～5cmでその両縁が、中央部よりも高くなっている隆帶文で、U字状文、C字状文、S字状文、円文、楕円文、曲線文で区画し、その内外を磨研したり、繩文を施したりしている土器群。

（第12図-2～29）

##### ○ 第3群土器

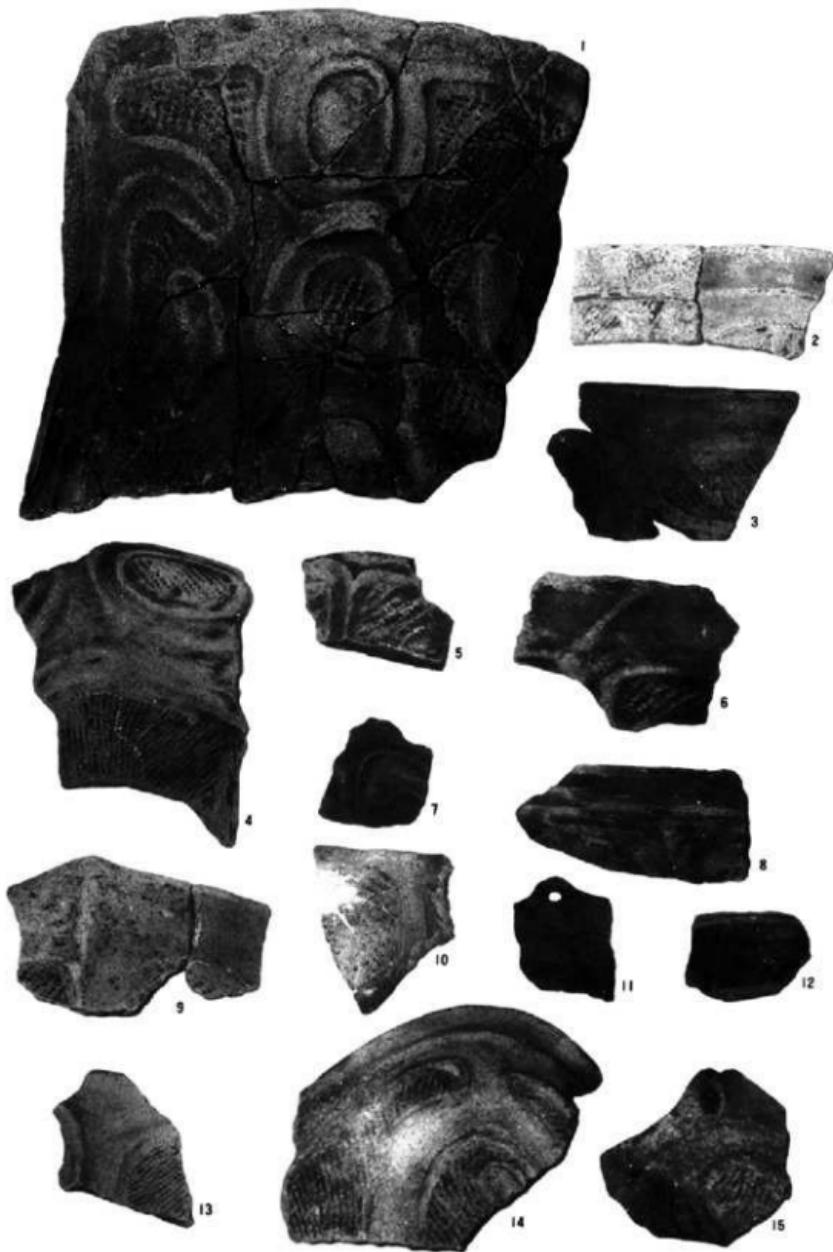
わりに太い二本の沈線で描かれた、U字状文、C字状文、S字状文、円文、楕円文、曲線文などで区画され、その内外を磨消している土器群。（第12図30～43）

##### ○ 第4群土器

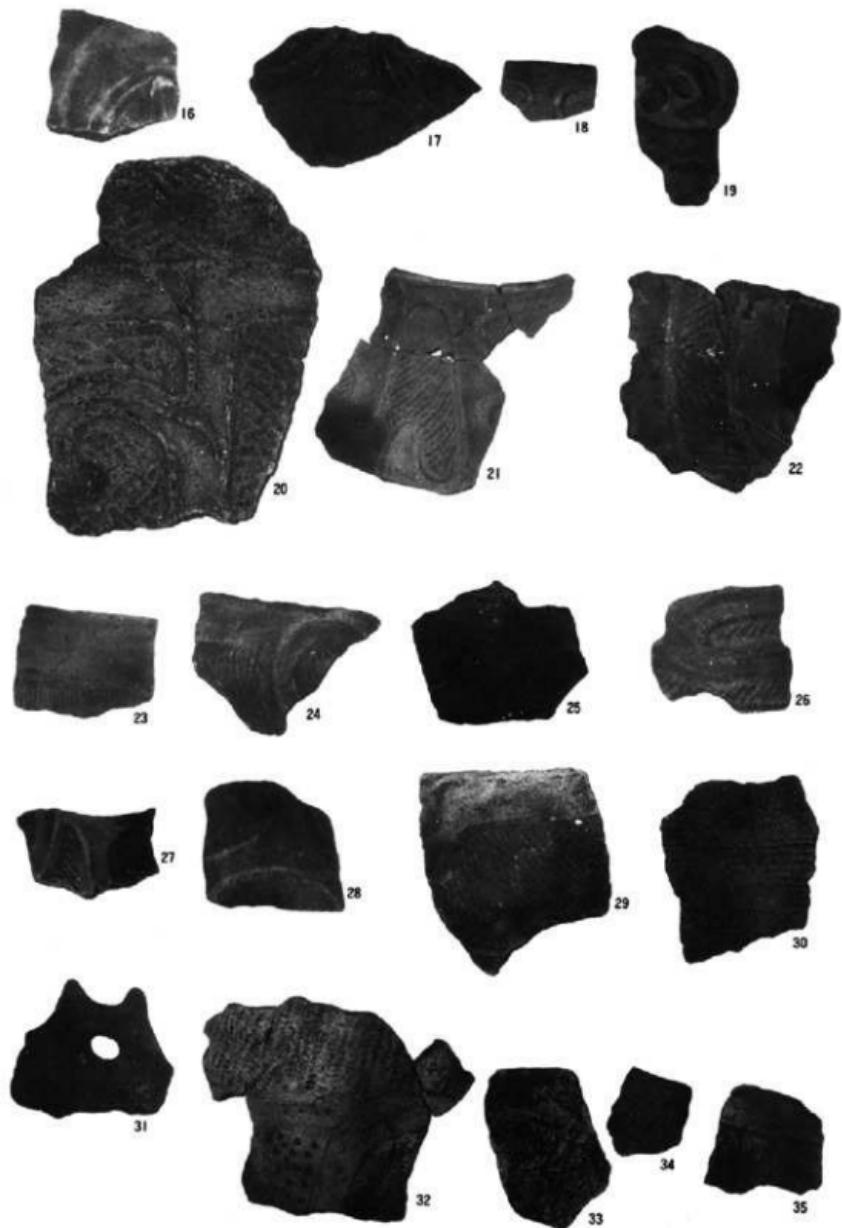
口縁近くからわりに細い1～2条の沈線で、連続S字状文、平行文、渦巻文、円文、楕円文、波状の曲線文が描かれ、区画された内外が磨消された、磨消繩文が施されているもの、区画された無文帯の中に、刺突文、竹管文、列点文などが施ある。土器はわりに薄手で、口縁には小さな山形突起のあるもの、波状線になっているものが多い。（第12図-44～70）

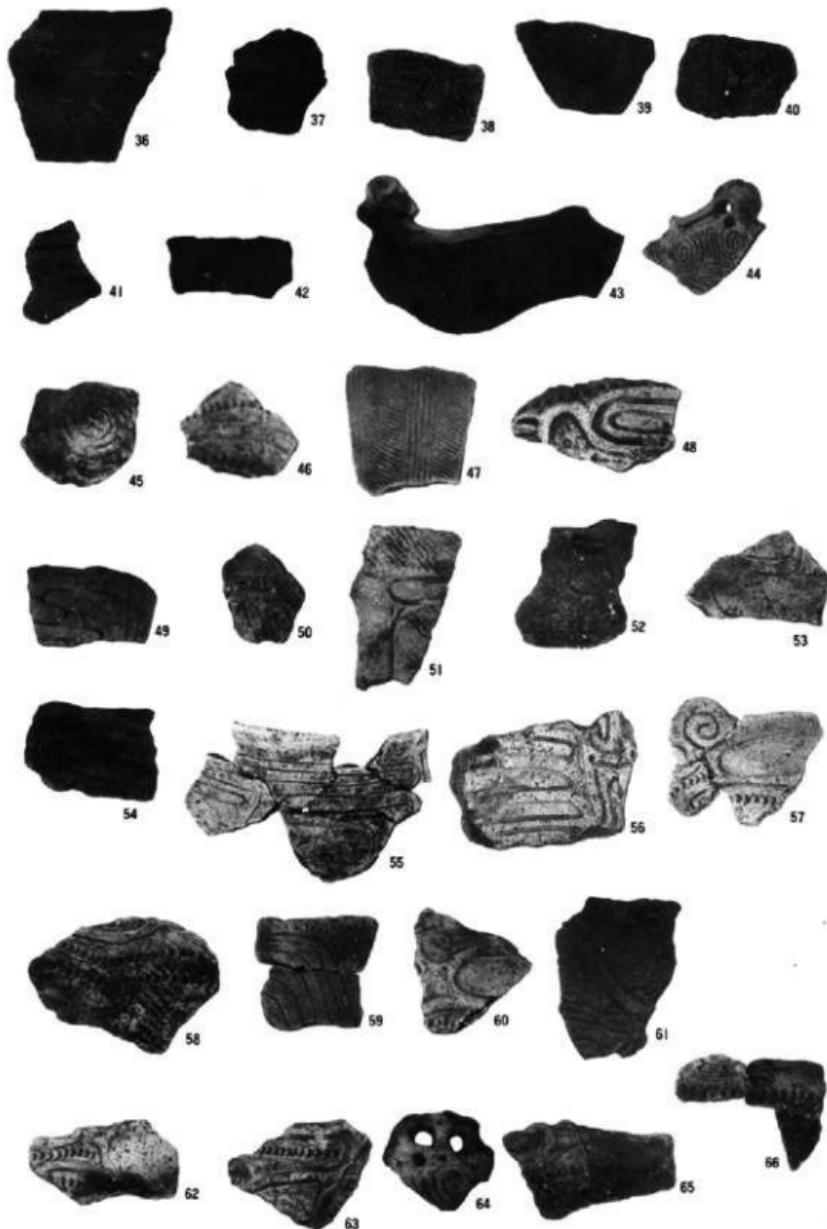
##### ○ 第5群土器

器面全体に横歯状の工具で、同心円文、渦巻文、縱走、横走が行なわれている刷毛目文を施している土器群と、土器の内面に、棒の先のようなもので格子文が施されている土器群。（第12図-71～80）

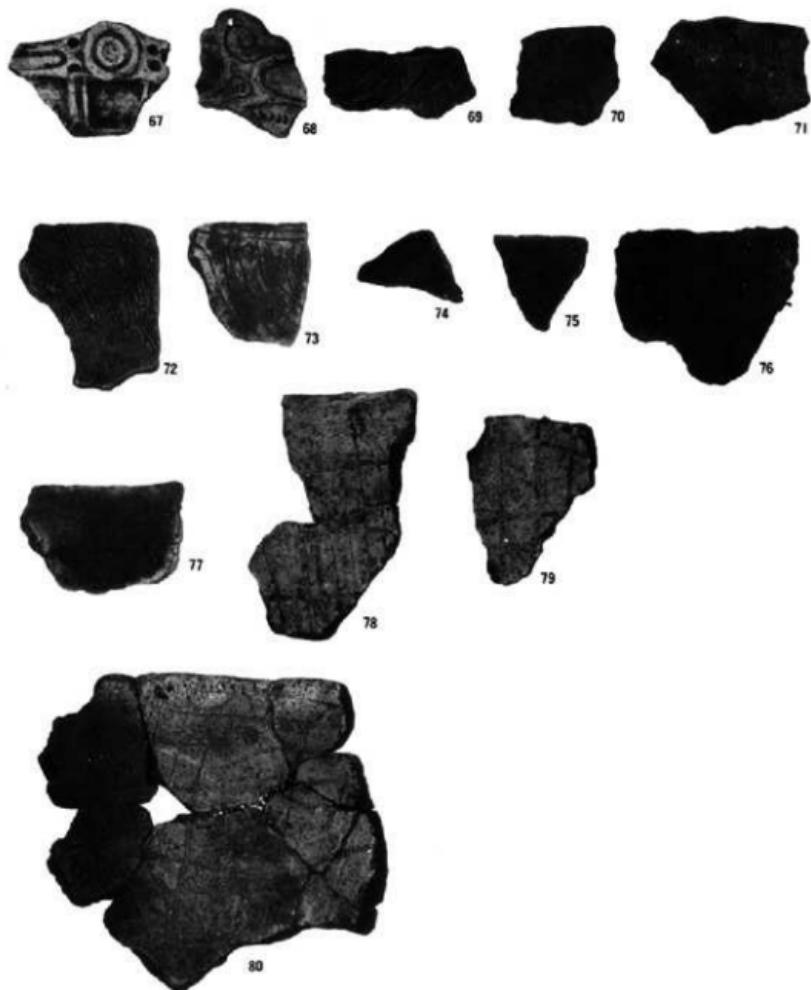


第10図 出土土器 (I)





第10図 出土土器 (3)



第10図 出土土器 (4)

## ② 完形土器

### (1) S T 14床面出土土器 (第11図-1)

口縁部近くは磨研され無文、口縁近くから器全体にかけて、粘土紐を貼付したものを工具等で調整した、幅が2~3cmで、その両縁が中央部より高くなっている隆帯文、部分によっては、隆起線文になっているもので、円文、楕円文、C字状文、曲線文などが描かれ、それによって区画されたその内外が、磨かれた無文の部分や、磨消繩文が施されている。口縁径28cm。

### (2) H K 6 出土土器 (第11図-3)

口縁部は磨研された平縁で、粘土紐を貼付して調整し、磨研された隆帯文の両縁は高くなっています、その断面は三角形になっている。その隆帯文によって4単位の楕円文が描かれ、その内部に右傾斜の磨消繩文が施されている。口縁径28.5cm。

### (3) S T 9 出土土器 (第11図-4)

口縁が外反し、口縁から体部全体にかけて、粘土紐を貼付し、工具で調整し、その両縁を高くした幅4cmの隆帯文で描かれた楕円文の内部に、磨消繩文が施されている。

口縁径22cm。

### (4) S T 9・炉跡内55号土器 (第11図-2)

頭部から頸部にかけ、隆帯文による2単位の楕円文、S字状文が描かれ、区画されたその内外に磨消繩文が施されている。頸部径21cm。

### (5) S-T 6 出土土器 (第11図-5)

4つの小さな山形をもつ口縁で、口縁は外反し、口縁から体部上半にかけて、隆帯の両縁を高くし、その断面は三角形を呈し、その幅3cmの隆帯文で、4単位の長方形に近い楕円文を描き、その内部に磨消繩文が、体部下半には、器全体に右傾斜繩文が施されている。口縁径18cm。

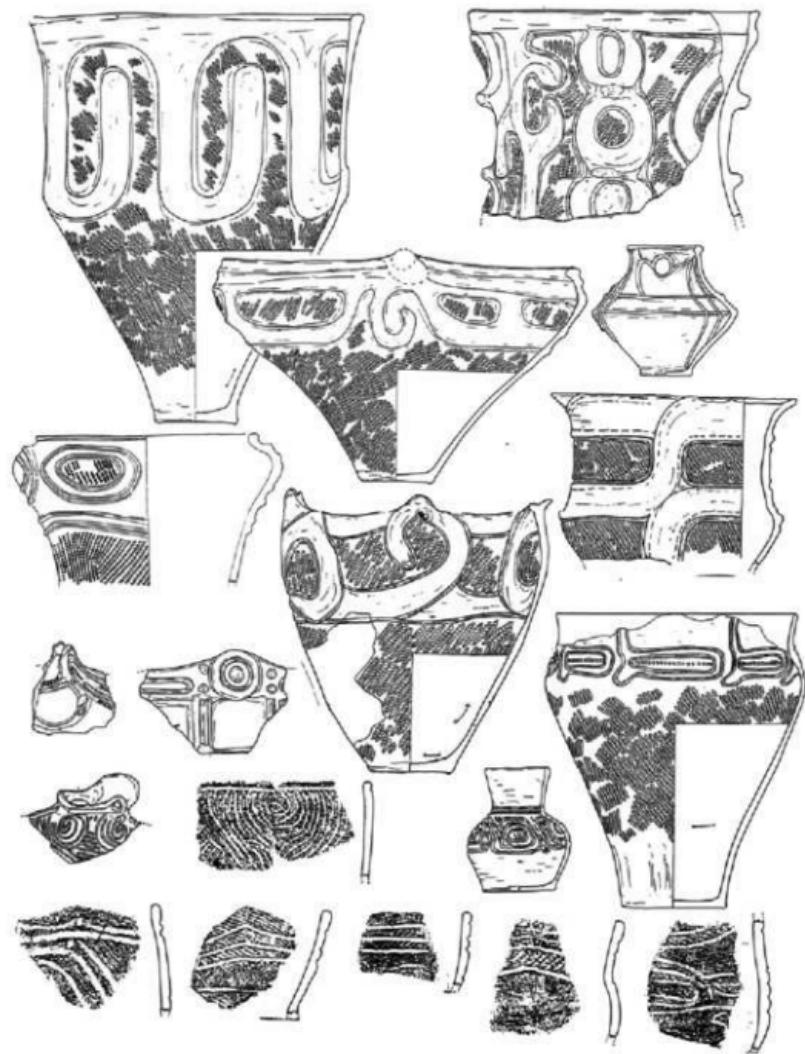
### (6) S K 10内出土土器 (第12図-6)

ゆるやかな4つの波状縁で、口縁から体部上半にかけ、幅4cmの両縁を高くした隆帯文を、口縁部では横に、頸部から体部上半では縱に、さらに横にと、6単位の隆帯文を施し、それによって区画された内外に磨消繩文が施されている。口縁径30cm。

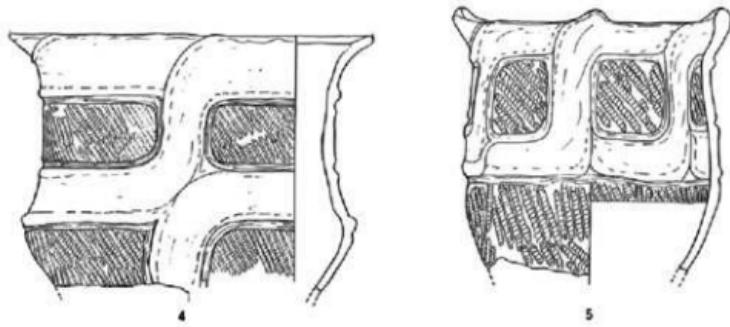
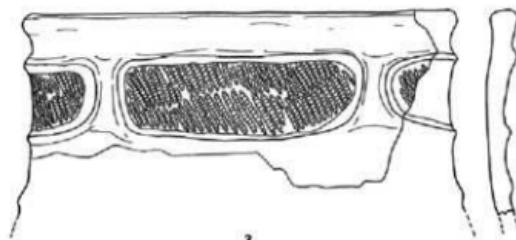
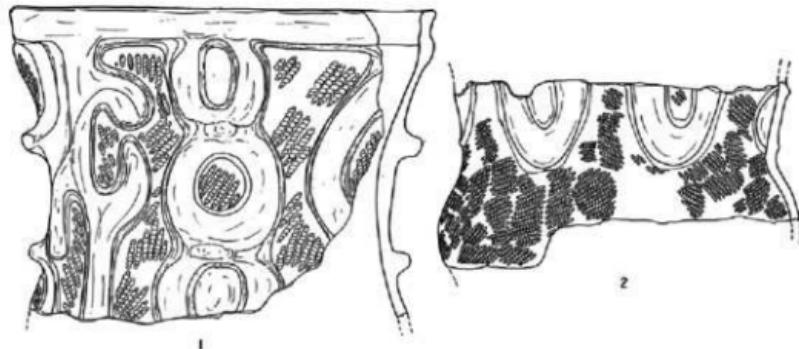
### (7) 40号土器 (第13図-10)

ゆるやかな波状縁土器で、波状の先端近くに孔がある。口縁は少し内反し、口縁から体部上半にかけて2~3cm幅の二本の沈線で、4単位の逆C字状文を描き、それによって区画された内外に磨消繩文、体部下半には器全体に左傾斜繩文が施されている。

口径26cm、器高28cm、底径8cm。

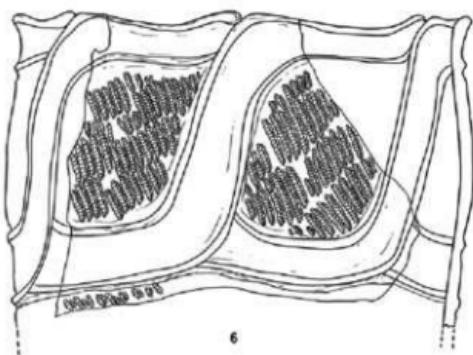


第11図 土器実測図 (1)

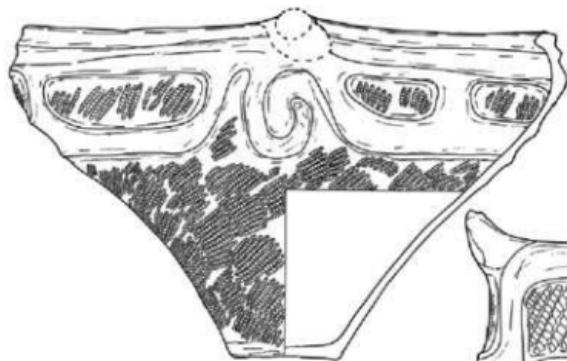


0 10cm

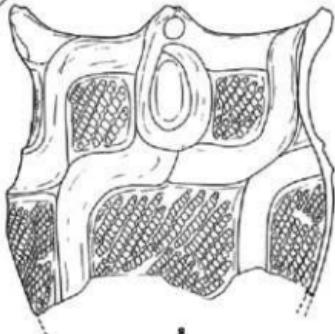
第12図 土器実測図 (I)



6



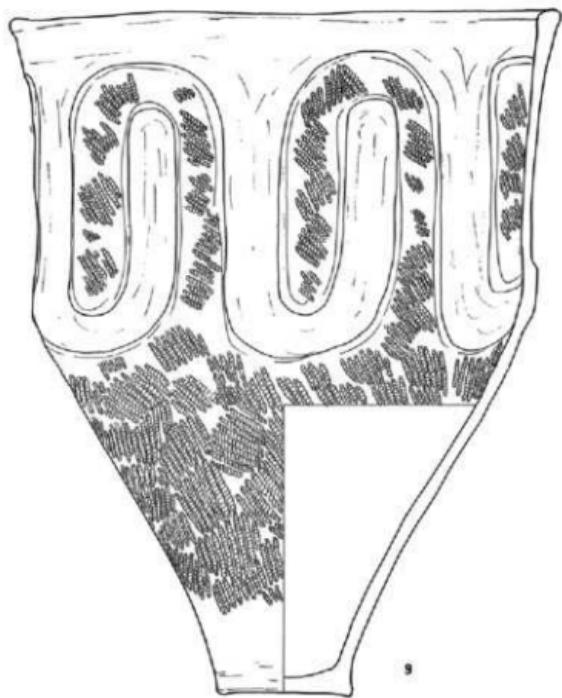
7



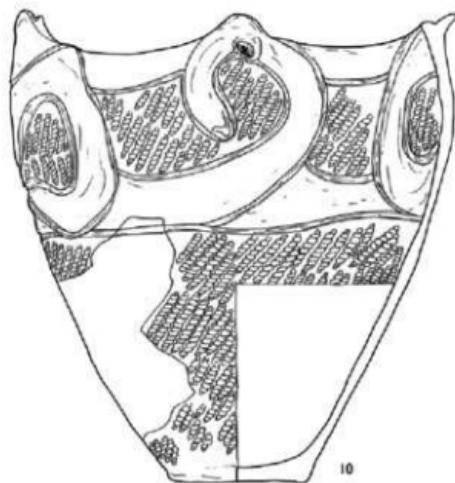
8

A scale bar ranging from 0 to 10 cm, with markings at 0, 5, and 10.

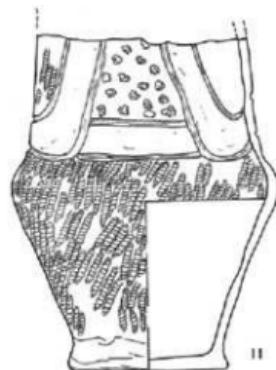
第12図 土器実測図 (2)



9



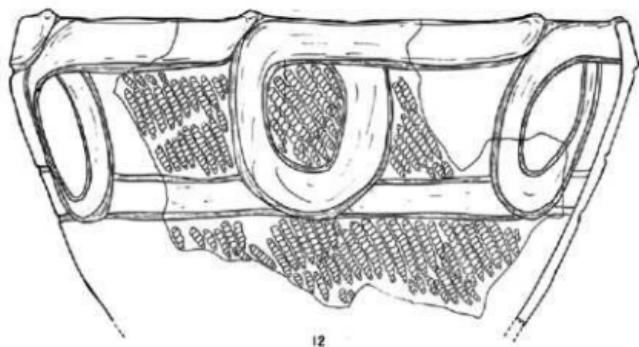
10



11

0 10cm

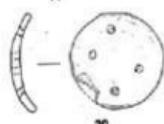
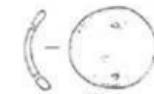
第12図 土器実測図(3)



12



13



0 10cm

第12図 土器実測図(4)

(8) S T 14・炉跡出土土器 (第12図-7)

器形はカリバー形深鉢で、口縁部は磨研され、頸部から体部上半にかけ、粘土紐を貼付し、工具で調整した、両縁の高い隆帯文で、5単位の楕円文、C字状文を描き、区画された内外に磨消繩文、体部下半には器全体に左傾斜繩文が施されている。

口縁径32cm、器高22cm、底径8cm。

(9) 深鉢形土器 (第12図-9)

口縁から体部上半にかけ、隆帯文による6単位の逆C字状文が描かれ、区画された内外に磨消繩文が、体部下半には器全体に右傾斜繩文が施されている。

口縁径32cm、器高39.5cm、底径8cm。

(10) 鉢形土器 (第12図-12)

口縁には小さな山形がありやや内反し、口縁部には隆帯文がみられるが、口縁部近くから体部上半にかけて、太い二本の沈線による4単位の楕円文が描かれ、その区画された内外に磨消繩文が施されている。体部上半と下半の境に、二本の沈線が施され、下半は器全体に右傾斜繩文が施されている。口縁径39.5cm。

(11) 25号土器 (第12図-8)

波状口縁で、波状の先端近くに孔を有する。粘土紐を貼付し、工具で調整した、両縁の高い隆帯文で、口縁部は横走し、頸部は縱走、体部でまた横走したり、C字状文を描いたりし、区画された内外に磨消繩文を施している。口縁径21cm。

(12) 6号土器 (第12図-13)

口縁から頸部にかけ磨研された部分に、わりに細い沈線で、8単位の曲線文、その中に楕円文を描き、楕円の中に刺突文が施され、胴体部全面に右傾斜繩文が施されている。口縁径26cm、器高29cm、底径11cm。

(13) S T 14内・炉わき出土土器 (第12図-14)

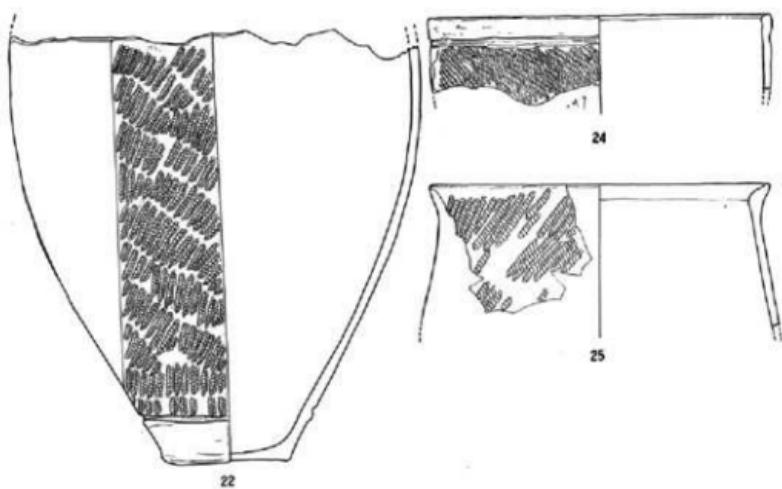
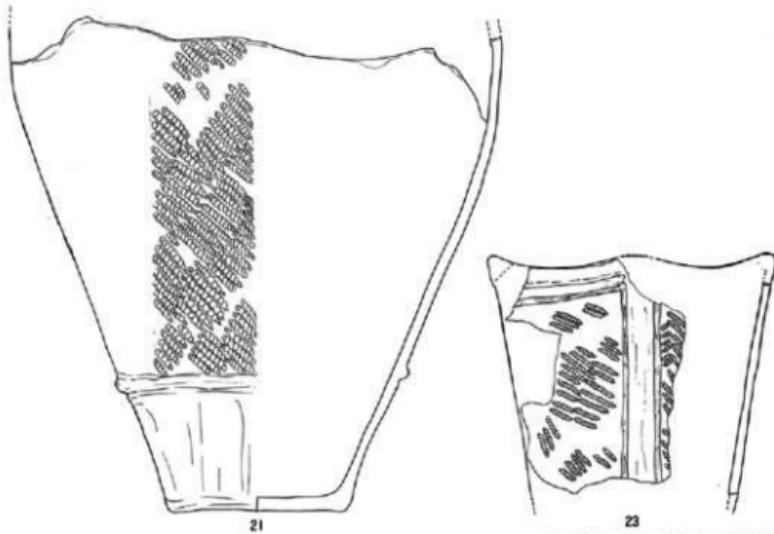
高杯の脚部で、2本の沈線による楕円文が描かれ、その内部は、長径4cm、短径2cmの1対の穴があいている。楕円文の外は繩文が施されている。脚部高10cm、底部径8.5cm。

(15) 広口壺形土器 (第12図-15)

口縁部は磨研されて無文、頸部には2本の沈線、肩部には、3本の沈線による4単位の楕円文、その間に磨消繩文が施され、体部は無文。器高12cm、口縁径5.5cm、肩部径10cm、底部径7cm。

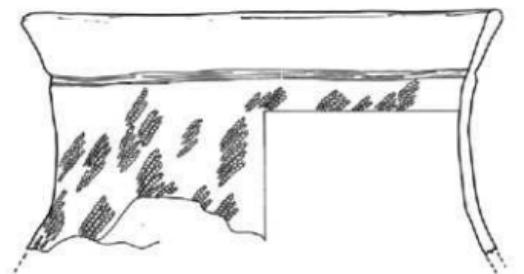
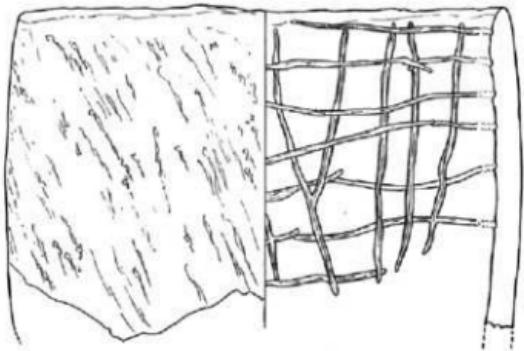
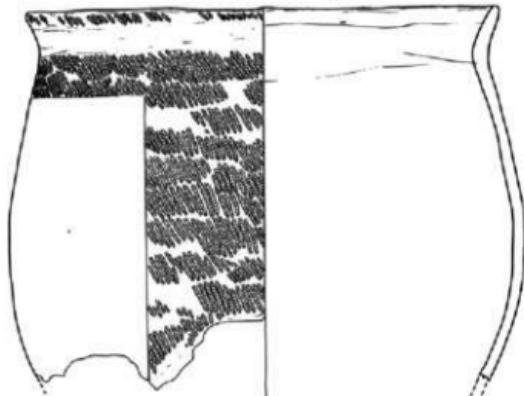
(16) 壺形土器 (第12図-16)

器全体が磨研され無文であるが、口縁から体部全体にかけて、2本の粘土紐で、隆起線文を作り、頸部には4単位の長方形に近い楕円文、肩部から体部にかけて、2単位の楕円文が施されている。口縁近くには1.5cmの孔がある。口縁径7cm、肩部径14cm、底部径5cm、器高13cm。



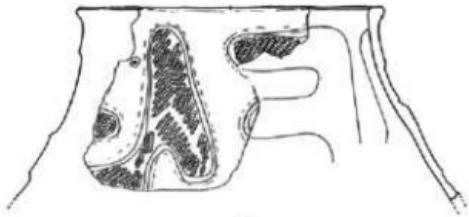
0 10cm

第12図 土器実測図 (5)

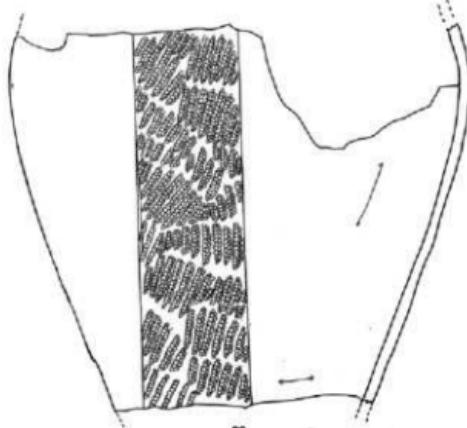


0 10cm

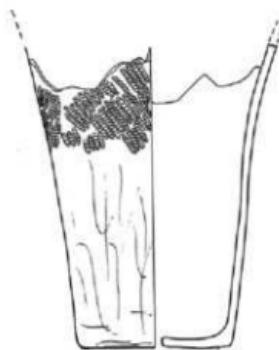
第12図 土器実測図 (6)



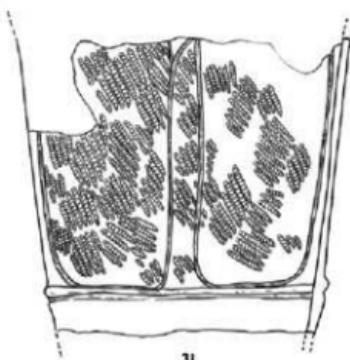
29



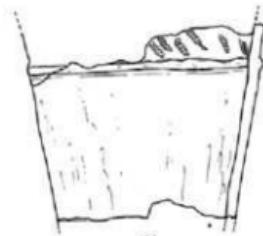
30



32



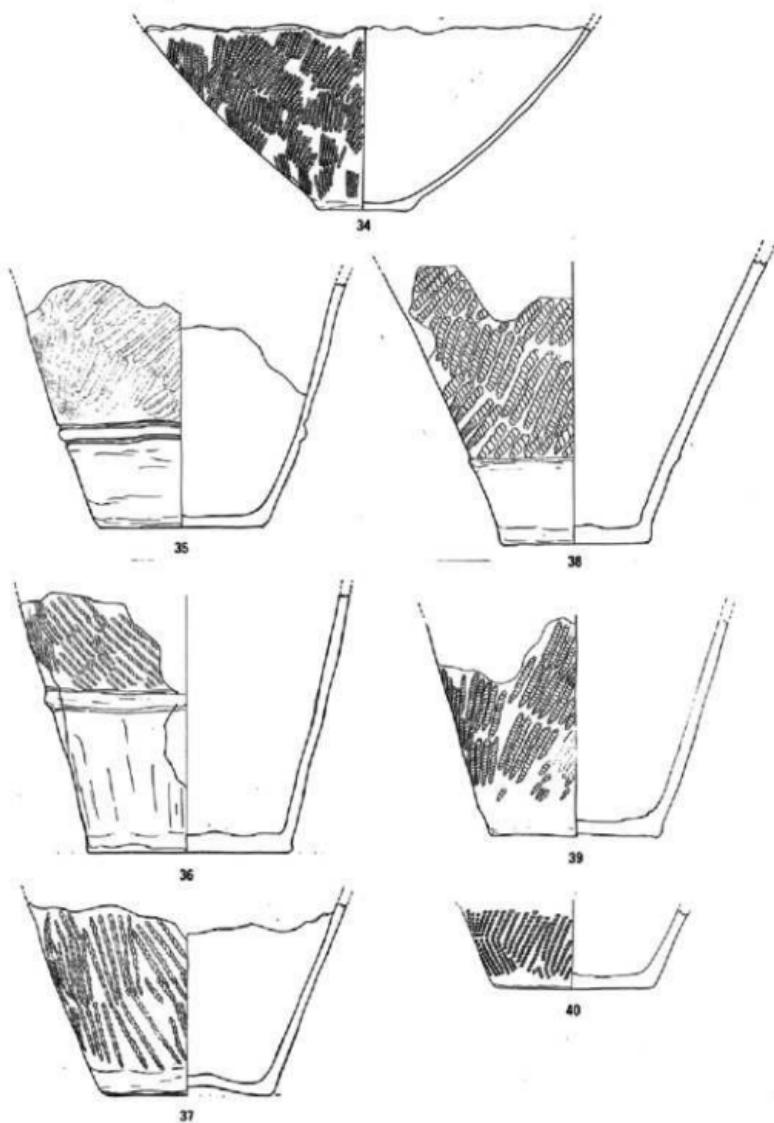
31



33

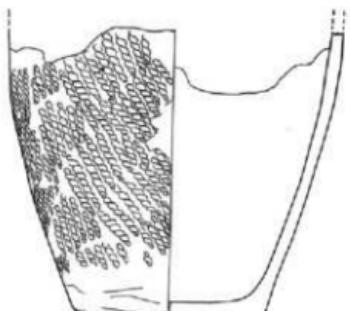
A scale bar at the bottom right of the figure, ranging from 0 to 10 cm.

第12図 土器実測図 (7)

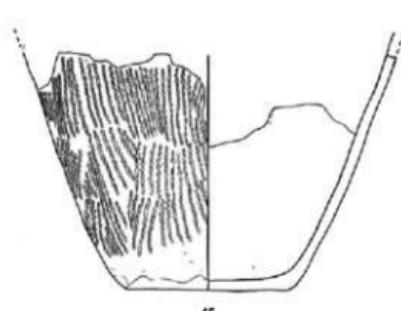


0 10cm

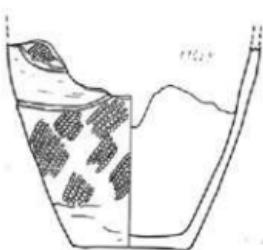
第12図 土器実測図 (8)



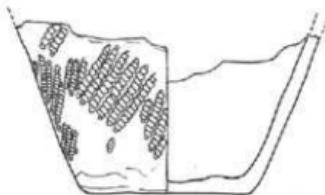
41



45



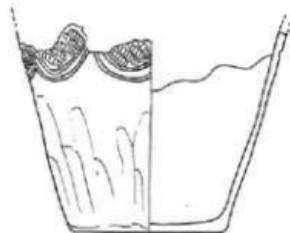
42



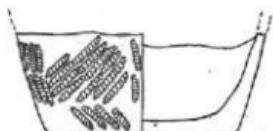
46



43



47



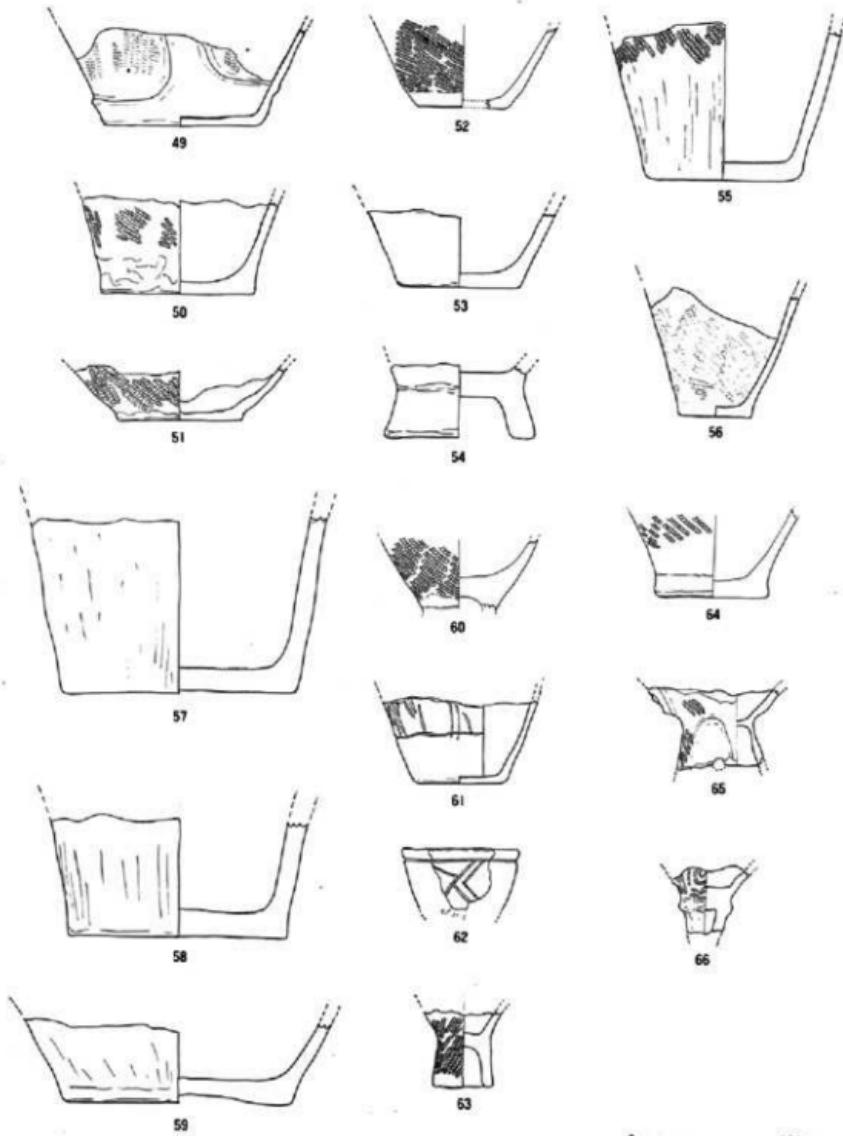
44



48

0 10cm

第12図 土器実測図 (9)



第12図 土器実測図 (10)

(17) 鉢形土器 (第12図-17)

2本の沈線による帯状の4単位の曲線文で区画し、その内外に磨消繩文が施されている。器高7cm、口径10cm、底部径6cm。

(18) 小形土器 (第12図-18)

口縁に6つの山形のある土器で、口縁・底部磨研されており、細い沈線による6単位の曲線文、その内外には磨消繩文が施されている。器高5cm、口縁径5.5cm、底部径2.5cm。

(19) 皿形土器 (第12図-19)

2孔を有する。器面は磨研されている。口縁径5.7cm。

(20) 皿形土器 (第12図-20)

4孔を有する。器面は磨研されている。口縁径6cm。

(21)より(5)までの土器は、図版で説明する。

## ② 土 製 品

① 土 偶 (第13図)

(1) 顔部3点(1, 2, 3) (2) 脚部3点(6, 7, 8)、胸部2点(4, 5)、土偶の1部と考えられるもの4点(9, 10, 11, 12)

② 円盤状土製品 (土版か) (第14図)

(1) 直径4.7cm、厚さ0.8cm、中心より沈線による渦巻文を施している。(1)

(2) 直径4.9cm、厚さ1.5cm、沈線による曲線文が施され、4孔を有する。(2)

(3) 直径3.5cm、厚さ0.5cm、中心に0.7cmの孔を有する。表面無文。(3)

③ 滑車状土錘 (1点) 直径4cm、厚さ3cm、中心に1孔を有し、両面の孔を中心にして9コ、口縁にそって18コの刺突文がある。(4)

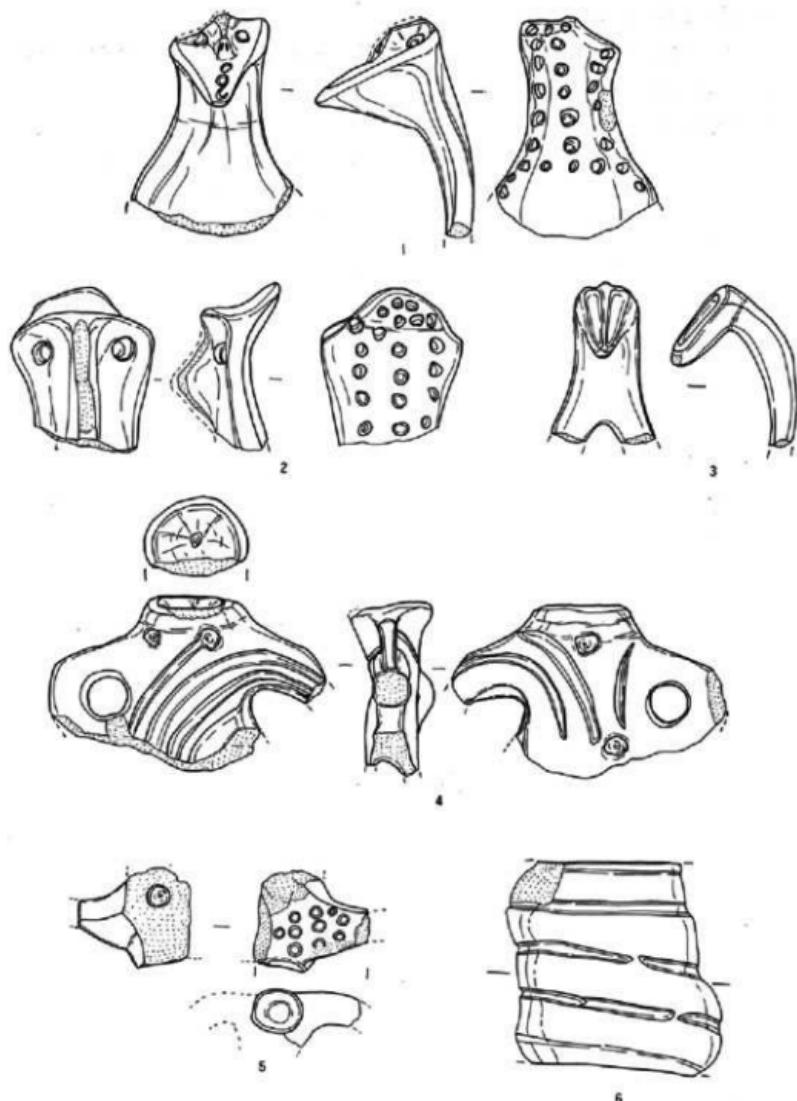
④ 土器のふた

(1) 直径6.6cm、円盤状で、中心につまみがついている。(6)

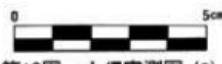
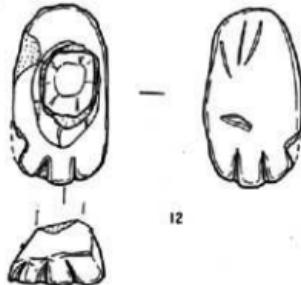
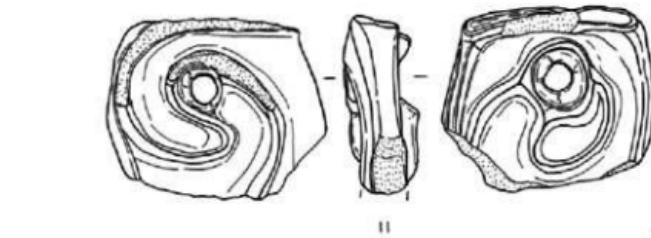
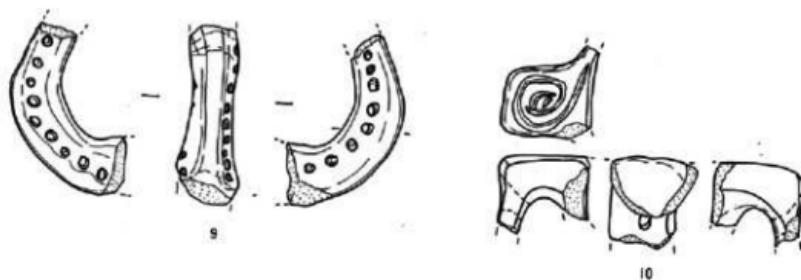
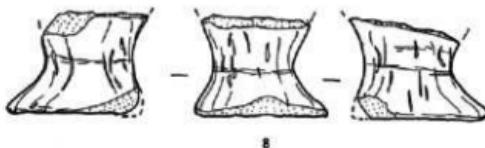
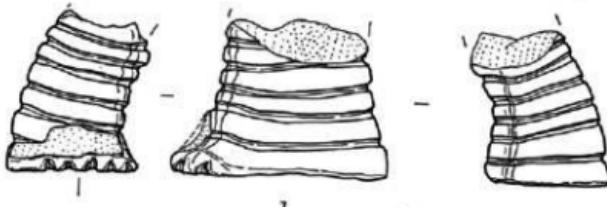
(2) 直径4cm、高さ3cmの冠のような形をしたもの。(5)

⑤ 球状土製品 直径4cm、表面全体に10条の小さな刺突文がある。(7)

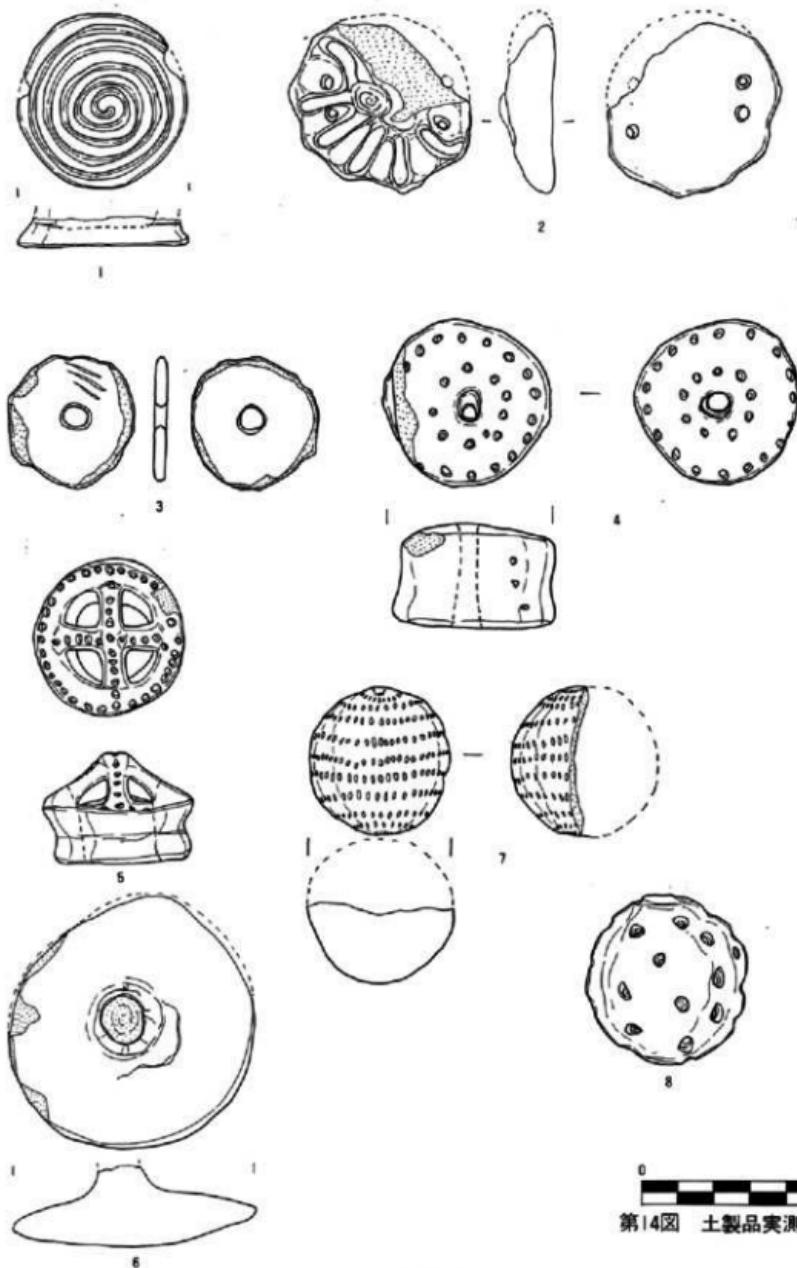
⑥ 土 鈴 直径4.5cm、中空で、2コの紐通し孔、22コの刺穴文がある。(8)



第13図 土偶実測図 (1)



第13図 土偶実測図(2)



第14図 土製品実測図 (I)

### (3) 赤焼き土器・須恵器

15号住居跡から検出されたもので、その内訳は壺8点、楕2点（内1点は高台付）、壺2点、長頸壺1点、甕2点である。

1は口径15cm、底径5.4cm、器高5.2cmで赤褐色を呈する。底部切り離しが回転糸切りで無調整である。体部は直線的にゆるく立ち上がり、平底である。胎土に大小の砂粒を含み、焼成は良くない。この他の杯も、口径12~15cm、底径が4.8~6cm、器高が4.5~5.4cmの大きさで、すべてろくろから糸切りによって切り離しが行なわれており、無調整である。ただ須恵器の壺が出土しているが、口径16cmと赤焼き土器よりもやや大型になる傾向がある。底部が欠損しているが回転糸切りと考えられる。

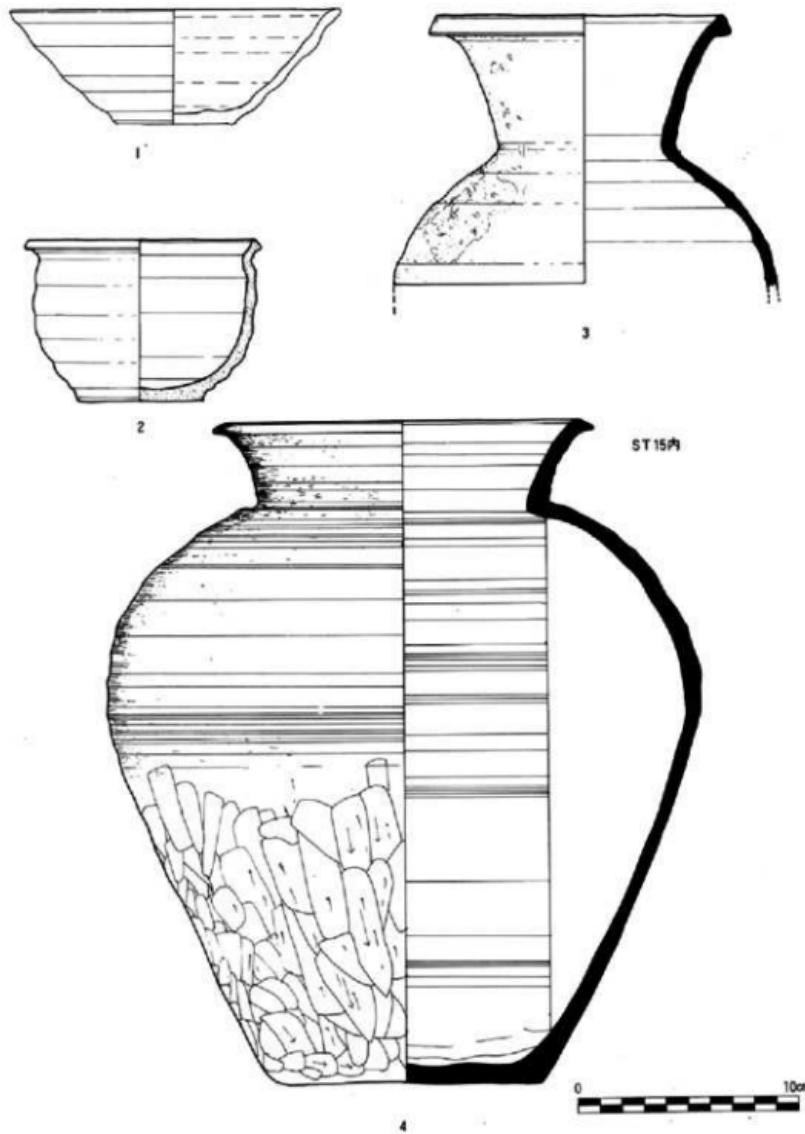
2は口径10.8cm、底径5.8cm、器高7.4cmの鉢である。体部は曲線的に立ちあがり、外面、内面ともロクロなで調整をうけている。底部は回転糸切りで平底である。色調は赤褐色を呈する。

3は頸部が大きく直線的に外反し、肩部が張りだした胴部が付く長頸壺である。下半分が欠損しているために底部の形状は不明である。色調は青灰色白色を呈している。

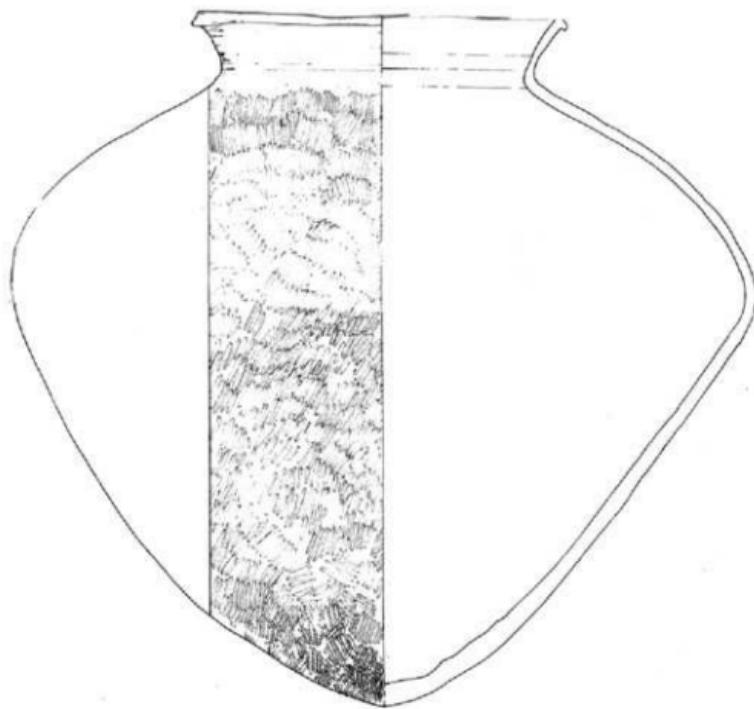
4は口径17.2cm、底径12.2cm、器高29.6cmである。頸部は3.8cmで、肩部は大きく外側に張り出している。外面下半部にヘラ削り調整がみられる。内部はロクロナデ調整である。胎土は緻密で、還元炎焼成を受けて青灰色を呈する。

5は総高55.6cm、最大径60.6cmの大型の壺である。頸部は短かく4.5cmで口径は29cmであり、朝顔状に大きく外反する。外面頸部にヘラナデ、体部外面には細かい格子状叩き目がみられる。底部は丸底である。また頸部と体部の接合は2段成形で胎土は緻密で硬く、青灰色を呈する。

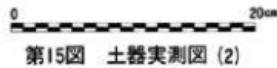
（大飼安太郎・高橋都夫）



第15図 土器実測図 (I)



5



第15図 土器実測図 (2)

## B 石器・石製品

各区より、990点余りの石器及び石製品を出土した。出土層位は、第I～III層であり、土器のそれと一致する。第VI層からは出土していない。器種を見ると、石鎌、搔器、石錐、打製石斧、磨製、石斧、石鎌、石棒、石皿、石梳、凹石、磨石、敲石、大珠(硬玉)、円盤状石製品(石錘)、線刻疊、石刻等であり、縦長剥片等を含めると、8,000点を下らない。整理を終えた器種別の数を上げると、次のようになる。

石鎌	145点	打製石斧	53点
搔・削器	281点	磨製石斧	18点
石匙	21点	範状石器	66点
石錐	58点	石棒	3点
石皿	1点	石椀	4点
大珠	1点	円盤状石製品	2点

出土区で多かったのは、I 7～9、J 7～9、L 8～9グリッドである。これは、住居跡や土壌及び集石遺構の集中地点と、ほぼ一致する。

### ○石 鎌

有茎・無茎合わせて、145点あるが、大きく分けると7種類になる。更に細かくできるものを分類して、9種類にしてみた。

#### A類 (1～5)

無茎石鎌で先端を尖らせ、脚部の肩が張り、段をなすのが特徴である。先端から脚部にかけての側縁を外彫させているものが多い。脚部の抉入は、比較的深く弧を描くように調整されている。脚部を尖らせるものと、平らにしているものとがある(3)。無茎の飛行機鎌の形態を示す。すべて硬質頁岩製。

#### B 1類 (6～12)

無茎で側縁には段がなく、内彫する。脚部が丸く抉入し、ハート形を呈する。23点出土した。石材は、硬質頁岩、流紋岩、黒曜岩、メノウ、玉髓を使用している。

#### B 2類 (13～19)

B 1類に比して、側縁が直線的に脚部へ達する。抉りの浅いものと深いものとがある。また、先端を丸めた大形のものが1点出土している。硬質頁岩、メノウ、玉髓、流紋岩が使われている。32点ある。

#### C類 (20～21)

無茎で抉入せず、全体的に二等辺三角形を呈する。側縁は直線的なものと、わずかに弧を描くものとがある。21は、長さが3.8cmあり、無茎では最大のもので表裏面ともに、第一次剥離面を残している。硬質頁岩、流紋岩が使われ、11点出土している。

### D 1類 (22~28, 30~32)

有茎石器である。側縁から基部に至る調整を、縦軸に対しほば垂直に行っている。

29点あり、硬質頁岩、メノウ、玉髓、流紋岩を使用している。

### D 2類 (29)

D 1類に対し、基部への抉りが少なく斜めに調整される。そのため、外形はひし形を呈する。硬質頁岩、黒耀石が使われ、10点出土している。

### E類 (33・34)

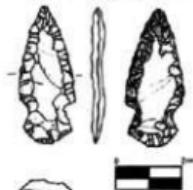
D 2類に比して幅が狭く細身で肥厚である。図示した2点は茎部が明瞭であるが、全体が柳葉形をなし、基部の明瞭でないものも2点出土している。硬質頁岩製。

### F類 (35~38)

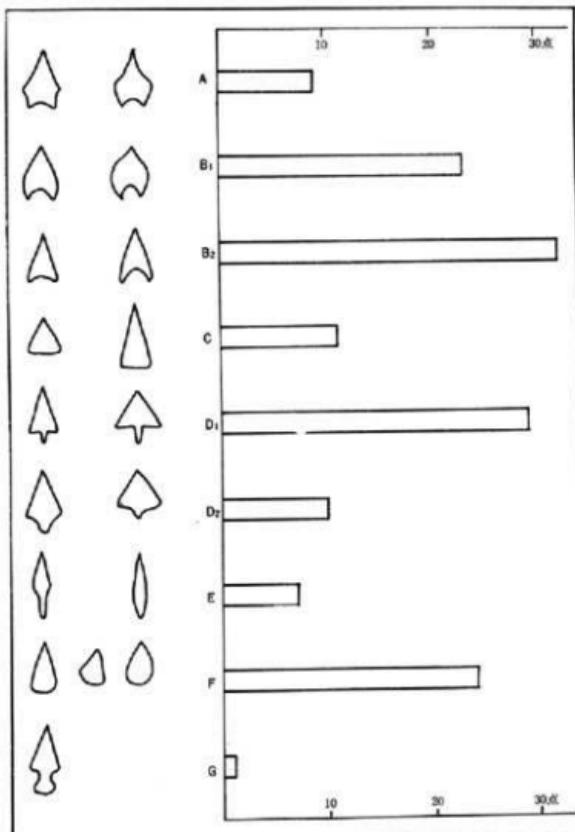
先端部から基部にかけて、丸く調整されているため、木の葉形を示す。A~E類に比して、細部調整は粗いものが多い。大きさも厚さも多様であり、石材も硬質頁岩、メノウ、流紋岩を使用している。

### G類 (右図)

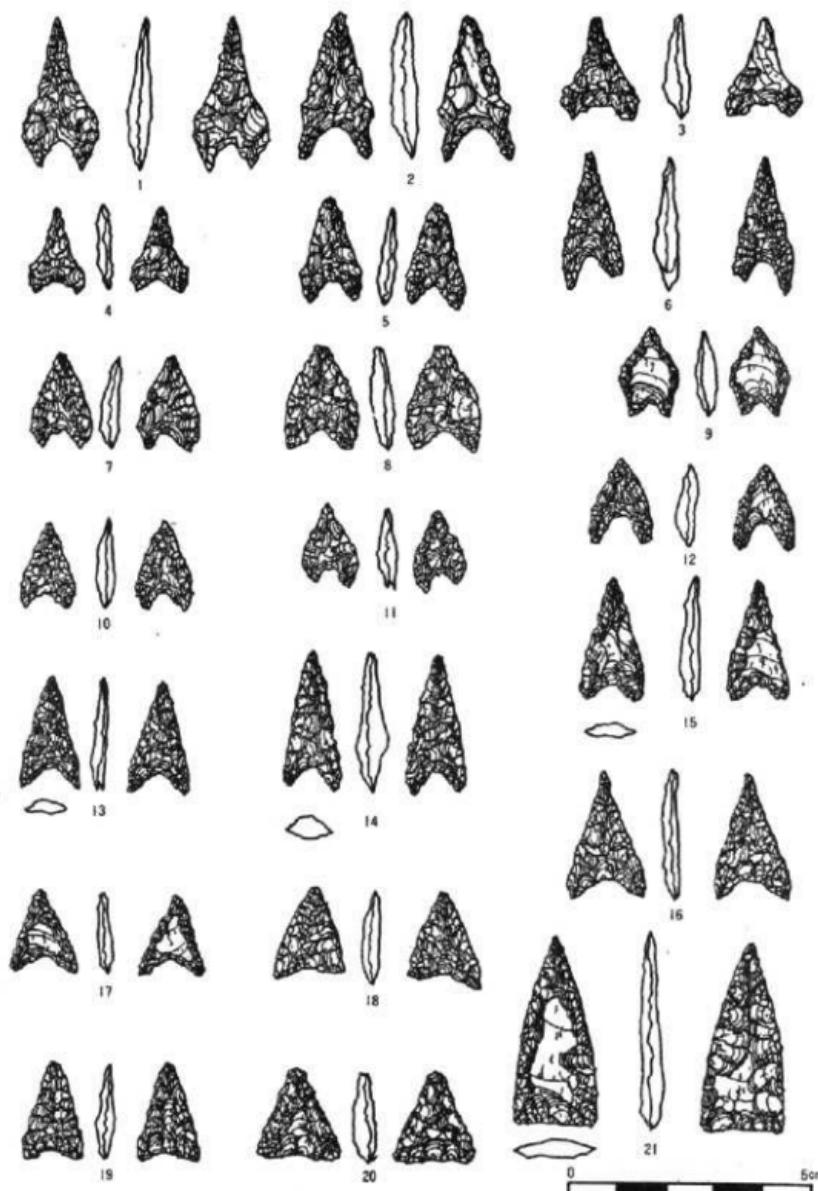
茎部を作出するために、側縁からノッチを入れたため、両側に張り出したものである。又、茎部の先端は丸く調整が施されている。ST15より1点だけ検出された。硬質頁岩製である。



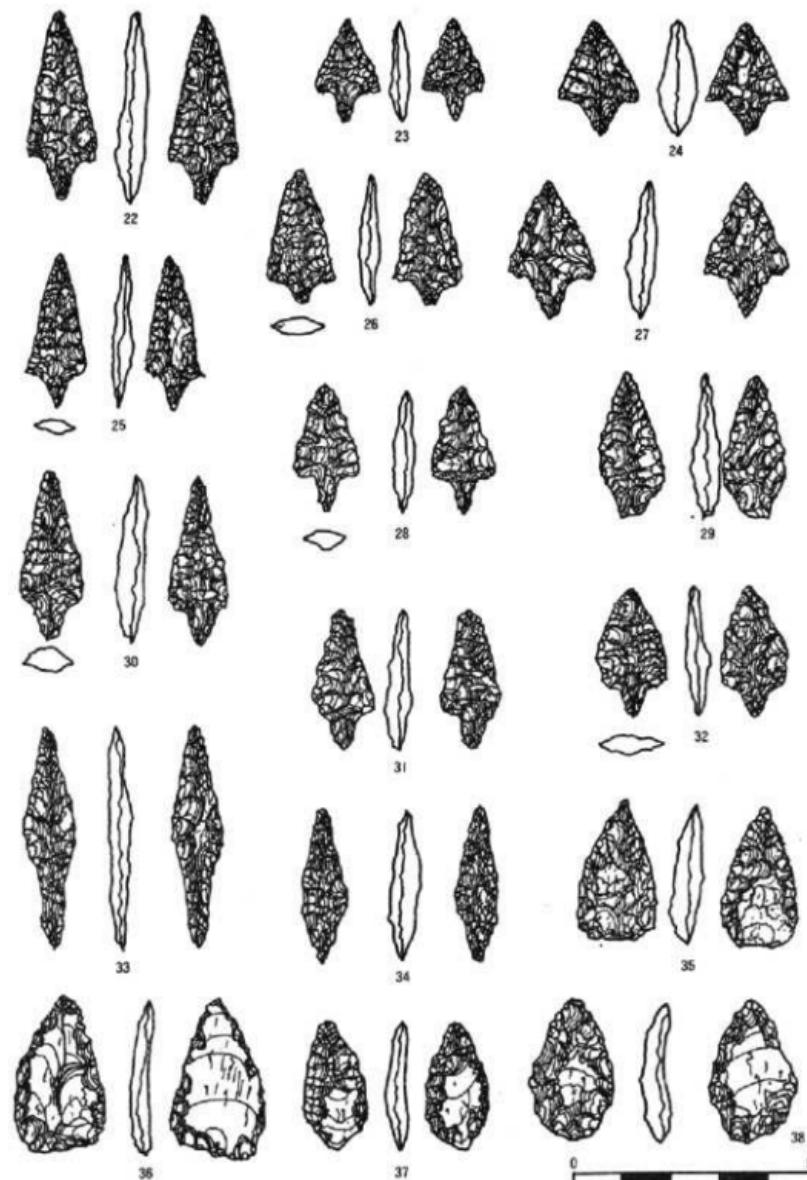
第16図 石器実測図



第17図 石器の形態分類及び出土数量



第18図 石器実測図 (1)



第18図 石器実測図(2)

## ○ 搤・削器

総数で369点出土した。様々の形態の撊・削器がある。縦長剥片を利用したものが多く、旧石器時代のエンドスクレーパーに酷似するものも検出されている。不定形石器として扱うべきものも、本器種に含めて付図した。又、分類には二次調整を基本にした。

### A類 (39~52)

ほぼ全周にわたって細部調整が施されているものである。剥片剥離製作時に生じた打面を残すものと二次調整によって欠落させているもの(43, 44, 49, 51, 52)とがある。刃部を形成させる調整は、腹面より加擊し、先端を尖げるもの(42, 51)、丸く加工しているもの、平坦にしているものに細分することができる。52は、上下両面を刃部に調整している。

### B類 (53~55)

打面及びその両側縁を、第一次剥離時のまま残し、下半を調整しながら刃部を形成しているものである。

### C類 (56~70, 73)

左右いずれかの側縁及び先端の刃部を細部調整しているものである。A類と同様に刃部の形態によって細分できる。

### D類 (71, 72~80)

刃部のみ調整を施しているものである。側縁の一部に、二次加工の認められるものもある。

### E類 (81, 82)

刃部を鋸歯状に調整されたものである。81は、背面より調整が施されているのに対し、82は、逆に腹面から加工されている。また、腹面左側縁には、背面から刃溝し加工が施されている。

### F類 (83~88)

先端を錐状に調整したものである。84は打面及びバルブが二次加工の際、剥取されていく。

### G類 (89~95)

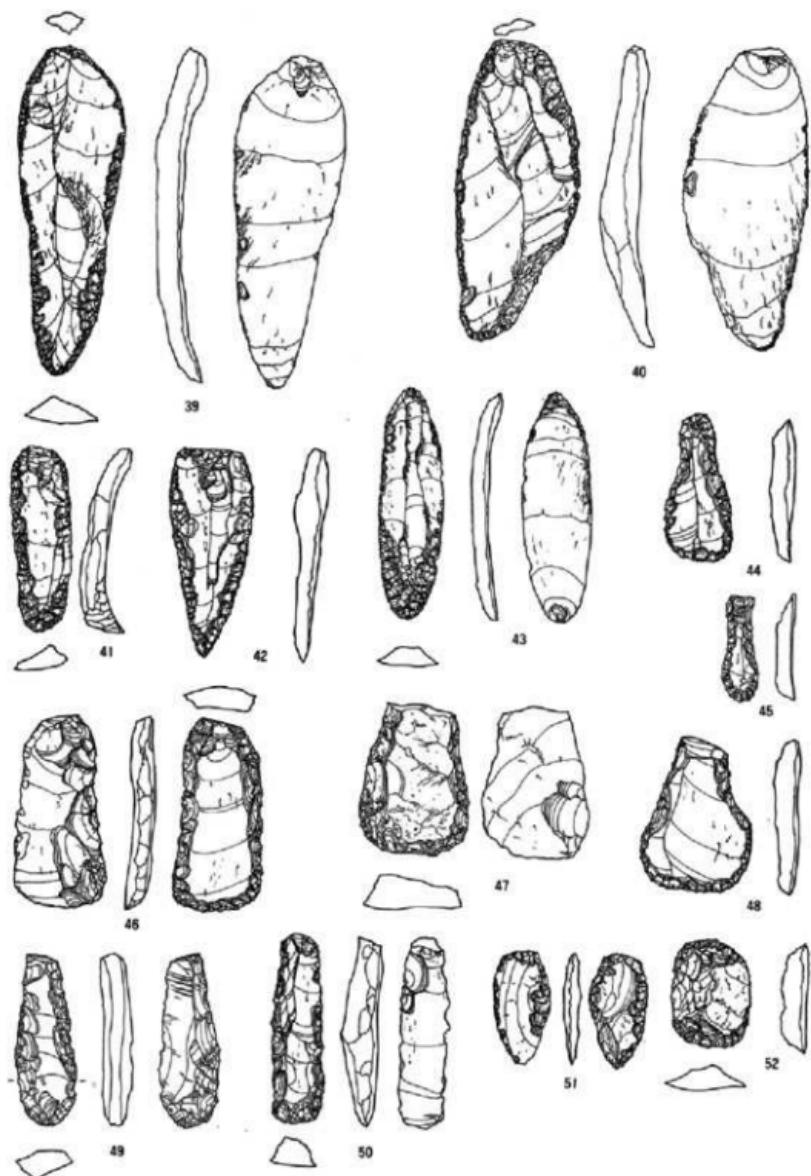
側縁の片方だけ調整された撊器である。89, 91, 94, 95は自然面を残す。

### F類 (96~99, 104)

両側縁に加工を施し、撊器としたものである。

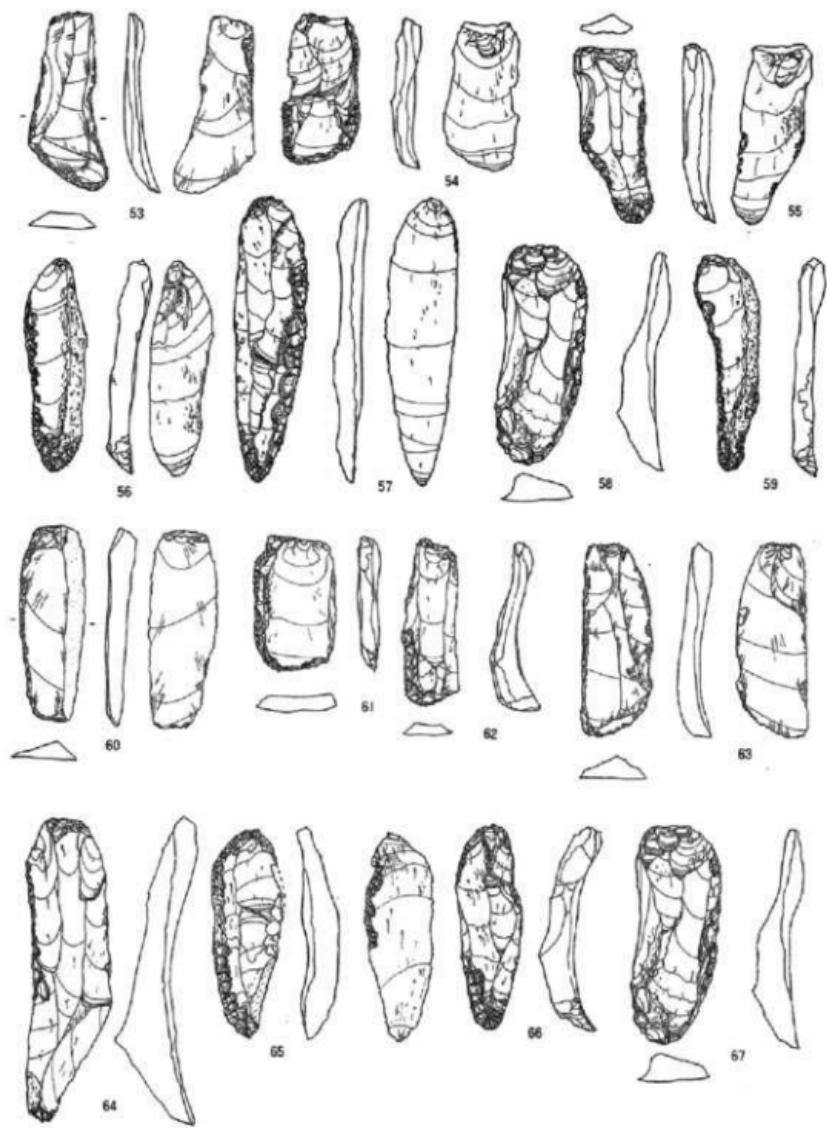
### G類 (100~103)

不定形石器の仲間である。抉入り撊器、先端部にわずかに調整を入れた撊器などがある。



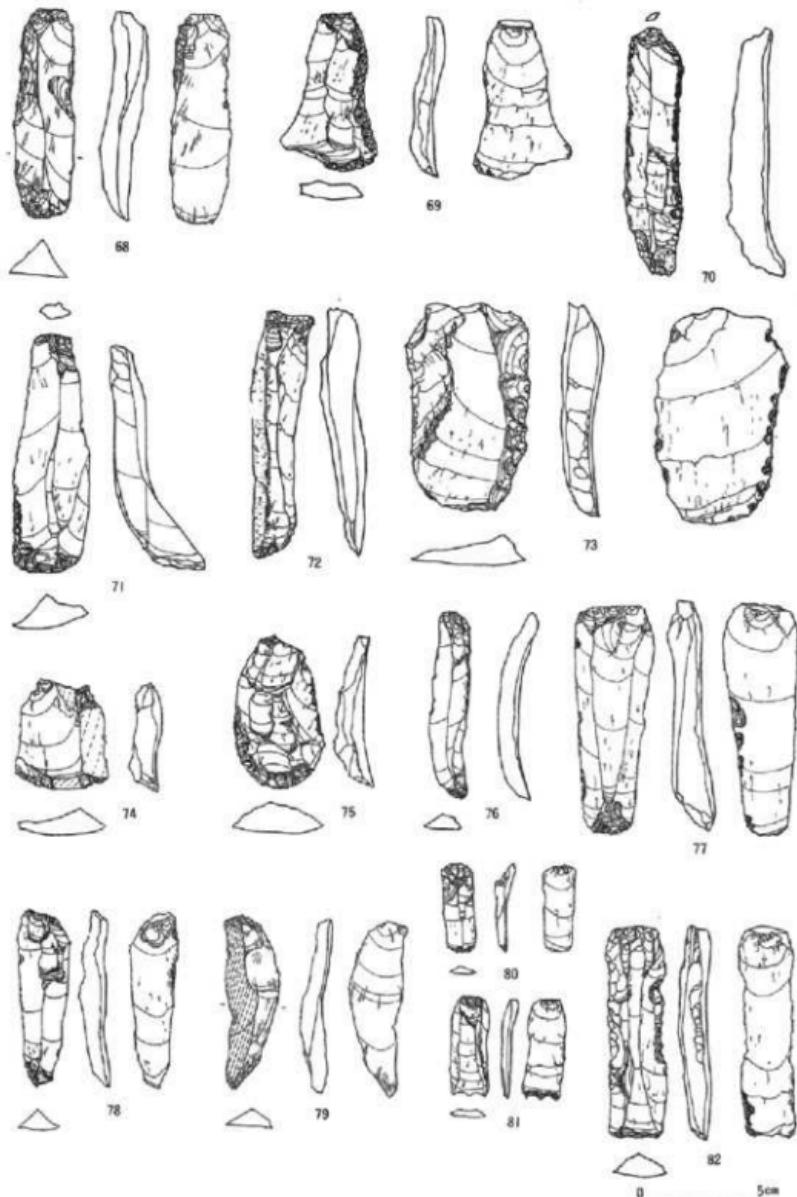
第18図 石器実測図 (3)

0 10cm

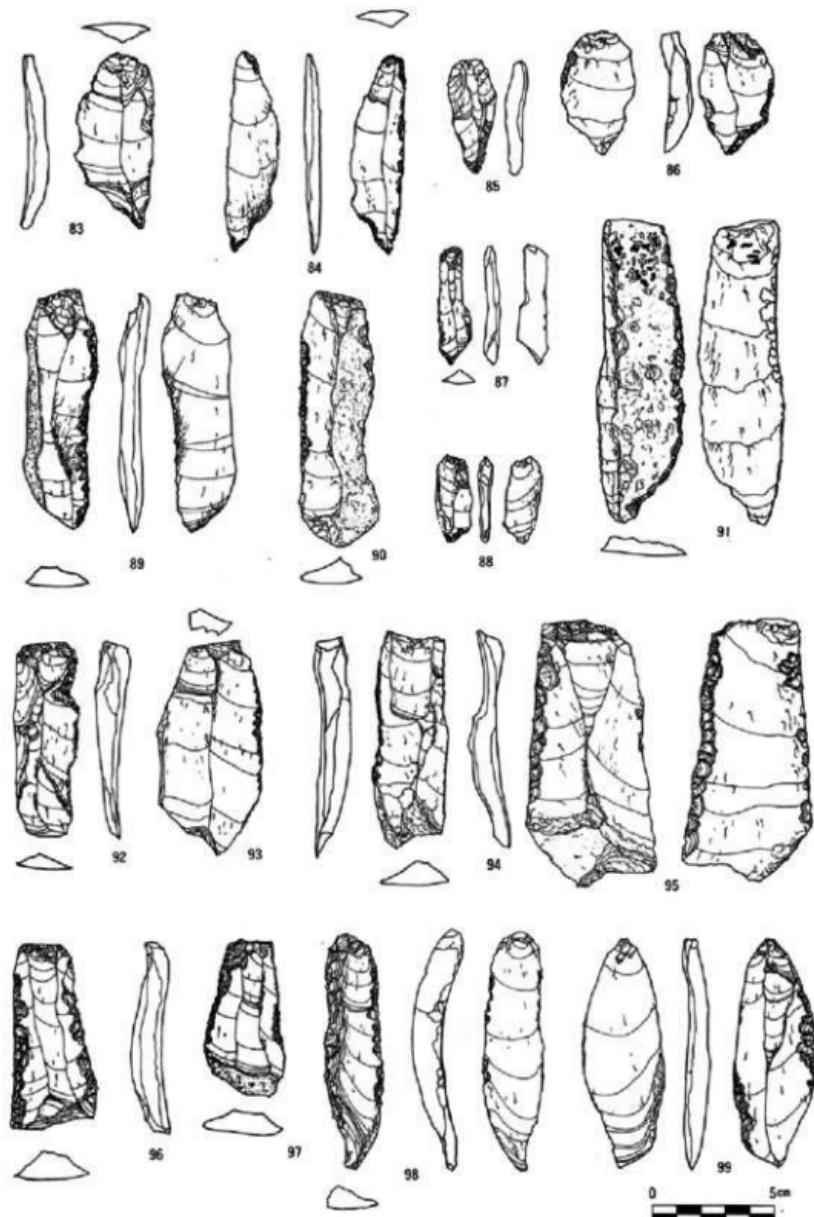


0 5cm

第18図 石器実測図 (4)



第18図 石器実測図 (5)



第18図 石器実測図 (6)

## ○石錐 (105~110)

76点出土した。それを分類すると次のようになる。

### A類 (105, 109, 110)

基部及び錐部の両面を二次加工し、丹念に仕上げたもので、基部幅が錐部の二倍以上の数値を測るもの。

### B 1類

基部及び錐部の片面を二次加工し、丹念に仕上げ、スプーン状を呈するもの。

### B 2類

基部は片面だけ、錐部の両面を加工してスプーン状に作出了したもの。

### C類 (106, 107)

基部及び錐部は両面加工し作出されているが、剥片剥離時の打面を残したり、B類に比し、調整剥離が粗雑なもの。

### D 1類

大形の剥片を利用し、錐部を粗く作出了るもの。なお、基部整形の上で、これを二つに細分できる。錐部の幅は、1.1~1.7cmを測る。

### D 2類

D 1類と形態は同様であるが、小形化したもの。

### E類 (108)

厚い剥片を作出し、これに錐部を製作したもので、断面は三角形を呈する。

### F類

厚さ5ミリ程度の薄い剥片を利用し、3~8ミリの錐部を作出している。素材を見ると縦長と横長とがある。

### G類

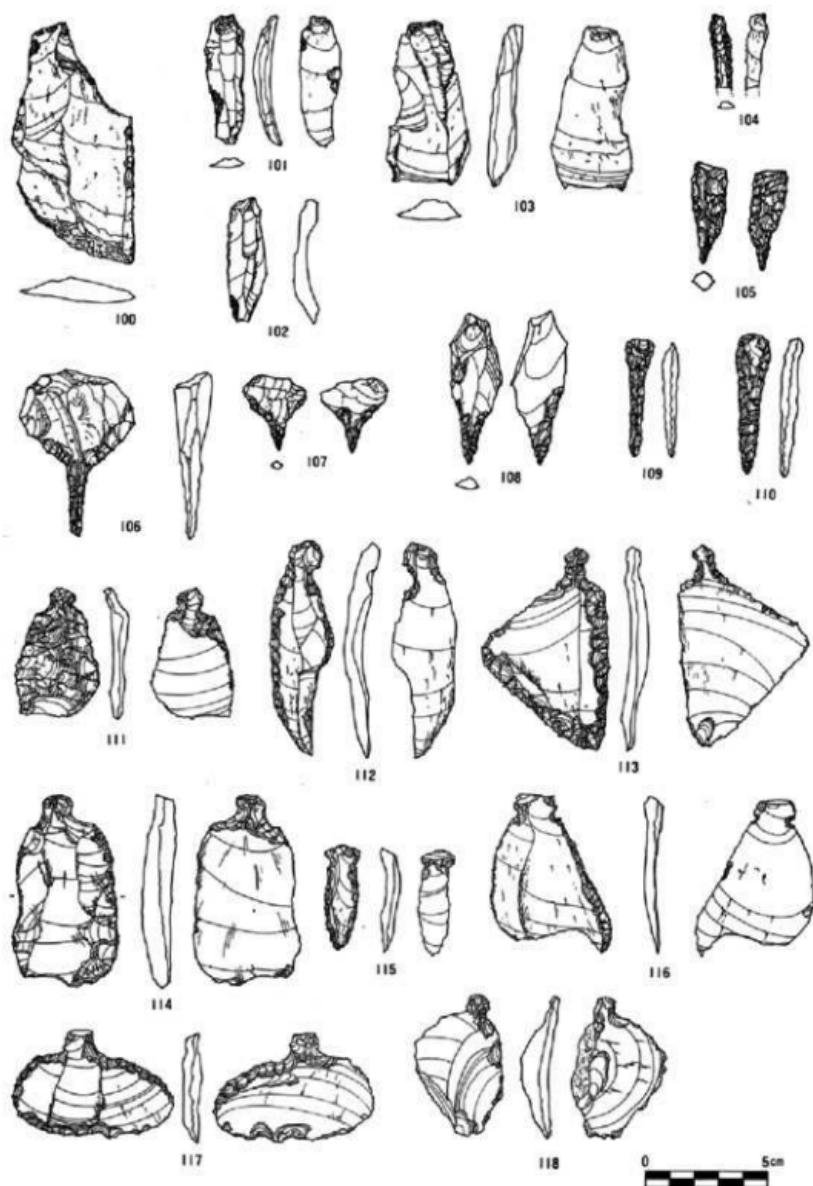
一つの素材から、二つの錐部を作出したもの。

### H類

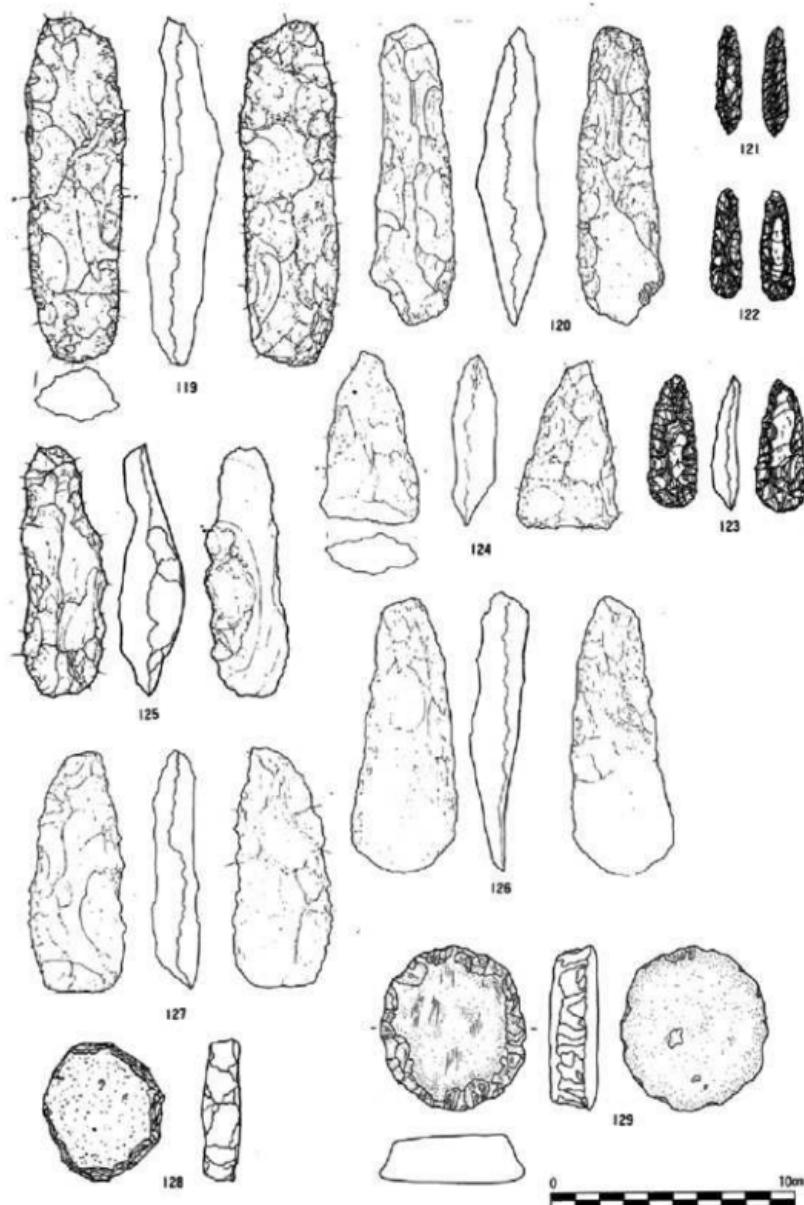
細長で両面加工の石錐である。石鉄の項のE類と似るが、調整剥離がそれと比べ粗雑であり、一次剥離面を残している。  
その他、錐部だけの破損品が3点ある。

第1表 石錐出土数

類	出土点数	破損品	石材
A	22	5	硬質頁岩、流紋岩
B 1	6	1	硬質頁岩
B 2	2	1	+
C	9	4	+. 玉髓
D 1	4	1	+
D 2	10	2	+
E	9	2	+
F	4	1	+
G	1	0	+
H	6	4	+
その他	3	3	+. 黒耀石



第18図 石器実測図 (7)



第18図 石器・石製品実測図 (8)

○石匙(111~118) ○石匙(111~118)

縦形石匙21点、横形石匙7点、つまみ部と体部の一部だけの欠損品で判別不可能なものが1点、計29点出土した。アスファルト付着は認められない。すべて、硬質頁岩製である。

○打製石斧及び籠状石器(119~127)

119点出土している。両面加工品67点、半両面加工品25点、片面加工品27点である。図示した121、122のような小形の両面加工品が16点あり、のみとして使用されたものと考えられる。また、123のように5~8cmのものは10点あり、これは両面加工と半両面加工品に細分することができる。

大形のもので、石斧として使用されたと考えられるものは8点あるが、完形品は3点である。石材は、不明のもの1点を除き、残りはすべて硬質頁岩である。

○磨製石斧(130~138)

完形品は、小形のもの4点だけで、あとはすべて欠損品である。使用痕として8点に打痕が認められる。浅いもので深さ0.5cm、深いもので0.6~1.2cmある。石材は、砂岩、凝灰岩質砂岩、安山岩が用いられている。中形のもので、硬玉製のものが出土しているが、使用痕は認められない。長さ5.43cm、刃部幅1.96cm、基部幅1.35cm、最大厚さ0.93cmである。12号住居跡より検出された。

○石皿(139~140)

2点のみの出土である。139は完形品である。140は欠損品であり、皿面を平坦に磨いて作出している。周囲には2.5~3.5cmの幅に縁を形成し、高さは1cm前後である。

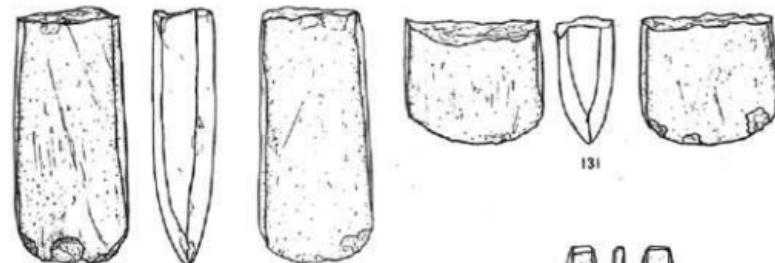
○石椀(141~143)

3点出土した。143の底部の凸部を除去し、安定させる工夫をしている。14の内部には、赤色の顔料(ベニガラ)が一面に付着している。

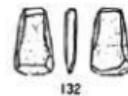
○石製品(128、129、158)

砂岩製の円盤状石製品が二点出土している。また、硬玉製の大珠も出土している。出土地点は、L9区で、1号住居跡と2号住居跡の間である。土質等の存在は、土壤堆積状態が悪く、第II層としか明らかにできなかった。硬玉の質としては、灰色を帯び、表面も風化が進んでいるところがあり、よいとはいえない。刺突口は、表裏両面からあり、若干ずれる。

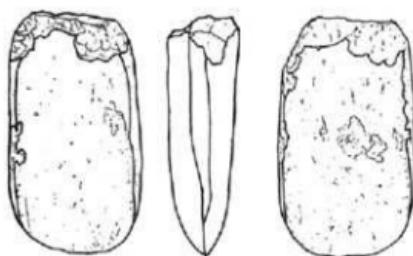
(海野 史芳)



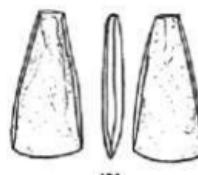
131



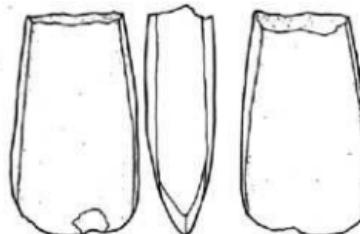
132



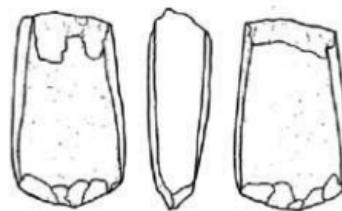
133



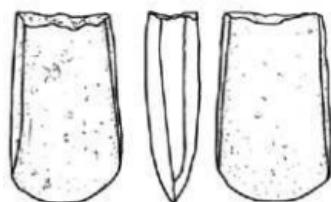
134



135



136



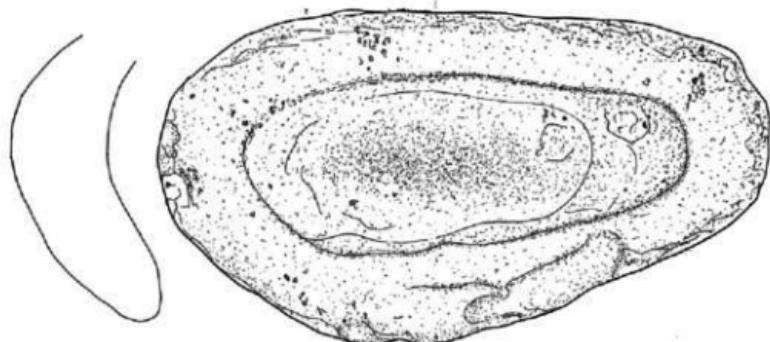
137



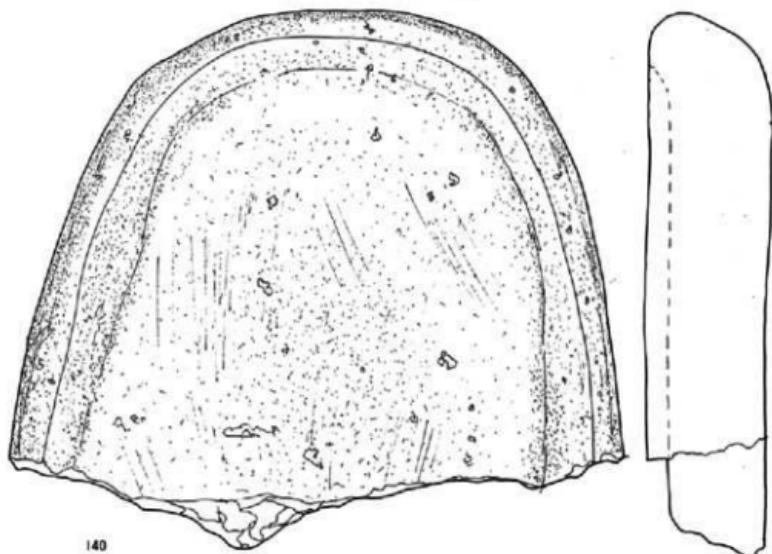
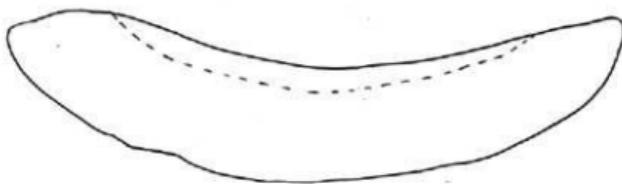
138



第18図 石器実測図 (9)



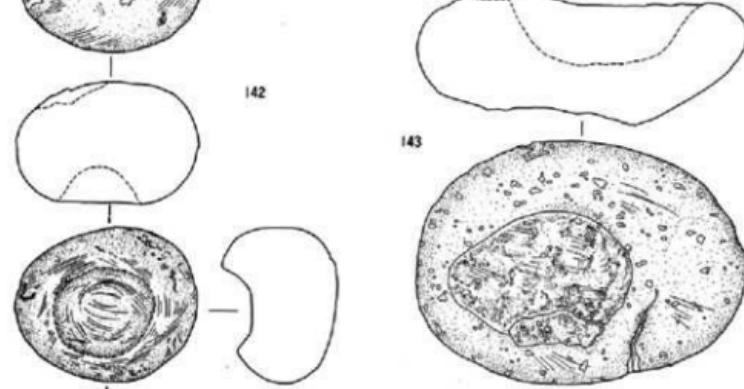
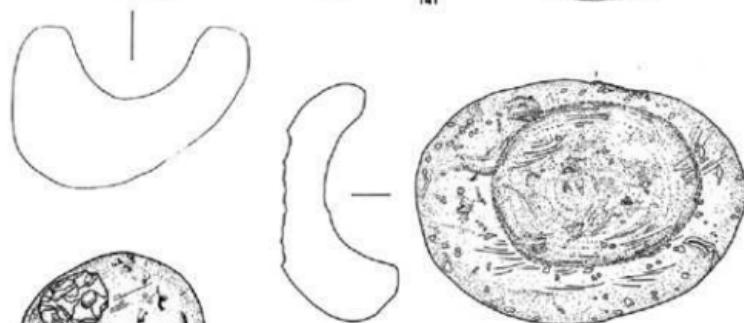
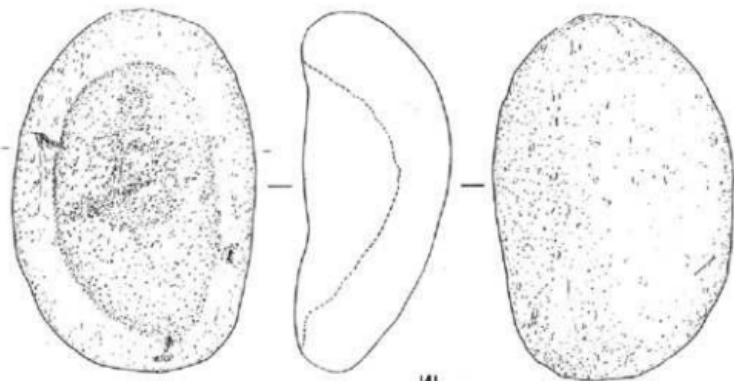
139



140

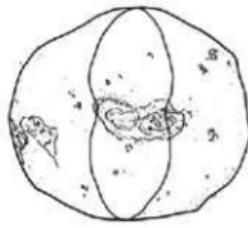


第18図 石器実測図 (10)



0 10cm

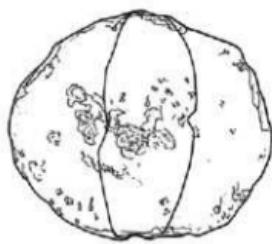
第18図 石器実測図 (II)



144



145



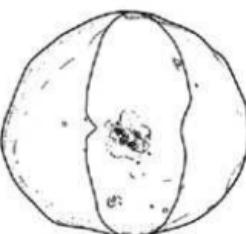
146



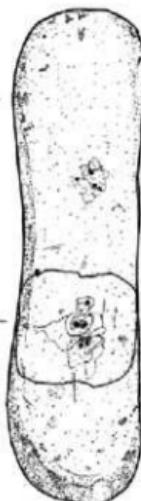
147



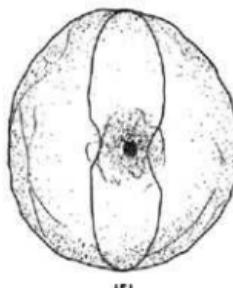
149



150



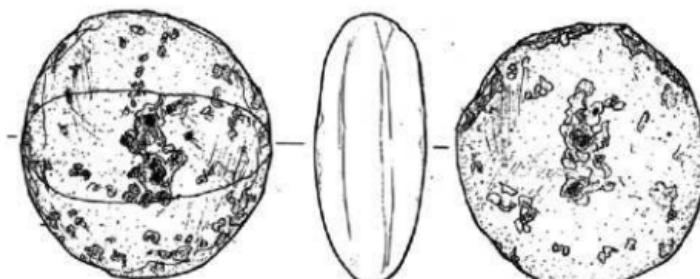
148



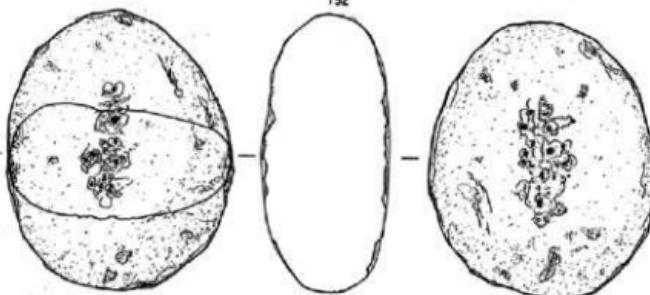
151



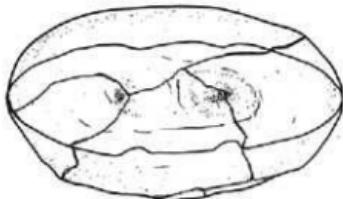
第18図 石器実測図 (1)



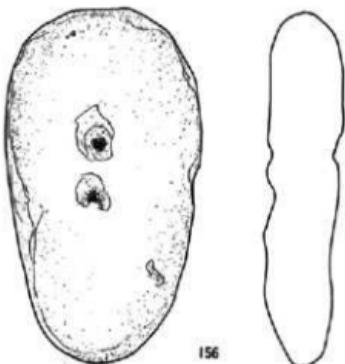
152



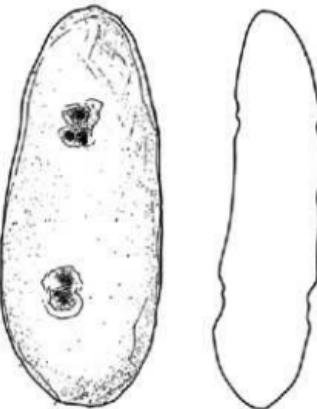
153



154

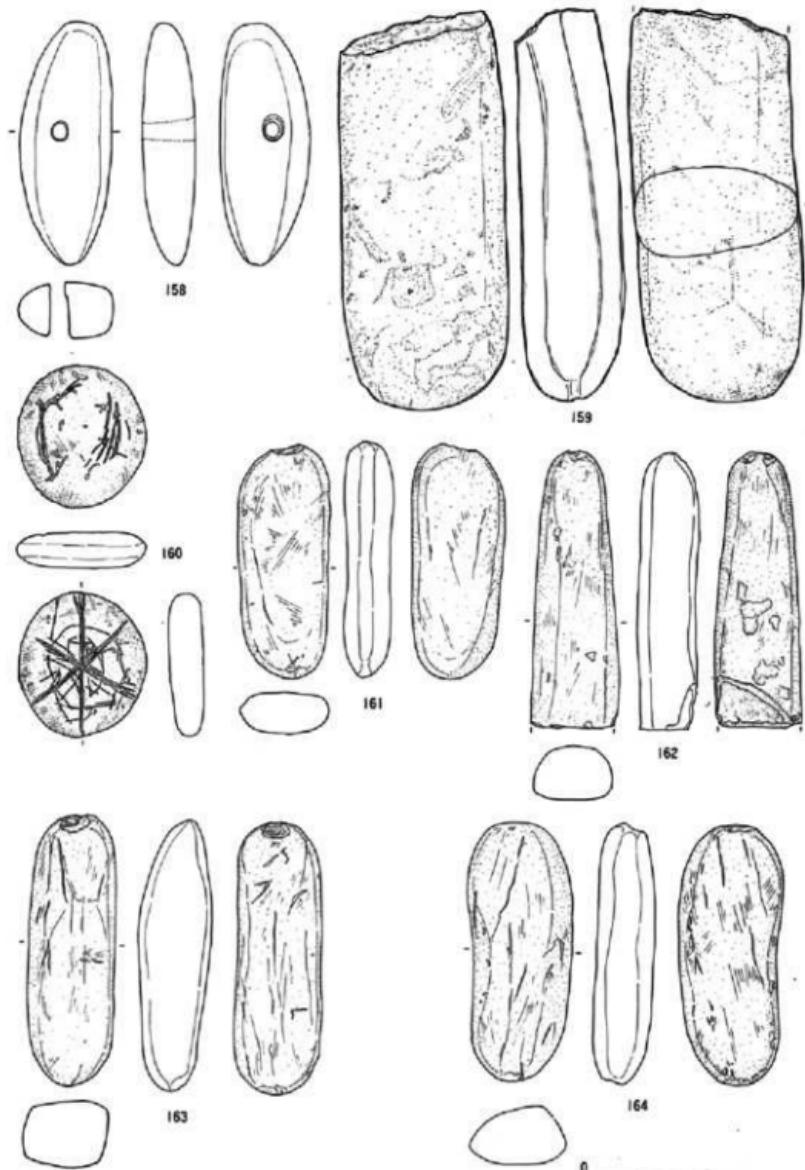


156

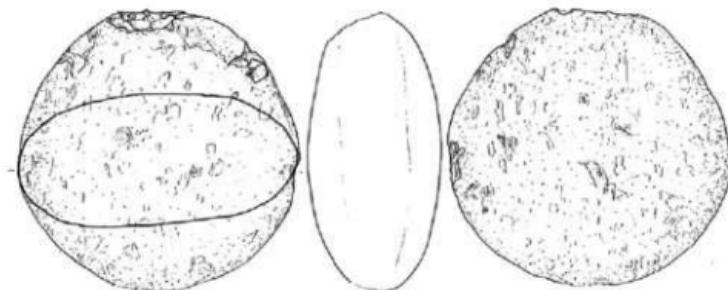


157

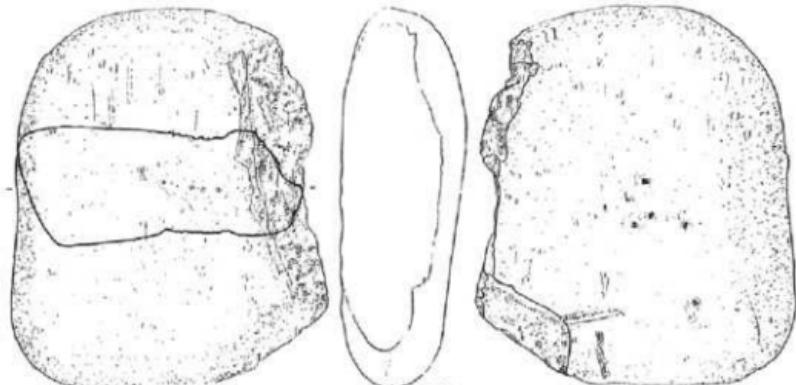




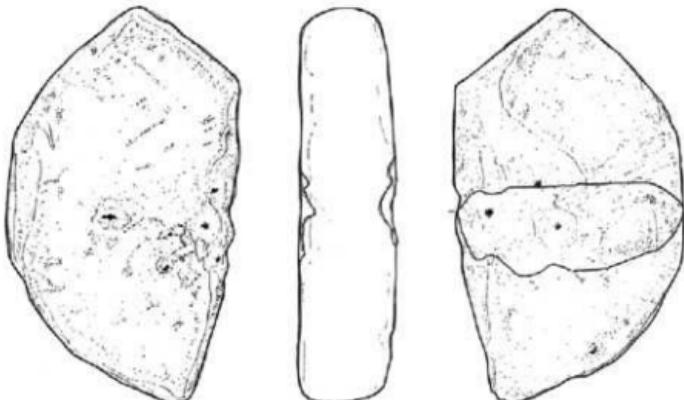
第18図 石器実測図 (14)



165



166



167



第18図 石器実測図 (15)

## 石鑑分類・計測表

番号	類	長さcm	幅 cm	厚さcm	石材	欠損	建物番号・その他
1	A	1.68	1.11	0.21	硬質頁岩		No. 156
2		2.01	1.59	0.40	"		No. 321
3		3.02	1.55	0.28	"		No. 126
4		2.10	1.22	0.33	"	○	No. 675
5		2.87	1.44	0.45	"		
6		1.31	1.29	0.25	"	△	No. 221
7		2.33	1.40	0.40	"		No. 88
8		1.77	1.27	0.36	"		
9		2.49	1.31	0.34	"	△	No. 535
10	B 1	2.15	1.43	0.31	"		No. 691
11		1.92	1.30	0.33	"		No. 9
12		1.80	1.08	0.29	玉髓		
13		1.63	1.06	0.32	硬質頁岩		No. 162 アスファルト付着
14		1.75	1.20	0.22	"		No. 64
15		1.68	1.27	0.30	"		No. 29 アスファルト付着
16		2.88	1.40	0.45	"	◎	
17		1.68	1.29	0.22	"	○	No. 347
18		2.00	1.65	0.40	"	○	No. 288
19		1.60	1.24	0.23	"	○	No. 324
20		3.05	1.39	0.49	"	○	No. 224
21		1.77	1.24	0.35	"	◎	No. 463
22		2.46	1.42	0.29	メノウ	△	
23	B 2	1.49	0.99	0.24	黒曜石	△	
24		1.90	1.18	0.27	流紋岩	△	No. 89
25		1.76	0.86	0.22	"	△	No. 42
26		1.94	1.09	0.24	硬質頁岩	△	
27		1.43	1.24	0.28	"	○	No. 89
28		1.49	1.32	0.29	"	◎	No. 37
29		1.90	1.37	0.29	"		No. 55
30		2.51	1.80	0.34	"	◎	No. 114
31		3.01	2.13	0.49	"		No. 550
32		2.48	1.39	0.39	"		
33		2.61	1.59	0.21	硬質頁岩		
34		2.44	1.28	0.26	"		No. 262
35		1.97	1.24	0.31	"		No. 10
36		1.80	1.48	0.28	"		No. 223
37		2.80	1.24	0.42	"		
38		2.27	1.24	0.28	"		No. 290
39		2.75	1.24	0.49	"		No. 225
40		4.43	1.34	0.44	"		No. 229

番号	類	長さcm	幅 cm	厚さcm	石 材	欠損	建物番号・その他
41	B 2	2.16	1.14	0.31	硬質頁岩		S T 6 内
42		1.77	1.60	0.36	"		No 423
43		1.91	1.77	0.25	"		No 123
44		2.32	2.09	0.56	"	○	No 130
45		1.31	0.95	0.29	"		No 20
46		1.70	1.24	0.36	"	○	No 237
47		1.82	1.35	0.35	"		
48		1.87	1.28	0.29	"		ST 8 内 アスファルト付着
49		1.59	1.03	0.23	"	◎	No 3
50		2.29	1.21	0.40	"	△	
51		1.95	1.00	0.26	"	△	No 536
52		1.39	1.08	0.24	玉 鮚	○	No 204
53		1.59	1.10	0.32	硬質頁岩	◎	
54		2.30	1.35	0.41	"	○	No 339
55		1.78	1.23	0.25	"		
56		2.00	1.16	0.33	石 英	△	No 543
57		2.59	1.42	0.45	硬質頁岩	○	S T 6 内
58		2.38	1.52	0.40	"		No 135
59		1.97	1.21	0.24	"		
60		1.54	1.46	0.28	"		No 198
61		2.71	1.70	0.32	"		S T 6 内
62		2.47	1.90	0.32	"		No 351
63		2.75	1.96	0.53	"		No 687
64		2.24	1.33	0.36	"		
65	C	1.82	1.59	0.38	"		No 18
66		3.77	1.67	0.32	"		No 180
67		2.88	1.58	0.62	"		No 453
68		2.47	1.75	0.22	"		
69		2.75	1.78	0.32	"		No 411
70		2.84	2.03	0.71	"		No 70
71		2.84	1.73	0.60	"		No 246
72		2.25	1.50	0.41	"		No 7
73		1.91	1.16	0.20	"		No 82
74		2.26	2.10	0.58	流紋岩		No 80
75	D 1	3.80	1.38	0.49	硬質頁岩		No 203
76		2.72	1.71	0.38	"		No 41
77		2.83	1.40	0.50	玉 鮚		No 71
78		2.74	1.43	0.38	硬質頁岩	△	No 39
79		3.38	1.28	3.05	"		No 14
80		2.63	1.40	0.49	"		No 185

番号	類	長さcm	幅 cm	厚さcm	石 材	欠損	建物番号・その他
81	D 1	2.62	1.35	0.48	硬質頁岩		No. 58
82		3.05	1.23	0.39	"		No. 135
83		2.44	1.78	0.50	"		
84		2.00	1.74	0.33	流紋岩	○	No. 18
85		2.29	1.06	0.27	メノウ		No. 273
86		2.76	1.45	0.39	硬質頁岩		No. 108
87		2.01	1.25	0.39	玉髓		No. 9
88		2.49	1.40	0.38	"	○	No. 223
89		2.24	1.45	0.34	"	●	No. 29
90		2.78	1.82	0.85	"		No. 107
91		2.62	1.18	0.35	硬質頁岩		S T 11内
92		2.04	1.31	0.23	"	○	No. 113
93		1.81	1.41	0.39	"		
94		1.82	1.23	0.26	"	●	No. 185
95		2.99	1.27	0.36	"	△	No. 15
96		2.57	1.40	0.29	"	●	S T 11内
97		2.30	1.46	0.38	"	●△	No. 293
98		1.70	1.43	0.43	"	○	No. 186
99		1.61	0.95	0.46	"	○●	No. 252
100		2.14	1.44	0.33	"	○●	No. 239
101		2.25	1.21	0.34	"	●	No. 85
102		2.24	1.65	0.68	"		
103		2.77	1.16	0.31	"		
104	D 2	2.02	1.25	0.28	"		
105		1.68	1.56	0.46	玉髓		No. 149
106		2.59	2.26	0.77	硬質頁岩		No. 200
107		3.14	1.82	0.51	"		No. 105
108		2.32	1.20	0.41	"		No. 340
109		2.63	1.93	0.57	黒曜石		
110		2.85	1.42	0.33	硬質頁岩	○●	No. 698
111		2.97	1.36	0.52	"		No. 260
112		3.39	1.23	0.47	"		No. 4
113		1.94	1.29	0.38	"		No. 676
114	E	2.35	0.83	0.25	"		No. 264
115		3.75	1.67	0.72	"		No. 280
116		3.52	0.97	0.44	"		No. 197
117		3.52	1.09	0.29	"		No. 322
118		3.01	0.92	0.47	"		No. 297
119		4.38	1.03	0.36	"		No. 391
120		3.80	1.07	0.77	"		No. 98

番号	類	長さcm	幅 cm	厚さcm	石材	欠損	建物番号・その他
121	F	2.81	1.79	0.39	硬質頁岩		No. 31
122		2.77	1.60	0.49	流紋岩		
123		2.61	1.28	0.28	硬質頁岩		No. 86
124		2.57	1.89	0.60	"		
125		1.93	1.50	1.52	"	○	
126		2.93	2.46	0.44	"		
127		3.55	2.39	0.36	"		No. 323
128		3.68	2.61	0.55	"		No. 258
129		3.34	2.47	0.43	"		No. 515
130		3.32	1.72	0.41	"		No. 532
131		3.44	1.66	0.45	"		No. 424
132		2.99	2.61	0.66	"		
133		2.83	2.09	0.40	メノウ		No. 65
134		3.49	1.88	0.70	玉髓		No. 124
135		2.64	1.83	0.55	"		No. 571
136		2.76	1.98	0.55	硬質頁岩		No. 203
137		3.11	2.17	0.71	メノウ		
138		2.48	1.35	0.38	硬質頁岩		No. 263
139		2.78	1.55	0.51	"		No. 475
140		3.06	1.45	0.55	"		
141		3.53	1.68	0.62	"		No. 316
142		3.11	1.90	0.30	"		S K34内
143		3.14	2.07	0.68	メノウ		
144		2.26	1.37	0.43	黒曜石	●	
145	C	3.38	3.14	0.52	硬質頁岩		S T 7内
146	G	4.03	1.70	0.34	硬質頁岩		S T 15内

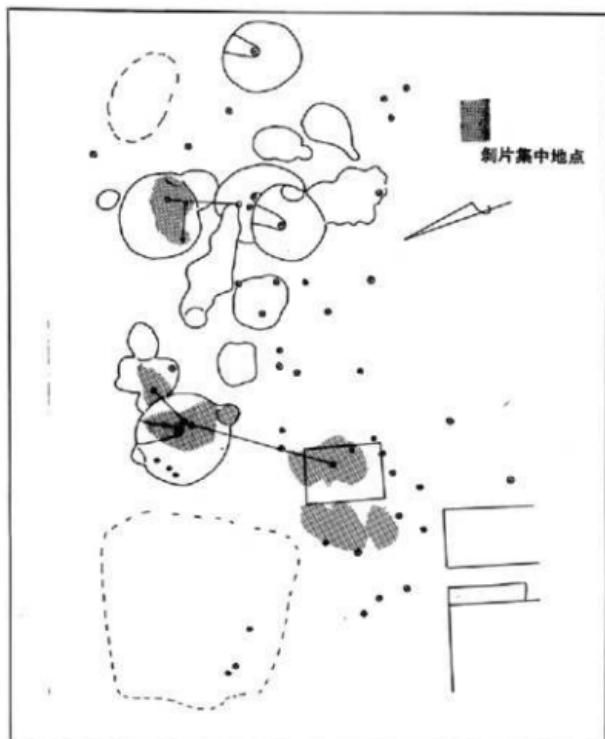
欠損 無印——完形品  
 ○——先端部欠損品  
 △——脚部欠損品、茎部欠損品  
 ◎——先端部及び脚部欠損品  
 ●——側縁部欠損品

### C. 橋上遺跡における石器製作作業の分析

今回の調査では、1,200 m<sup>2</sup> の調査区から多くの土器とともに、おびただしい量の剥片、碎片石器が出土した。その量は、整理箱で120 箱ほどであった。調査が進むにつれて、第19図に示されている地点から、1,000 点をこえる剥片類が出土した。出土状況や石器とみられるものの存在から、石器製作の「場」として機能したと思われた。未だ整理途中であるが、分析を進める中で、多くの接合資料が得られた。（概要は表1に示してある）接合資料は、今後、土器や礫と同様、分布論や統計的応用などから技術分析、集団の生活行動復元の重要な要素となるであろう。

本遺跡でも、住居址、土壤に同一母岩の接合する剥片、しない剥片の分析を通して、ある程度の石器の供給、移動の様相が看取された。

今回の報告では、現時点でとらえられる技術基盤と石器製作及び利用の行為について考察することにする。



第19図 石器集中分布図

表1

地点	石器工房跡	S T 11	S K 30	S K 34
石核	22	25	3	2
石刃状剥片	32	75+	8	1
剥片	約 1,200	約 800	約 60	約 45
石器	7	35	4	
总数	(1,261)	(935)	(75)	(48)
識別母岩数	26 +	23+	10+	2
接合資料数	12個体	7個体	△	3
土器出土	○	○	○	
型式	大木10式	大木10式	大木10式	

東表に示した数量は現時点での数量を表示した。今後、増加することもありうる。  
※接合資料数 △ は未整理。 ※他の遺構出土石器はのぞいた。

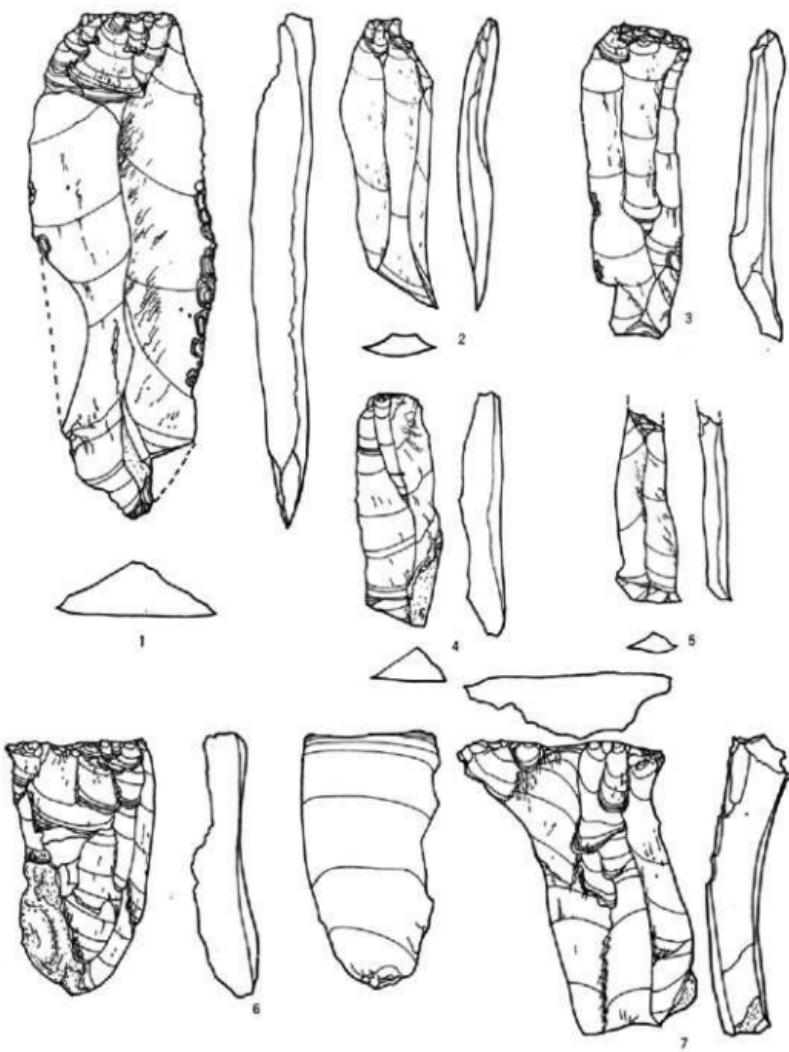
## 1. 石刃状剥片、石核について

### 1) 石刃状剥片 (註1) 第20図

検出された石器の中で縦長の石器類と素材となったであろう石刃状剥片が注目された。全体としての比率は小さいものの、この石刃状剥片を利用して調整加工を施し“石器”にしているのがわかる(註2)。この遺跡に居住した人々が石刃状剥片を目的剥片として生産していたものとみられる。共通してみられる特徴としては、

- 背面の剥離痕は腹面(註3)と同一方向か横方向からの剥離で構成される。
- 背面には1本以上の縁が存在する。
- 長幅関係に一定の相関がみられる。
- 長さ2~20cm程度まで存在する。
- 打面調整痕がみられる。

などが抽出される。1は大形の石刃状剥片で頭部調整が9回ほどの剥離で行なわれており、右側辺に調整加工がみられる。左側辺にも存在したとみられる。2,3,4はともに背面に2本の縁を形成している。このぐらいの石刃状剥片が比較的多い。6,7はともに作業面再生剥片とみられる。6は単設打面の石核でヒンジフラクチャーが進行したため、下方向から新しく作業面を作出したときの剥片であろう。7では、下→上方向の剥離が観察される。石核は両設打面の可能性がある。



0 5cm  
第20図 石刃状剥片

## 2) 石核

石核は目的剥片の形態によって3類型に分類される 第21図。その中でI類はa、b、cの3つに分かれる。Ia類は单設打面で円錐形を呈し、Ib類は单設打面で横方向の調整が施され稜が形成されるもの、Ic類は両接打面とみられるものである。II類は厚手の剥片に打面を形成し、小形で薄い剥片を剥離している石片を多く生産したとみられる。第22図(3)-4は、多くみうけられる不定形の石核の1例で、両面から大小、不定の剥片が剥離されている。

以上の石刀状剥片や石核は整理途中の段階であり、今後、新しい類型の石核も予想される。表2は石器工房跡、S T 11出土石核の割合で、S T 11ではI類の石核が多く、石器工房跡ではII、III類の石核が多い。表1でもS T 11出土の石刀状剥片が2倍ほど数えられる。石刀状剥片と石核については、技術論上、後で再度とりあげることにする。

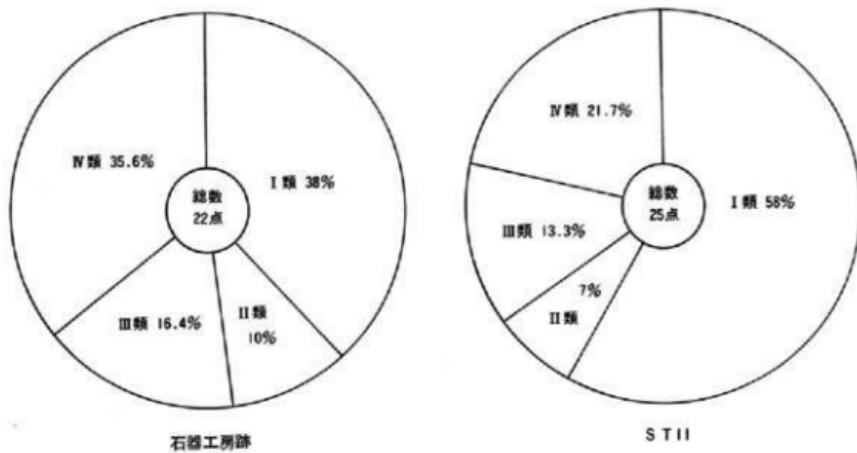
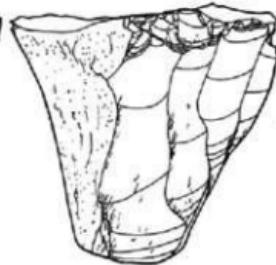
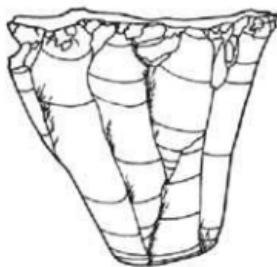
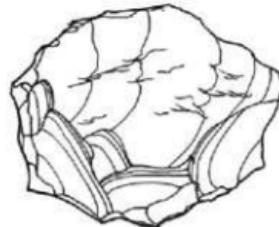
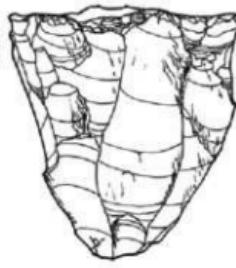
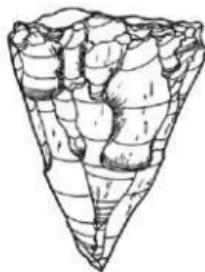
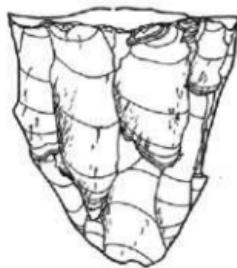
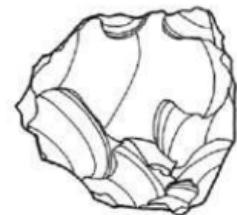


表2 石核類型割合

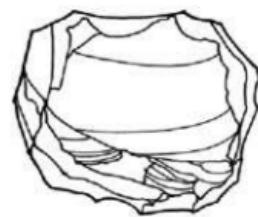
		モ デ ル	石 核
I	a		
	b		
	c		
II			
III			

第21図 石核分類図

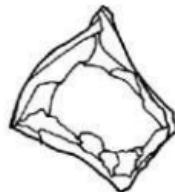
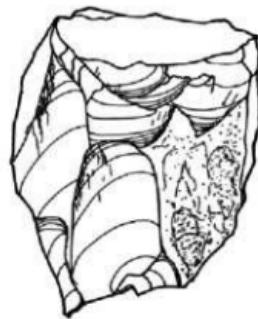
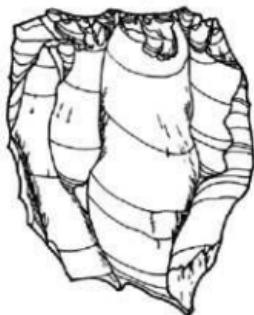


0 5cm

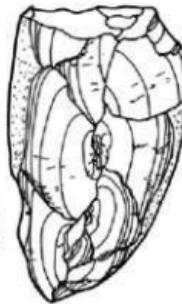
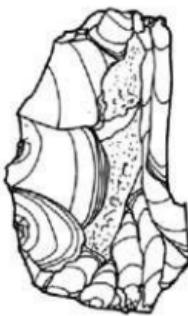
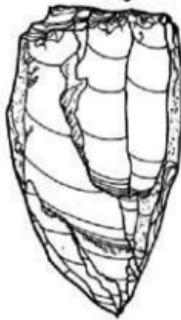
第22図 石核実測図 (1)



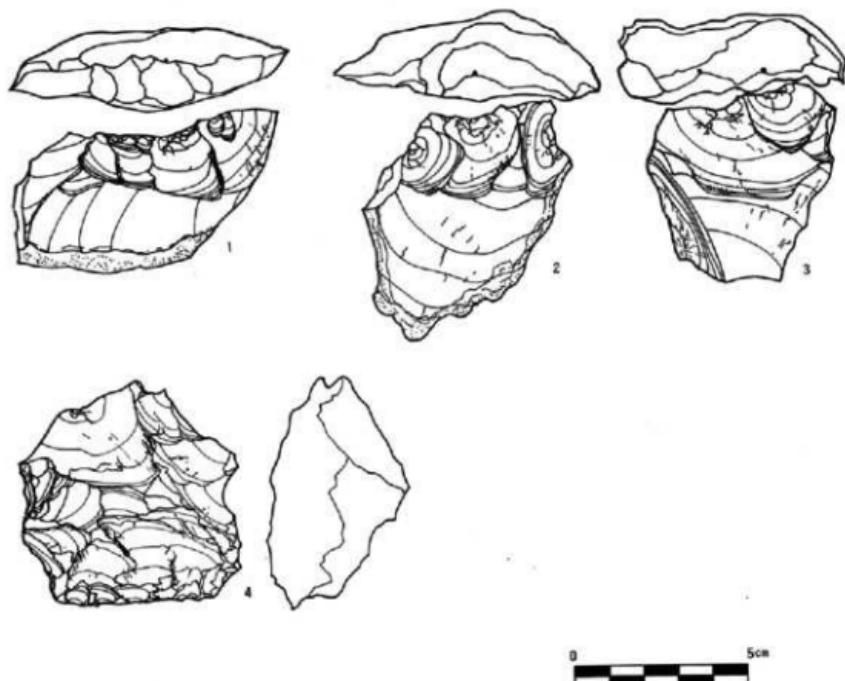
3



4



第22図 石核実測図 (2)



第22図 石核実測図 (3)

表3 石刃状制片属性表

No	区	石材	長 cm	幅 cm	最大長	最大幅	最大厚	最大幅位置	最大厚位置	打面長	打面厚	刮離角	打面調性	欠損状況	側面調性
1	J 5	H S	—	—	15.1	5.5	17.1	M	U	2.5	10.1	72°	無	左側辺	右側辺
2	I 6	H S	8	2.8	8.7	2.8	0.8	U	M	0.7	0.2	70°	無	無	無
3	I 6	H S	9.3	3.0	—	—	1.0	L	L	1.4	0.5	71°	無	無	無
4	J 5	H S	7.0	2.3	—	—	0.9	L	L	1.0	0.4	53°	無	下部	上部
5	K 6	H S	(5.5)	1.7	—	—	0.7	L	L	—	—	—	—	—	—
6	J 5	H S	7.6	4.4	7.6	4.4	2.1	U	L	0.5	0.4	65°	—	—	—
7	H 5	H S	8.5	—	11.2	6.2	2.0	U	U	—	—	—	—	—	下部

表4 石核属性表

No	区	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	類型	打面調性	側面調性	存査面調性	生成剥片	側面剥片	備考
1	K 5	H S	8.2	7.0	(6.3)	I a	有	21+	?	石刃剥片	無	中心に節理がある
2	I 9	H S	7.3	8.4	(6.4)	I a	有	11+	無	石刃剥片	有	ヒンジフラクチャー存在、微形式
3	HJ 7	H S	8.0	4.7	(5.2)	I b	有	7+	?	石刃剥片	有	両歫打面
4	J 7	H S	8.8	6.5	(5.2)	II	打面再生	7+	?	石刃剥片	有	剥片利用
5	HJ 7	H S	4.0	7.7	2.1	III	—	6+	—	小形剥片	有	剥片利用
6	K 6	H S	6.6	6.8	2.3	III	—	4+	—	小形剥片	有	剥片利用
7	H 6	H S	5.3	5.8	2.1	III	—	2+	—	小形剥片	有	剥片利用
8	K 7	H S	6.5	5.9	4.1	III	—	?	—	不定	無	—

## 2. 接合資料にみる剥離技術の実体

### —母岩別資料にみる剥離技術の実体—

個別資料は、「一個の石核から剥離された一連の剥片（目的剥片、石核調整剥片、碎片）とその石核、およびこれらの剥片を素材とした石器とその製作時に生じた碎片の集合体である」と定義できる。この定義に従えば、原石を粗割りし、それぞれの粗割片を石核として剥片生産が行なわれる場合、および剥片を石核に転用して剥片生産が行なわれる場合には、一個の原石から複数の個別資料が得られたことになる。実際、橋上遺跡においてこのような状況を示す接合資料を多数検出することができた。したがって母岩別資料とは「同一の原石に属する個別資料の集合体である」と定義できる（鈴木遺跡I、II 1978）。

母岩別に資料化する作業は、石器工房跡、S T11、S K30、S K26の剥片石器群について行ない、他の発掘区についてはこれらの地点の母岩別資料と同一のものがあるかを確認するにとどめた。その結果、表1に示した母岩別資料を確認できた。母岩別資料中、接合したもののがいくつかを説明していく（表5）。

#### —接合資料—

##### ○母岩別資料1（第23図）

###### —作業順位—

〔①→②→③1, '1→④(2,3,4,5)→⑤6→⑥7→⑦残核〕

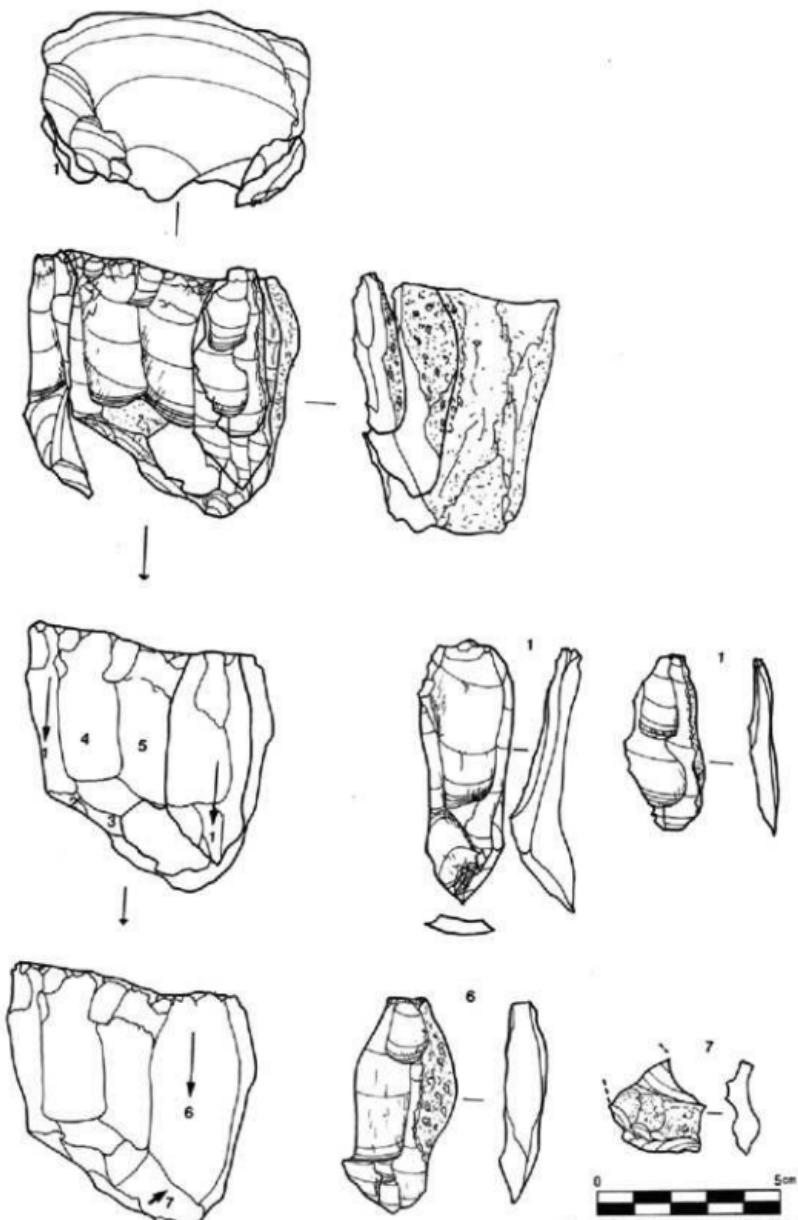
①上部に打面が設定される。左側に打面の調整が行われる。②打面から下に向かって目的剥片が剥離されるとともに1の下にみられるように作業面の調整も行なわれる。③1,'1の剥片が剥離される。④2,3と石核下部から剥離が行われ、つづいて、4,5と上の打面から剥離が再開される。得られた剥片はヒンジフラクチャーをおこしている。⑤6の剥片が剥離される。⑥下から7の剥片が剥離され、⑦石核は廃棄された。この残核はIb類に属し、接合資料から打面再生がなされたかは不明である。

##### ○母岩別資料4（第24図）

###### —作業順位—

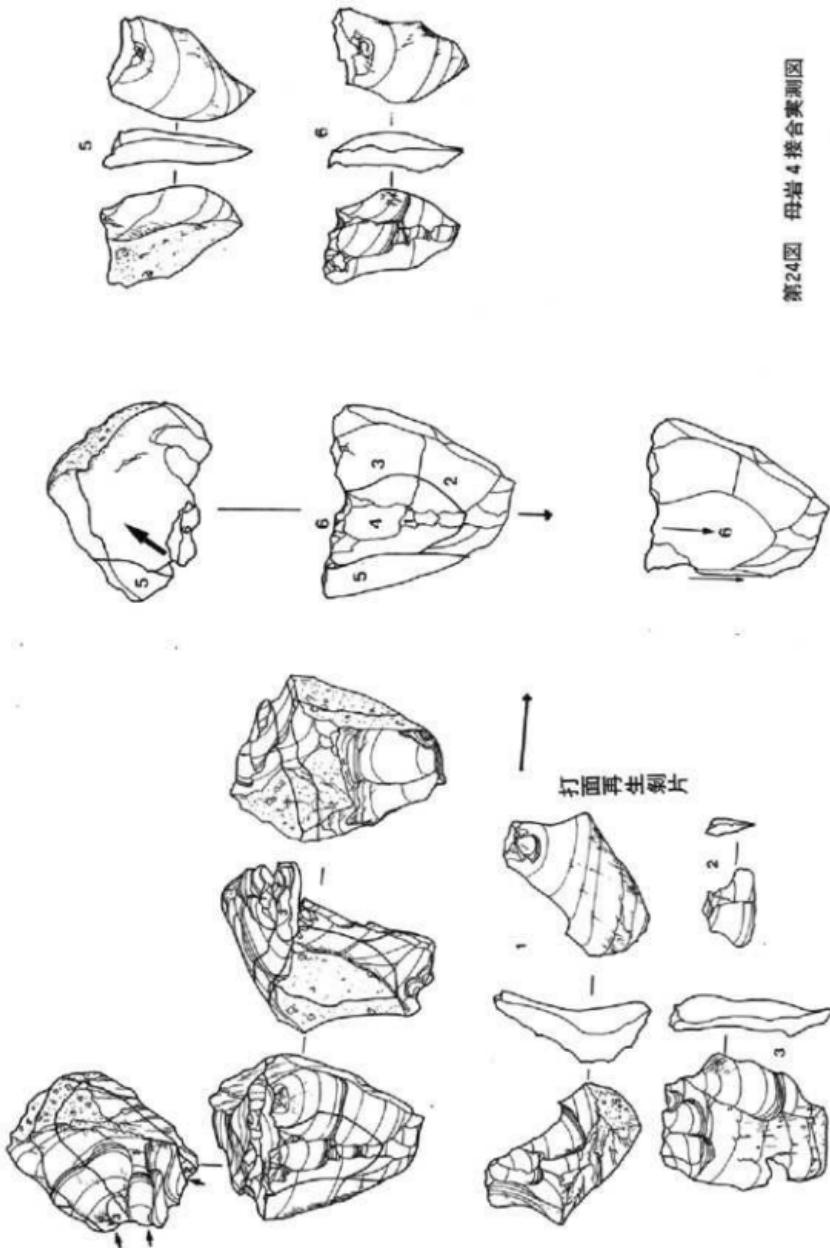
〔①→②1, 2→③→④3→⑤→⑥5, 6→⑦残核〕

①原石が用意され、打面が作られ、同時に作業面も用意される。②1,2の剥離から打面が形成される。③目的剥片の剥離及び下部に調整が加えられる。④3の剥離により、打面が再生される。⑤目的剥片の剥離が行なわれる。⑥5,6の剥片が剥離される。5,6とともに断面三角形の縦長剥片を剥離しようとした製作者の意図が看取される。6がヒンジフラクチャーとなつたため剥離作業は中断され、石核は廃棄された。この残核はIb類に属し、1回の打面再生が行なわれ、約10回の目的剥片が生産されている。



第23図 母岩 I 接合実測図

第24圖 母岩4接合測量圖



○母岩別資料 5 (第25図)

すべて作業面の調整剝片であり、B C類に属する。SK26出土である。

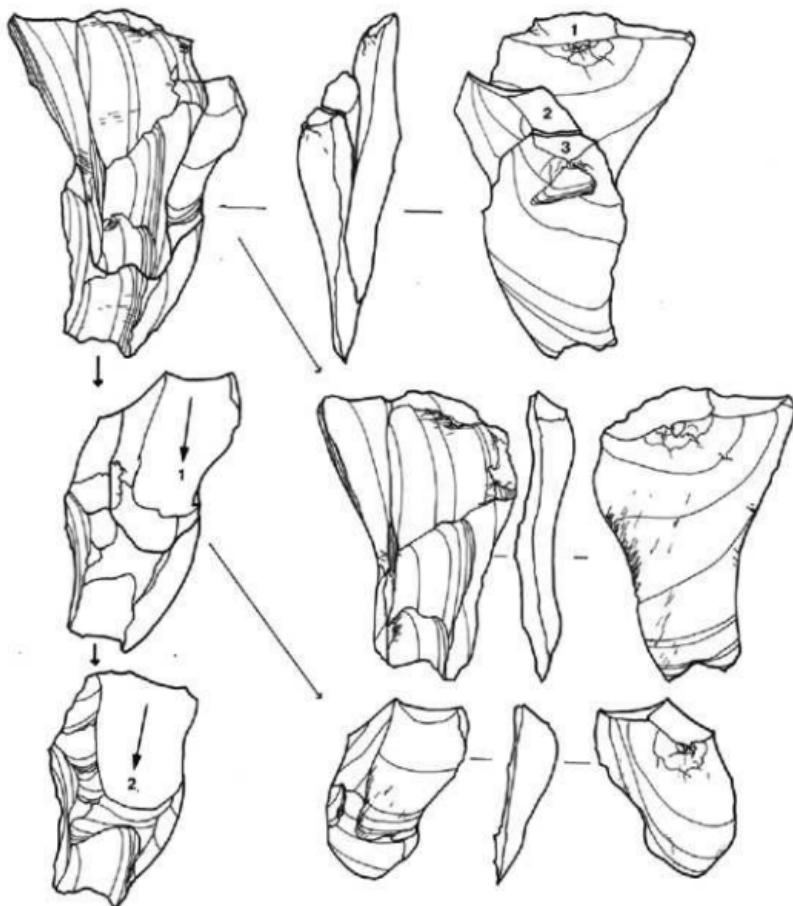
○母岩別資料 9 (第26図)

目的剝片とみられる剝片が2点接合しているB C類に属する。

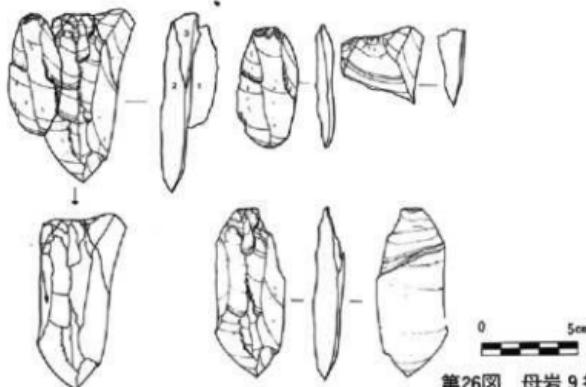
表5

	母岩名	石質	同一母岩剝片数	接合数	tool	確認剝離面数	作業面相対順位	残核類型
1	母岩1	頁岩	11	5	0	12	7	I b
2	母岩4	頁岩	27	6	0	10	6	I b
3	母岩5	頁岩	15	$\frac{3}{(2)}$ $(2)$	0	10	4	
4	母岩9	頁岩	20	$\frac{3}{(2)}$ $(3)$	0	7	3	

※数量は分析中のため現在数を示す  
※( )は他の接合個体別資料



第25図 母岩5接合実測図



第26図 母岩 9 接合実測図

表6 母岩 1 接合剥片属性表

	長	幅	厚	打面長	打面厚	末端形状	微細剥離	欠損	備考
1	7.2	2.6	0.6	0.6	0.3	フエザー	—	—	
'1	4.9	2.1	0.3	0.5	0.2	フエザー	—	—	自然面有
6	5.7	2.8	1.1	0.9	0.4	—	—	—	自然面有
7	(2.5)	(2.5)	0.6	—	—	—	—	—	上部

表7 母岩 4 接合剥片属性表

	長	幅	厚	打面長	打面厚	末端形状	末端形状	欠損	備考
1	6.0	4.9	1.6	1.1	0.3	—	—	—	
2	2.1	3	0.6	1.1	0.5	—	—	—	
3	6.4	5.0	1.1	?	0.7	—	—	—	
5	4.6	3.0	1.1	2.1	1.0	フエザー	—	—	自然面有
6	4.6	2.8	1.2	2.3	0.4	—	—	—	

表7 母岩 5 接合剥片属性表

	長	幅	厚	打面長	打面厚	末端形状	微細剥離	欠損	備考
1	7.5	5.0	0.7	5.0	0.9	ヒンジー	—	—	
2	4.5	3.1	1.2	2.8	1.1	ヒンジー	—	—	
3	5.2	3.4	1.0	1.3	0.9	ヒンジー	—	—	

表8 母岩 9 接合剥片属性表

	長	幅	厚	打面長	打面厚	末端形状	微細剥離	欠損	備考
1	6.2	3.1	0.7	1.0	0.2	ヒンジー	—	—	
2	8.7	3.4	1.2	1.1	0.2	—	—	—	
3	4.0	3.7	1.3	—	—	—	—	—	

(単位はすべてcm)

### 3. 技術的特徴と製作工程

出土した各種の石器、石核、剥片、碎片などの総体を石器群とよんでいる。石器群理解の一視点として、石器製作技術の復元を基礎としてゆく方法がある。すなわち、石器製作が行なわれた結果であり、ここに剥片1点、碎片1点にさえ必然的な存在理由、作業行為が反映される。

石器製作は、それぞれの工程が一定の技術を基盤として存在し、相互に関連しあっている。よって各技術の解明として製作工程の把握、相互の関連を求めるこにより石器製作のあり方が理解できる。

把握されるべき工程としてはI、石器の素材を生産する工程（註4）II、加工工程（註5）という2段階に分けられる。以後、この段階にそって、検討、考察していくことにする。

#### I) 工程I 剥片生産技術A (第28図)

○石核素材：拳大から幼児の頭大の円碟を用意する。

○打面形成：円碟の一端に水平方向の打撃を加え、帽子状の剥片を取り去ることによって行なわれる。

○体部調整：作業面形成、打面形成にひきつづいて、石核体部、側面、背面などに、主として水平方向の加撃による調整加工が行なわれることがある。石核においてこれが明瞭に認められる場合や接合復元例中からこの体部調整過程のもっとも顕著な例としてクロステッドフレイクの存在や石核の背面に棱が形成される例がある（第29図）

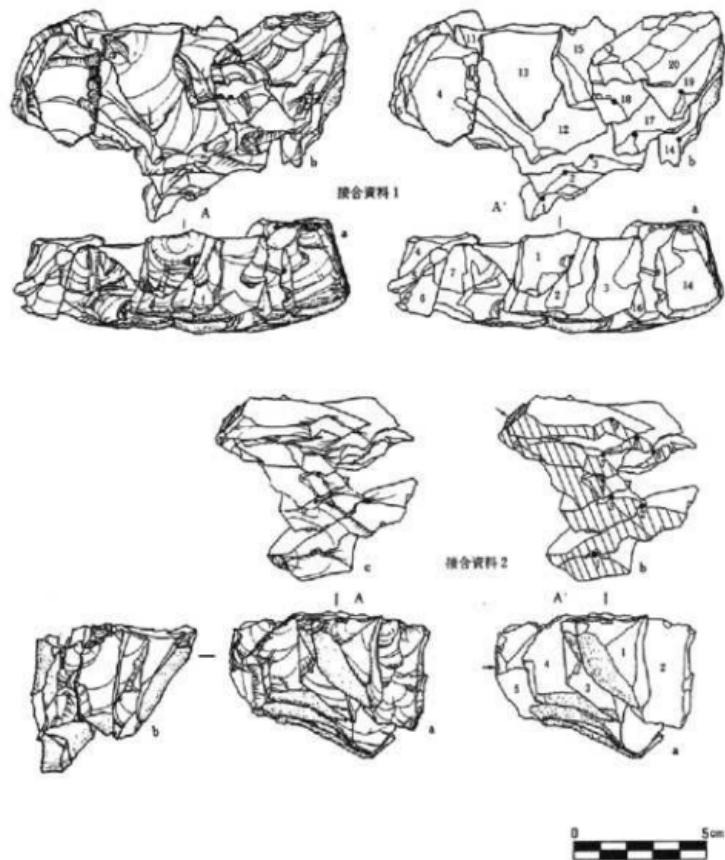
○打面細調整：打面の鋸端部に調整が行なわれる。目的剥片の剥ぎ取りに先立って、全ての打面でこれが実施されるというわけではない。もともとの打面の形状に左右されるようである。

○目的剥片の連續的剥取：I類の石核からは、一つの打面から5～15点ほどの目的剥片が取られている。

○打面再生：一定量の目的剥片の剥取後、打面の再生が行なわれる。石核の一端を水平に輪切りにするようにして実施される場合と打面の周囲から求心的な方向で幾度かの剥離を加えて行なう場合がある。

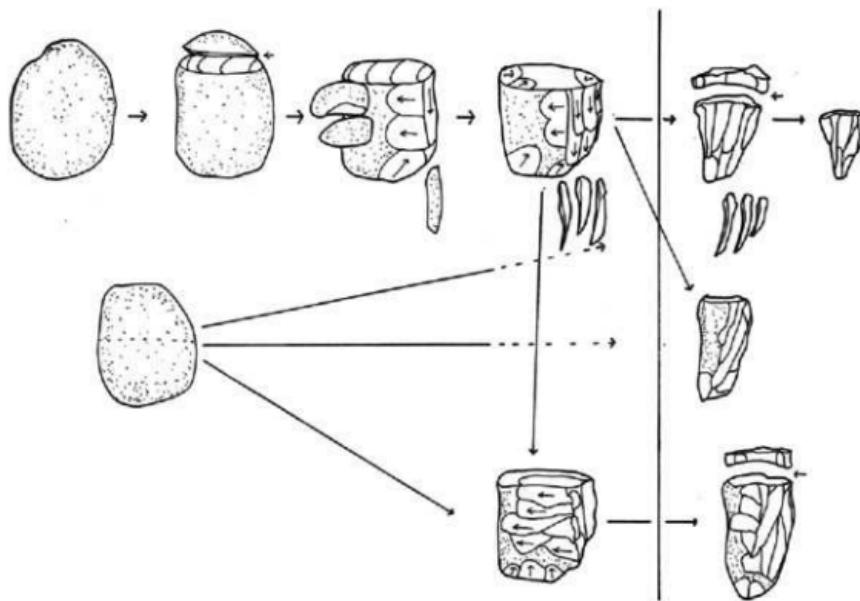
○打面転移(作業面転移)：90°転移し作業面を打面として剥離作業を行うものや、180°転移し、両設打面となるものがある。

○目的剥片(石刃状剥片)：目的剥片の長さは、資料の残存率100%のもの90例について計測した結果では、最大23cm、最小2cm、平均7.4cmということになる。5～15cmの間でそれぞれの階級に資料が散在するというかたちになった。これは、剥片剥離技術自体が、何度も打面の再生を行ない、石核の体高を減じさせつつ作業を遂行していくものであって、大小様々な剥片が生じるのはむしろ自然であるとみなすことができる。第30図は、長幅相関のヒストグラムで2.0～3.0の間にピークがみられ、平均は2.67であった。同じ作業面長であっても、打点の深度に

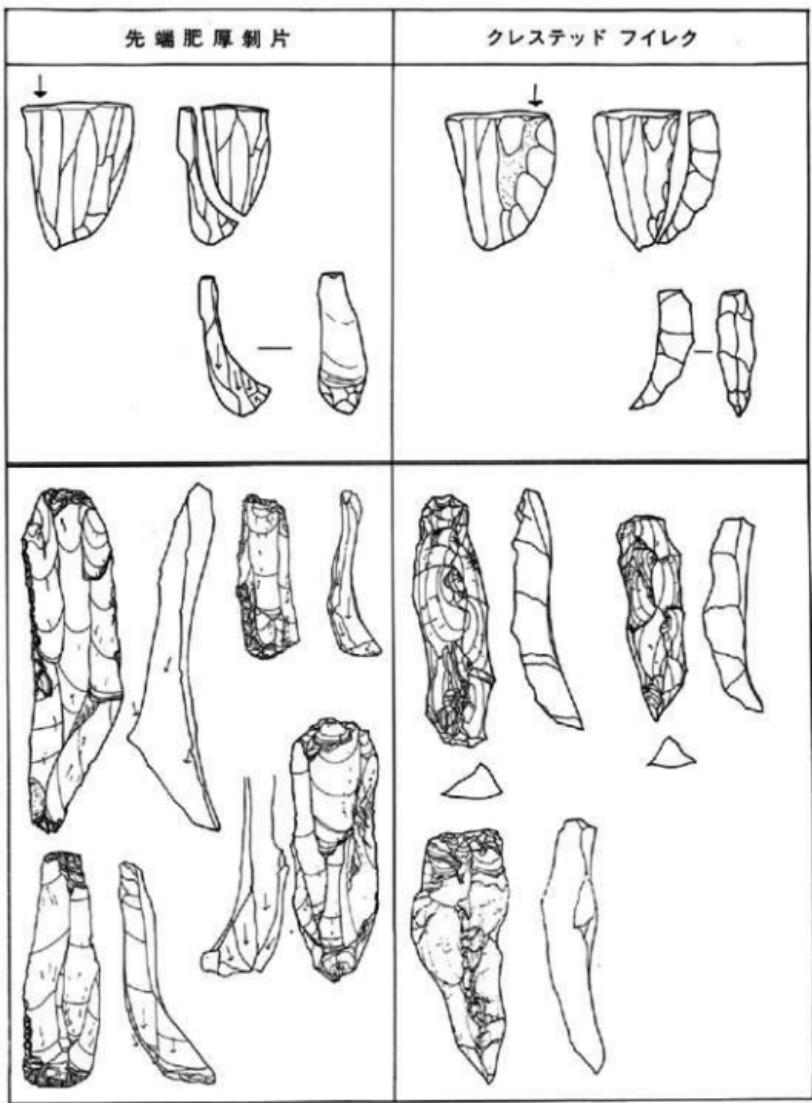


第27図 宮城県仙台市茂庭遺跡の石器接合資料（1983茂庭 仙台市教育委員会）

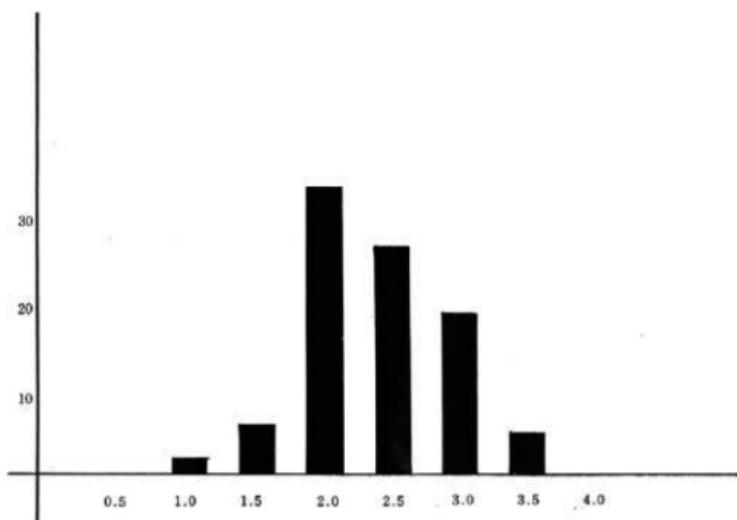
よって刺片の幅が様々に変化していることが同時にわかった。図15は石刀状刺片の刺離角のグラフで、資料50例を計測した。100~120にかけて大きな集中をみるとできる。平均は108.5°であった。ちなみに石核側の打面角をみてみると、78°, 65°, 73°, 53°, 60°という数値を取り出すことができる。これは刺離角と補角の関係をなすとみることができる。また、刺離が進むに従って、刺離角が大きくなることがわかる。作業面が次第に円錐状になっていくためと思われる。



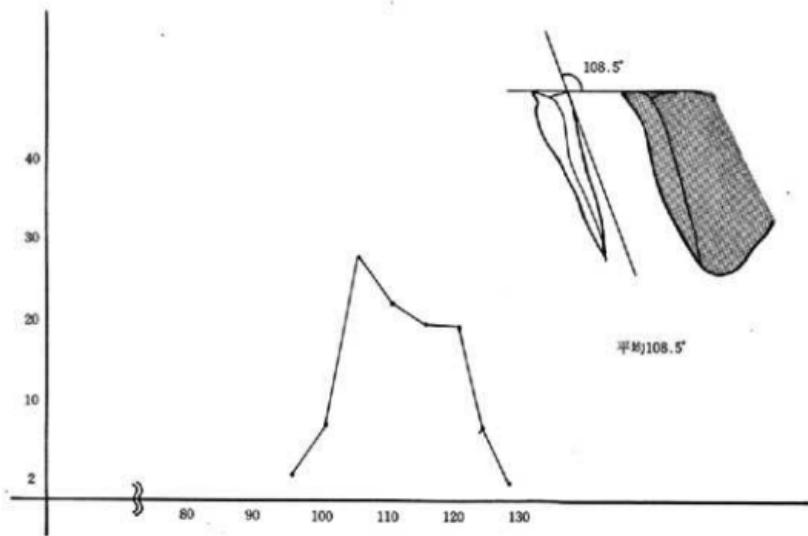
第28図 刺片生産技術



第29図



第30図 石刃状剝片 長幅相関ヒストグラム



第31図 石刃状剝片 剥離角分布図

## 2) 工程 I 剥片生産技術 B (石核II類)

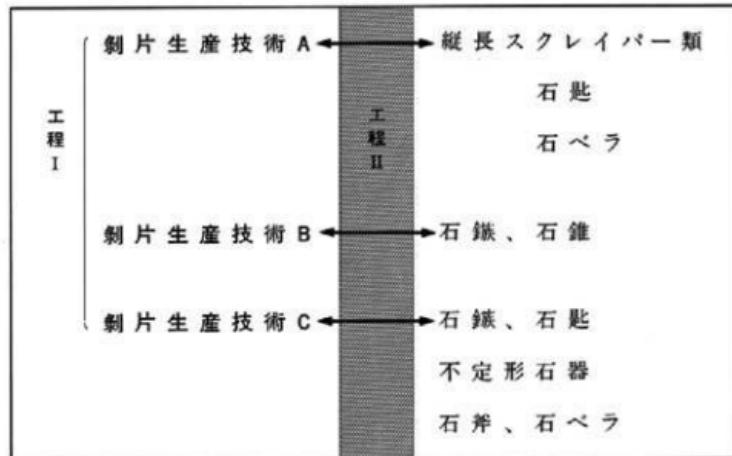
- 石核素材：10cm前後の厚手の剥片を利用している。
- 打面形成：前段階で形成された面を利用している。、剥片上部に剥離を加え打面を形成するものが存在する。するもの、
- 目的剥片の連続的剥取：1つの石核から2～10点の目的剥片が剥取されている。左から右へ、右から左、またはランダムに剥取されているのがみられる。
- 打面再生、調整、体部調整は行なわれない。

## 3) 工程 I 剥片生産技術 C (石核III類)

- 石核素材：拳大から幼児の頭大までさまざまである。
- 打面形成：円碟の一端からの剥離から全体にわたって行なわれる。
- 剥片の連続的剥取：石核全体にわたって不定形の剥片が剥取される。
- 調整等の有無は確認されていない。

## 4) 工程II 素材の加工と製品 (石器)

図16に素材と加工後の製品を示した。I類の石核より生産された石刃状剥片は主に縦長のエンドスクレイバー、サイドスクレイバーに加工される。II類石核より生産された小形剥片は、石鏃、石錐などが加工製作された。III類石核による不定形剥片からは、多くの不定形石器と箇中の石匙などが製作されたようである。特定の剥片生産技術と特定の石器には相関関係があり、一定の技術基盤の上に“石器”が生産されていたとみられる。



	石核	素材	製品
1			
2			
3			
4			
5			

第32図 素材と製品の関係図

#### 4. 橋上遺跡における石器製作作業の分析

石器の接合作業の意義は大きく以下の3点に要約できる。

##### 1. 技術論

石器と石核は、剥片・碎片を問において技術的な対応関係を有する事より、剥片剥離の逆手順を踏む事ができ、すなわち、接合作業を通してその技術は復元される。

##### 2. 型式論

不定形石器の認定や、特定石器の系譜をより確実に立証することが可能となる。

##### 3. 分布論

遺跡内部の遺物、特に石器に関しては、そのものの動静が看取できる。この時、手順として単なる一方の碎片であろうが、特定器種であろうが同じ舞台にのせて接合作業にかかる必要がある。その結果、石器の消費、移動過程や遺構内における特定器種のあり方や碎片のあり方から自立的な遺構か相互補完的な遺構などの性格付けが可能となる。

橋上遺跡においても以上の意義にもとづいて、接合分析を進めてきた。今回の調査で得られた石器類は膨大な量である。中でも図1に図示した地点からは集中的に大量の石核・剥片・碎片が出土した。石器製作、廃棄の場とみられる。また、住居跡や遺構ごとに遺物の多寡や同一母岩の移動がみられた。以下、母岩別資料、接合関係から石器製作作業と移動についてふれてみる。

#### 母岩別資料と遺存状況

剥片剥離作業が行われた母岩別資料が原形まで復元された時、そこに残された作業段階は、打面形成・打面調整を経て、若干の目的剥片剥離を含む初期作業段階、打面再生・打面転移も含む目的剥片、剥離される中期作業段階、若干の目的剥片を剥離し石核が廃棄される終末期作業段階の3段階が整然と残されているはずである。ところが、他地点からの搬入、他地点への搬出、あるいはその地点内での行動等の諸条件が組み合わされた結果、多くの母岩別資料は完全に復元されることなく様々な遺存状況を示すというのが現実の姿である。本遺跡でもこうした様々な遺存状況を示す母岩別資料が確認された。図17に製作段階を8類型及び作業過程を概念化してみた。(1981 野沢遺跡)例として、今回の報告で紹介した4つの母岩別資料の遺存状況についてふれる。

##### ○母岩別資料1 (第23図)

石器工房跡から出土した。打面作成・作業面作成剥片が存在せず、目的剥片も少なかった。C類に属する。目的剥片の多くは他の地点へ運ばれたようである。

##### ○母岩別資料4 (第24図)

石器工房跡よりまとまって出土した。自然面のある剥片や打面作成・再生剥片の存在からA、B、C類に属し、得られた目的剥片は他の地点へはこぼれたようである。

### ○母岩別資料 5 (第25図)

—作業順位—

(①→②→③ 1→④→⑤2, 3)

①個体左側辺に前の剥離痕がみられる。ほとんどヒンジフラクチャーとなっている。②個体上部に右側から打面が作出される。③1が剥離される。④上部左側から2, 3の剥片の打面が作出される。⑤2, 3の剥離が行なわれる。ともにヒンジフラクチャーをおこす。

この接合資料は、母岩5の3つの個体別資料の中の一つで、背面にみられるヒンジ痕を除去するように剥離がすすめられている。

### ○母岩別資料 9 (第26図)

—作業順位—

(①1→②2→③3)

①1の剥片が剥離される。②2の剥片が剥離される。1, 2ともにやや幅広の石刀状剥片である。

#### A類

1. 原石の採集
2. 遺跡内への原石の持ち込み
3. 剥片剥離作業の開始(初期作業)
4. 遺跡外へ石核の持ち出し
5. 他遺跡で剥片剥離作業の再開

#### B類

1. 他遺跡で初期の剥片剥離作業を開始  
· 中断
2. 遺跡内への石核の持ち込み
3. 剥片剥離作業を再開・展開・中断
4. 遺跡外へ石核の持ち出し
5. 他遺跡で剥片剥離作業の再開

#### C類

1. 他遺跡で剥片剥離作業を開始・展開  
· 中断
2. 遺跡内への石核の持ち込み
3. 剥片剥離作業の再開・終了
4. 遺跡内で残核を遺棄

#### A B C類

1. 原石の採集
2. 遺跡内への原石の持ち込み
3. 剥片剥離作業の開始(初期作業)・  
展開(中期作業)・終了(終末期作業)
4. 遺跡内に残核を遺棄

#### A B類

1. 原石の採集
2. 遺跡内への原石の持ち込み
3. 剥片剥離作業を開始・展開・中断
4. 遺跡外への石核の持ち出し

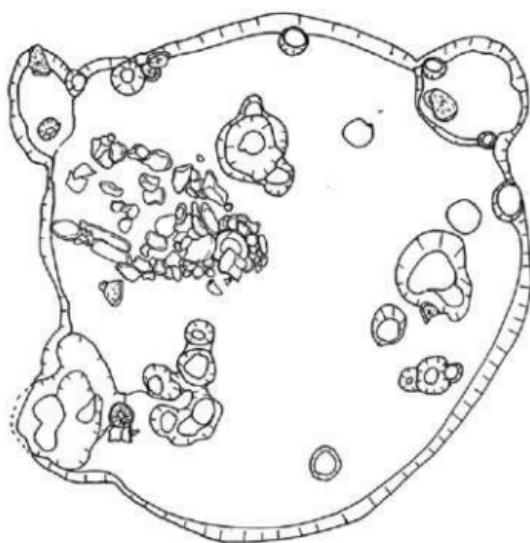
#### B C類

1. 他遺跡で剥片剥離作業の開始・中断
2. 遺跡内への石核の持ち込み
3. 剥片剥離作業を再開・展開・終了
4. 遺跡内で残核を遺棄

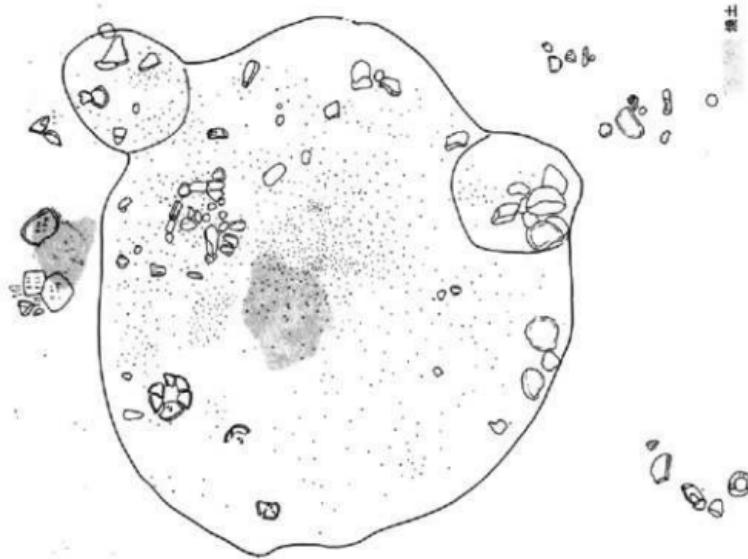
#### B C類

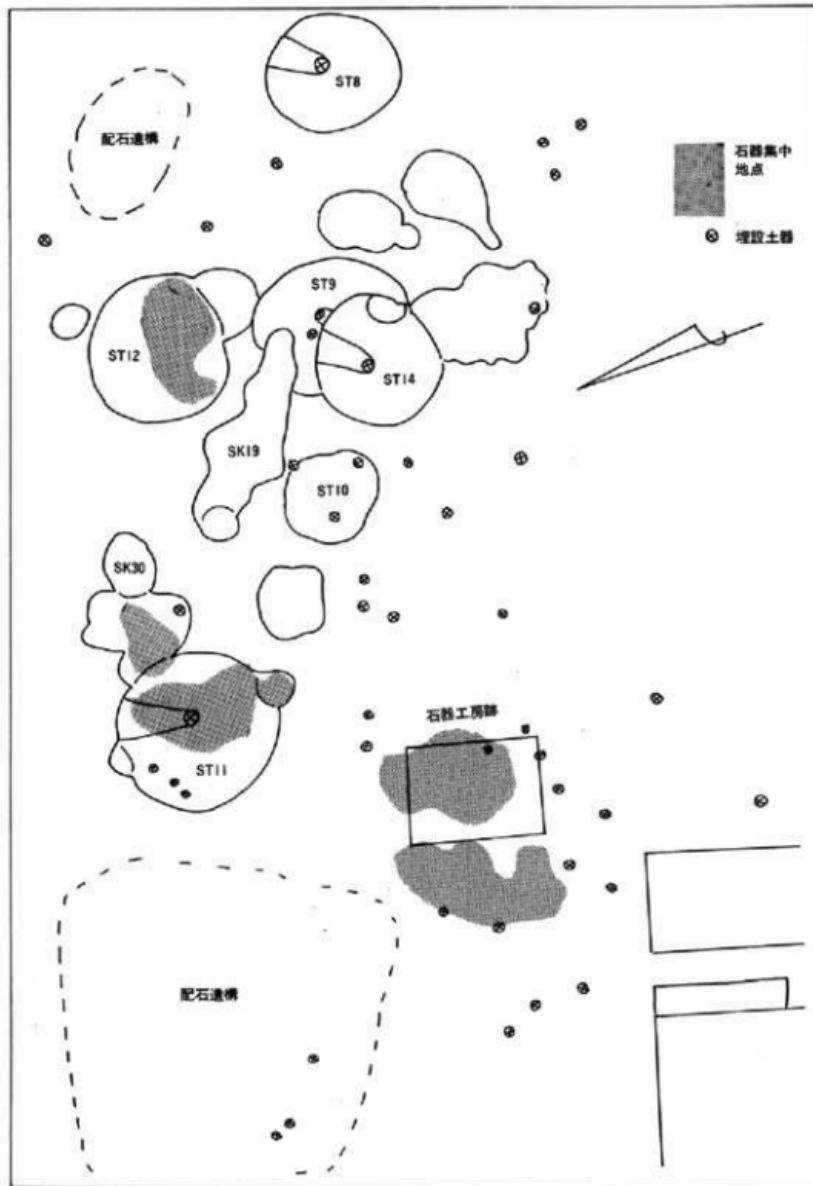
1. 他遺跡で剥片剥離作業の開始・中断
2. 遺跡内への石核の持ち込み
3. 剥片剥離作業を再開・展開・終了
4. 遺跡外へ残核を持ち出し

第34圖 ST11完掘狀況



第33圖 ST11剝片分布圖





第35図 刺片接合概念図

紹介した接合資料は同一地点出土資料をもとにしたため、移動した石核・剝片類を追求できなかったが他の接合資料が第35図に示されるような接合関係がみとめられた。S T 11、S K 30、S K 26、石器工房跡は接合関係からその背後に製作者、使用者の動きがわかる。

S T 11では多量の剝片・碎片・石核が住居跡の覆土中から床面まで出土し、複式炉内にも混入していた。第36図にその分布を示したが、住居跡中央付近に集中している。遺構確認面よりすでに多く検出されたことから、S T 11廃絶後、集落の中で石器製作の場として転用されたものとみられる。

石器工房跡とした地点は遺構で確認できなかったが、3組の台石が周辺に存在し多量の剝片・碎片が出土したため、仮に名づけた地点である。発掘当初から剝片類が埋土を含まず積み重なるようにして検出された。そして剝片類の間から大量の碎片も同時に検出されたのである。

S K 30は、S T 11に付属する形で存在し、ここでも多くの剝片が得られた。

S K 26では、ほとんど底に近いところから36点の同一母岩とみられる剝片が出土し、7点が接合した。剝片の貯蔵庫か、近くで石器製作が行われ、S K 26に廃棄したものと思われる。

その他、S T 6、S T 14、S T 13、S T 12等それぞれ300点をこえる石器・剝片・碎片が出土したが、その搬入・移動・遺存状況は整理途中のため不明である。整理が進むにつれて、集落全体にどのように石器が供給——使用——廃棄されたかが明らかにされるであろう。

## 5. 結 語

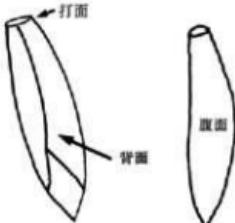
調査において石器製作の場を検出、多くの接合資料を得たことによって、橋上に居住した人々の石器製作技術の一端が解明された。住居跡の使用時期や廃棄後の状況、さらには埋廻の時期的分布、配石群の分析にともなって橋上の古代人の生活構造がさらに明らかになるものと思われる。

今後、この調査分析をもとに、橋上遺跡でみられた石器製作技術の地域的・空間的な研究を行なっていこうと思っている。

(石井浩幸)

### 「註釈」

- 1) 形態は旧石器時代の石刀と類似しているが、ここでは石刀状剥片の呼称を使用する。
- 2) 得られた石器の多くが、この石刀状剥片を使用する。
- 3)



- 4) ここでは石器加工の素材となった目的剥片の剥離技術における工程。
- 5) 目的剥片を素材として2次加工を施し、石器を仕上げる工程。

### ——参考文献——

- 1979 東北大学考古学研究室 「聖山」
- 1982 平安博物館 「野沢遺跡」
- 1982 山形県教育委員会 「うぐいす沢1次発掘調査報告書」
- 1982 赤沢威・小宮孟 「考古学の世界における相間について」  
「史学」 54-1 P57-73
- 1983 仙台市教育委員会 「茂庭遺跡」
- 1980 岩手県教育委員会 「東北縦貫自動車道発掘調査報告書V」
- 1978 鈴木遺跡調査会 「鈴木遺跡I」

## VI まとめ

### 1. 橋上遺跡にみる縄文集団の定住と移動

橋上遺跡の土器群は大木10～後期前葉（宝ヶ峰式）までみられる。大木10式期の土器は住居跡、土壤から多く出土したが、後期の土器は包含層中から出土し、住居内には多く認められなかった。これは、遺構確認が困難だったため後期の遺構面を除去、大木10式期の住居跡確認でせいいっぱいだったことにもよる。

よって、後期の土器は遺構との関係はつかめなかった。しかし、橋上遺跡の性格を理解するに、土器群のつながりを確かめることは重要な要素をもっている。それは、県内で今まで調査された中期末の集落跡で、後期初頭前葉まで存続した集落跡が非常に少ないからである。山形市熊ノ前遺跡、東根市小林遺跡、長井市長者屋敷遺跡、大歳村白須賀遺跡、米沢市八幡原No26遺跡などほとんど大木10式期には集落は廃絶、以後継続した形跡はみられない。複式炉も、大木10式の集落とともに消滅していく。橋上でも、後期の遺構面で複式炉は発見できなかった。

（註1）

縄文時代は狩猟採集の生活だったため、生活の条件が失われると移動を繰り返していたと思われる。長期の定着、あるいは人口の増加が食料資源を不足させる事態を招いたことは、容易に考えうる原因である。また、縄文人の行動のリズムとして、一時離れた場所に、また戻ることが計算されていたかもしれない。橋上遺跡を例に、縄文時代中期末から後期にかけての集団の定住と移動について考えてみることにする。

#### (i) 橋上遺跡にみる土器群の推移

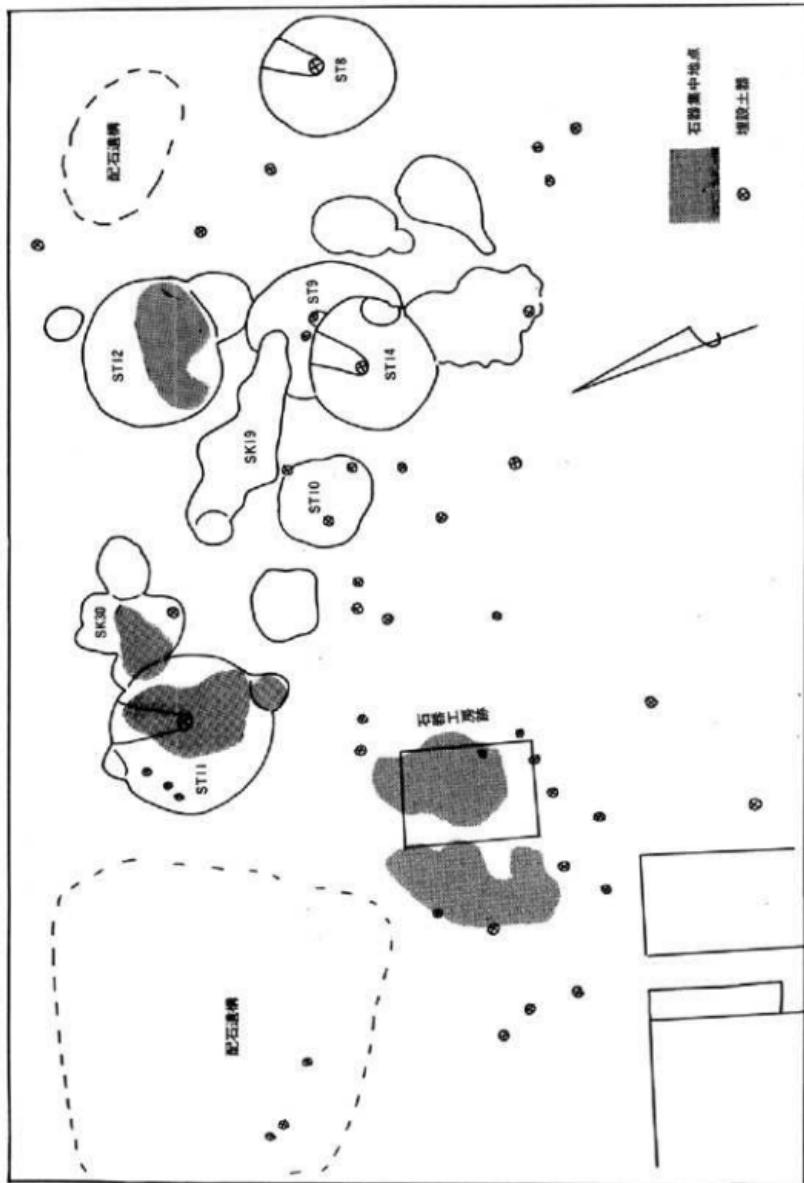
橋上遺跡では、埋蔵や住居跡出土の土器など多数の土器が得られた。

出土した土器を大まかに型式的に変遷を示すと第37図のようになる。土器の分析から、橋上で居住した縄文人の集団は大木10 b式期頃にこの地で生活を始めたようであり、以後、同一集団か違う集団かわからないが、宝ヶ峰式（註2）期（後期前葉）まで集落として利用されていたことがわかる。

県内での中期末から後期初頭の土器編年は不明なところが多いため、型式的断絶があったかはわからないが、少なくとも、後期への移行期と宝ヶ峰式の前あたりに型式的空白がみられそうである。土器を使用しない時期があったとは考えられず、集団の移動が予想される。宝ヶ峰式以後は、集団が居住した形跡は平安時代までない。

橋上の縄文人たちは少なくとも2回の移動をしていることになる。

第36图 石器集中分布图



## (2) 縄文時代の集団の移動と定住

第37図は橋上遺跡を例にして、集団の移動を概念的に表わしたものである。縦方向は、時間的推移で、横は地域（居住地）の推移を示す。同一集団か、異なる集団が何回か移動を繰り返し、何度か橋上にやってきたことだろう。

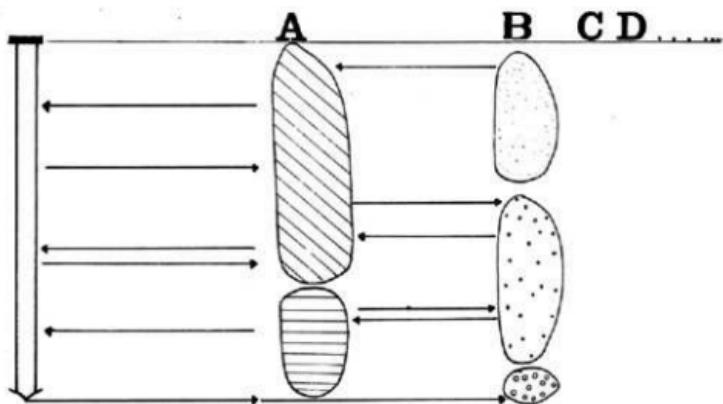
発掘調査において、大木10式期の住居跡は多くの廃棄と礫が投げこまれた形跡や、後で石器製作の場に転用されたことがわかった。また、後期の住居跡は、大木10式期の住居と切り合っているものが少なく、ある程度の堆積が存在したようである。第38図はS T9、S T14、後期の住居跡の切り合い、重なりを模式的に図示したものである。3→2→1の順に住居が作られている。出土した土器を見ても3（S T9）は大木10b式、2（S T14）は大木10c式、1は後期初頭であった。遺構の中でもある一定の堆積状況や切り合い重なり合いから、空白期間→移動期間が認められる。

橋上遺跡で移動、定住を考える前に明らかにしておかなければならぬのは、繁雑に行われた石器製作と多くの土鍤である。

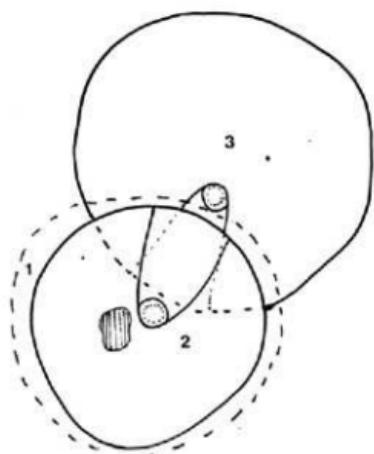
橋上で居住するために、あれだけの大量の剝片、碎片、石器が生産され、利用されたと考えるのは不自然といえる。繁雑に石器製作が行われたのは、そばにある月布川で、たやすく頁岩が採集できるためでもあろうか。製作された石器の多くは、移動の際も運ばれたと考えている。それは、山形県において頁岩の採集できる場所は最上川流域にかぎられるためである。頁岩の採集できない場所へ移動する場合、頁岩の原石、多くは石器が持ち運ばれるのは当然といえる。

橋上では多くの土鍤も注目された。月布川を漁場としたと思われ、今でも、アユ、ヤマメなど多く釣れるとのことである。当時は、サケやマスなども月布川をのぼってきたであらう。石錐類がイメージとして表わす肉類とともに魚類も一定の割合として指好されていたようである。このような傾向は移住先を川沿いに選択する可能性が高い。同時期の飯豊町萩生石箱遺跡や最上町水上遺跡でも多くの土鍤が得られている。（註3）

以上の点から、橋上の縄文人は繁雑に石器製作作業を行ない、生業として狩獵採集漁を行ない、魚類の依存度も高かったことが想像されよう。



第37図 集団の移動概念図



第38図 ST9・ST13後期住居跡  
切り合い模式図

日本  
G

秋田県

本

吹浦川村

吕海山(2230)

海

日向川

庄

最上川

内

赤川

丘

I

B

C

E

F

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

Q

R

S

T

U

V

W

X

Y

Z

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

#### (ア) 定住と領域

橋上遺跡は、月布川の河岸段丘上で両側に山が張り出しており、その間の低地の部分に立地している。遺跡の大きさや、出土遺物の量などから、母体的な性格をもつ集落と判断される。背後に朝日山系を望み絶好の狩猟採集場である。ここに、橋上遺跡を母村とした領域が存在し、キャンプサイトや中繼基地がもうけられ、朝日山系を舞台に食料確保のため活躍したのであろう。月布川上流及び朝日山系では昔から石鏃、石槍が採集されていることは、これを裏付けるものである。

#### (イ) 移動

現時点において、一集団の移動先を判断する方法はないが、ある程度条件を求めることが可能である。条件とは、

- 土器文様の特徴（範型）、共通性を追求する
- 同様な石器類、技術を求める
- 信仰関係の土製品の類似

などである。

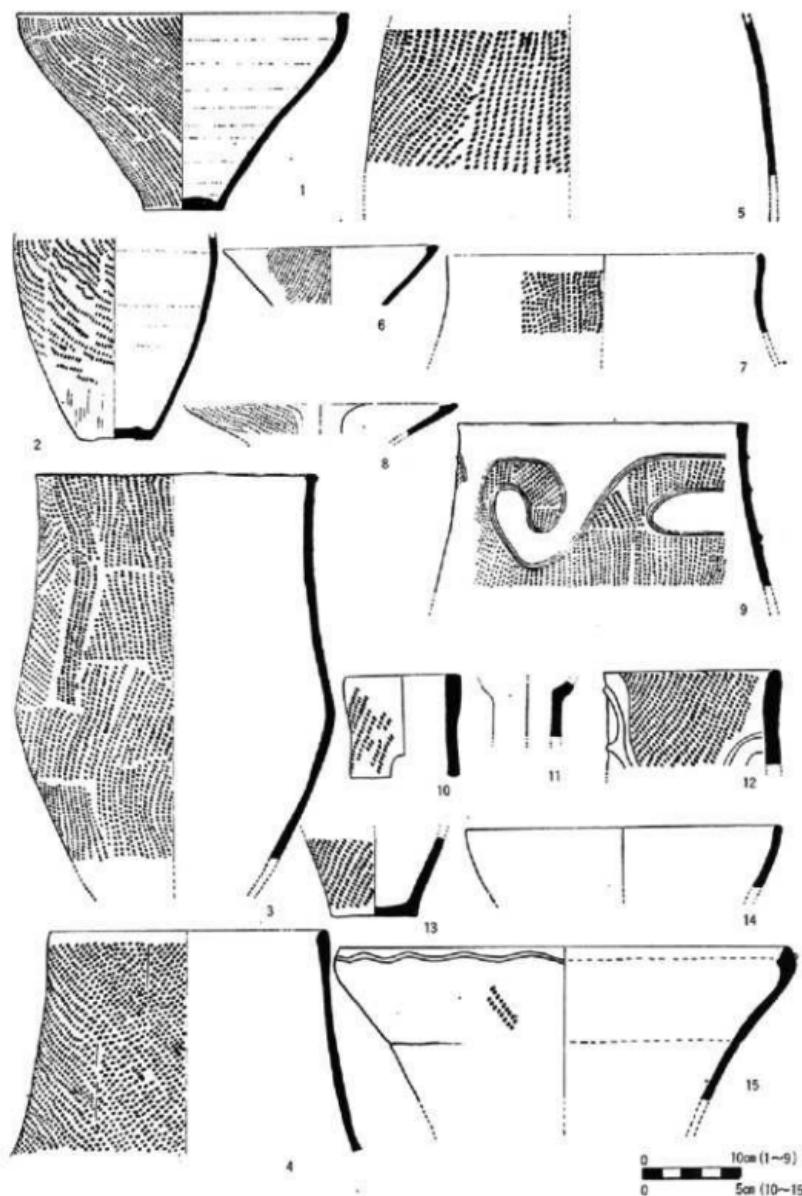
図4は佐藤禎宏氏が『さあべい3-3』「山形県における縄文領域論のための基礎作業」の図に一部加筆したものである。彼によれば、橋上遺跡はD支群に入る。図に示したように橋上の縄文人達は内陸盆地のいずれかに移っただろうが、上述した条件を満たすだけの調査例がなく、今後の課題となろう。

同様な分析は馬見ヶ崎川流域においても行ったが、領域論を展開するだけで、移動の背景や移動のリズムなどに関しては、言及できなかった。村山盆地、さらには内陸全体を通して、縄文時代の集団を検討する方向が求められよう。中期の遺跡数が多いことも、このあたりから解決できそうである。

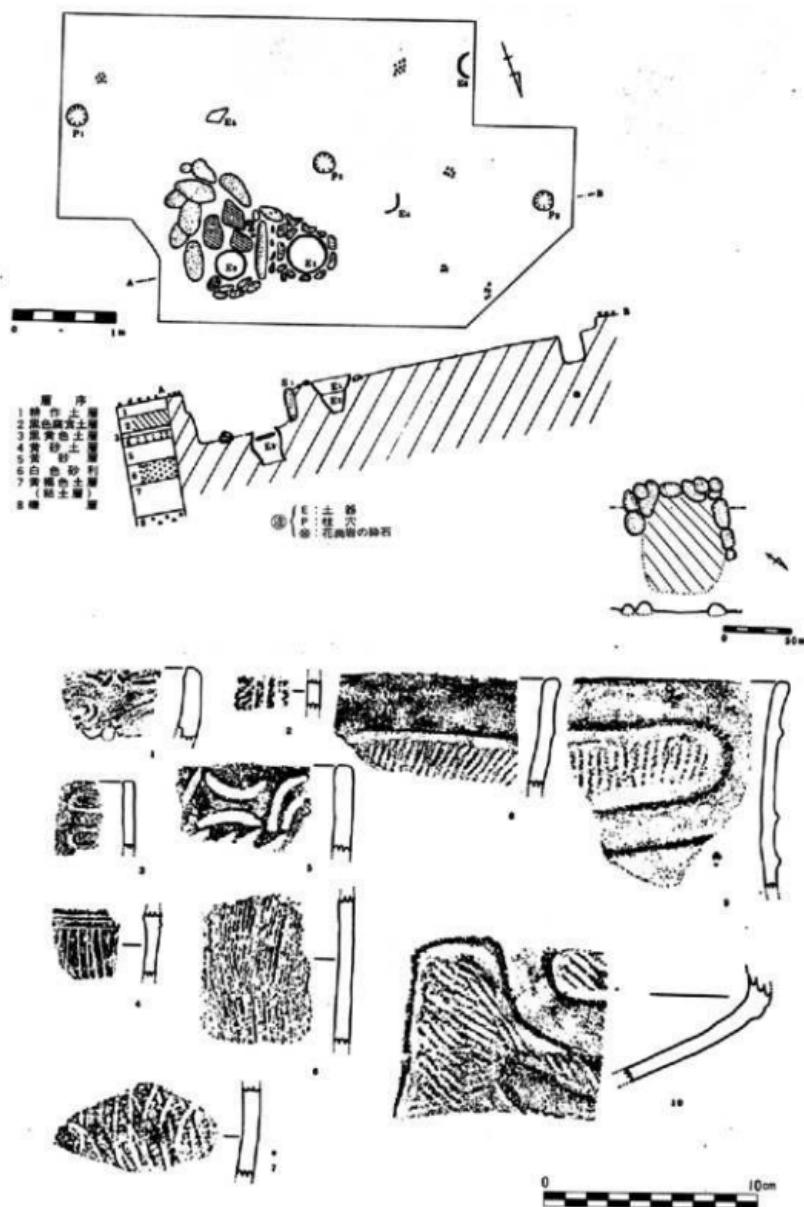
（橋上遺跡と同時期の例として、寒河江市向原遺跡をあげておく。図5・6）

#### （註　駅）

- (1) 発見された複式炉をもつ住居跡はすべて大木10式期である。
- (2) 仙台湾での調査の増加で新しい型式が設定されているが、ここでは従来使用されている型式名を使用した。
- (3) その他、山形市熊ノ前遺跡、村山市中村A遺跡でも多くの土器がみつかっている。



第40図 寒河江市向原遺跡出土土器 (1)



第40図 寒河江市向原遺跡出土土器 (2)

## 2. 遺跡について

今回の調査では、集落跡の全容を明らかにすることはできなかったが、その一部の様相を把握し得た。まず第1に検出できた住居跡14棟（一部切り合いがみられるが）は縄文時代中期大木10式期に比定できるが、広場を中心に環状に住居跡が立ち並ぶ様子がうかがえた。この広場には土壙・埋甕群以外には何の遺構もみられないことから集落の中心部と考えられる。同じような形態の集落跡は山形市熊ノ前遺跡・長井市長者屋敷遺跡があげられることから、縄文時代中期末の集落は広場をとりまく環状集落と考えて良さそうである。次に大木9式、10式期に特徴的にみられる「複式炉」についてである。橋上遺跡の住居跡に伴う炉は、東根市小林B遺跡、村山市中村A遺跡、山形市熊ノ前遺跡、長井市長者屋敷遺跡などの複式炉と比較してみると、造作が粗雑でやや小形の傾向がある。さらに第9号住居跡は「石組炉」を設置してあったりする。これらのことことが集団の移動とどう結びつくのかは、これからの課題である。

次に、今回の調査で得られた石刃様剝片についてである。これらの剥片が住居跡の確認面から検出されており、堆積層（1万年以前）の地山からの出土が全くなかったという事実である。さらに接合資料も得られており、大木10式期に製作された可能性が非常に高くなってきた。同じような資料は、大江町望山・寒河江市向原・西川町宝田遺跡などの縄文時代中期末の遺跡からも採集されている。また、この石刃様剝片を素材として搔器・石小刀・打製石斧などを制作しており、形態だけによる石器の年代区分は慎重に分析をする必要を感じさせられた。

信仰関係では、硬玉製の大珠の出土である。出土地点は集落跡の南側でS T 1とS T 2の間であるが、層位は第III層である。大木10式期の住居跡確認面は第VI層上面であるために、同時期と断定できない面もあるが、後期の土器が余りみられないことから可能性はある。出土例は本県ではなく、北陸地方にみられることから、移入したものと考えられなくはない。しかし、北陸系の土器が検出されていないので、これから検討課題である。埋甕の性格については、単独で出土する場合と1つのまとまりを持って出土する場合があるが、全体的に集石・配石遺構に接近している。底部を下にしているが墓址と考えられるようである。ただ、集石・配石遺構の性格を明らかにしえなかつたことが、埋甕性格を決めかねる要因の一つであった。

(石井浩幸・高橋郁夫)

### 参考・引用文献

1. 「山形県史 考古資料」 1969. 山形県
2. 「縄文土器大成 3」 1981. 講談社
3. 「縄文文化の研究 4」 1983. 雄山閣
4. 「縄文文化の研究 7」 1983. 雄山閣
5. 「縄文文化の研究 9」 1983. 雄山閣
6. 「長者屋敷遺跡」 1979. 長井市教育委員会
7. 「米沢市八幡原工場跡地埋蔵文化財調査報告書」 1975. 米沢市教育委員会
8. 「山形県史 第1巻 原始古代・中世編 第1集」 1982. 山形県
9. 「山形県埋蔵文化調査報告書 第9集」 1976. 山形県教育委員会
10. 「小林B遺跡」 1977. 山形県教育委員会
11. 「考古学資料図録」 1982. 東北大学文学部
12. 「世界陶磁全集1・2」 1979. 小学館
13. 「砂川A遺跡」 1984 朝日村教育委員会
14. 「村山市史編集資料第9号作野遺跡遺物集成」 1981. 村山市
15. 「弓張平B遺跡 第3・4次発掘調査報告書」 1979. 山形県教育委員会